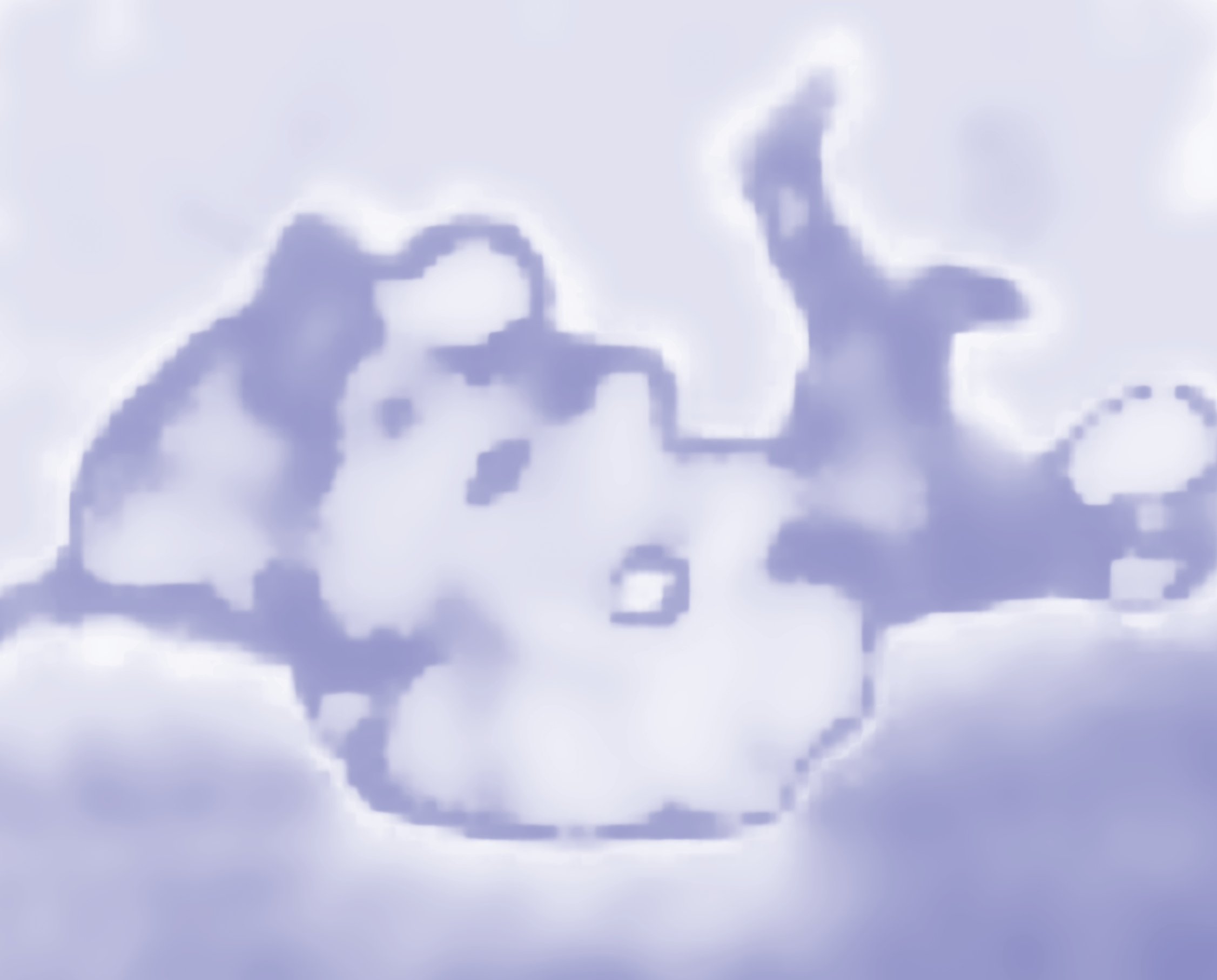


KYOTO INTERNATIONAL PERFORMING ARTS FESTIVAL 2016 SPRING

Kyoto International Performing Arts Festival 2016 SPRING



# KYOTO EXPERIMENT



ロームシアター京都オープニング事業

**KYOTO EXPERIMENT 2016**

京都国際舞台芸術祭



SPRING

## 目次

ごあいさつ .....	4
ディレクターズノート 橋本裕介 .....	6
ダヴィデ・ヴォンパク .....	12
地点 .....	16
チョイ・カファイ .....	20
松本雄吉×林慎一郎 .....	24
大駱駝艦・天賦典式 .....	28
チェルフィッチュ .....	32
トリシャ・ブラウン・ダンスカンパニー .....	36
マヌエラ・インファンテ/テアトロ・デ・チレ .....	40
足立智美×contact Gonzo .....	44
ボリス・シャルマツ/ミュゼ・ドゥ・ラ・ダンス .....	48
researchlight .....	52
ショーケース「Forecast」 .....	58
FRINGE「オープンエントリー作品」 .....	61
関連イベント、提携プログラム .....	64
フェスティバル・ミーティングポイント、ホテルプラン .....	66
開催クレジット .....	72
チケット .....	74
会場アクセス .....	76
カレンダー .....	78

## Contents

Greetings .....	4
Director's Statement Yusuke Hashimoto .....	6
David Wampach .....	12
Chiten .....	16
Choy Ka Fai .....	20
Yukichi Matsumoto & Shinichiro Hayashi .....	24
Dairakudakan Temptenshiki .....	28
chelfitsch .....	32
Trisha Brown Dance Company .....	36
Manuela Infante / Teatro de Chile .....	40
Tomomi Adachi & contact Gonzo .....	44
Boris Charmatz / Musée de la danse .....	48
researchlight .....	52
Showcase: Forecast .....	58
Fringe: Open Entry Performance .....	61
Related Events, Partner Program .....	64
Festival Meeting Point, Hotel-Festival Packages .....	66
Credits .....	72
Ticket Information .....	74
Access .....	76
Calendar .....	78

## ごあいさつ

「目の前にはいつも何も無い。ただ前に向かって身心をぶつけて挑む瞬間、瞬間があるだけ」。

日本を代表する芸術家、岡本太郎さんの言葉です。

京都国際舞台芸術祭に参加される世界各国のアーティストの皆さんも、同様の姿勢で新たな芸術を創造する挑戦を続けてこられたことと存じます。第6回目を迎える本芸術祭を、本年も多彩なプログラムにより開催できますことは私にとりまして大きな喜びです。開催に御尽力いただいた森山直人実行委員長をはじめ実行委員会の皆様、並びに全ての関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

2016年1月にリニューアルオープンした、ロームシアター京都のオープニング事業にも位置付けられている今回の芸術祭。生まれ変わった「文化の殿堂」の船出を盛大に祝う場になるとともに、御来場の皆様を巻き込んで新たな芸術を生み出す実験の「舞台」となり、その成果が世界中に発信されますことを心から願っています！

京都市長 門川大作

いよいよ6回目のKYOTO EXPERIMENTが開幕しようとしています。しかも、今回は「ロームシアター京都」のリニューアルオープンという記念すべきタイミングにあっています。普段は秋に行われているのに、今回だけは春の開催となっているのもそのためです。京都における新たな劇場文化のスタートを喜びつつ、このフェスティバルもまた、次の一步を踏み出すのだという思いを、実行委員長として、大きな期待とともに囁みしめています。

「フェスティバル」とは、文字通りには「お祭り」です。しかし、漠然とした「お祭り気分」に浸ってられるほど、現代の世界は甘くありません。万博やオリンピック、サッカーワールドカップ・・・そうした肥大化しすぎたメガ・イベントが、いま大きな歴史的岐路に立たされていることは誰もが知っています。だからこそ、KYOTO EXPERIMENTが歴史的・社会的な役割を最大限に果たすためには、明確な目標を持たなければなりません。その目標とは、一にも二にも、次代を担う「若い世代」にとっての、真に刺激的な「場」の創出であるべきだと、私自身は確信しています。

6回目を迎えたフェスティバルも、徐々に、独特の「顔」を持ちつつあります。

たとえば、今年の公式プログラムもそうですが、いまダイナミックに変貌しつつあるラテンアメリカ諸国の「現代演劇・ダンス」を、これほど継続的に紹介しつづけている舞台芸術祭は、アジア諸国を見渡してみてもそうはありません。

舞台芸術のみならず、複数のメディアを用いた「創造」的なアートに関心を持つすべての人たちが、「世界」に漲る創造力の魅力を満喫していただければ、これに勝る喜びはありません。開催にあたり、今年もご協力賜りましたすべての皆様に、心から御礼申し上げます。

京都国際舞台芸術祭実行委員長 森山直人

## Greetings

“In front of you, there is always nothing. The moment you just go forward and try to smash into your mind and body, there is only the moment.” These are the words of Taro Okamoto, one of Japan’s preeminent artists.

The artists taking part in Kyoto Experiment hail from all over the world and endeavor to create new art in the same way as this. As we welcome the sixth festival, I am overjoyed that we can once again organize such diverse and vibrant programs. I wish to express my heartfelt gratitude to Naoto Moriyama and the other members of the Executive Committee for their tireless efforts, as well as all those involved in the festival. Kyoto Experiment 2016 Spring is also part of the Opening Program of the newly renovated ROHM Theatre Kyoto, which reopened in January. As well as forming a great celebration of the launch of this transformed “hall of culture,” we hope that the festival is a stage for experiments in creating new art that embraces audiences, and whose results can be conveyed all over the world.

Daisaku Kadokawa, Mayor of Kyoto

The sixth Kyoto Experiment is about to open. Moreover, this festival will also form part of the program celebrating the reopening of ROHM Theatre Kyoto. For this reason, the usually autumn festival will happen this time in spring. Besides my joy at the birth of this new theater culture in Kyoto, as the Chairman of the Executive Committee, I also have great expectations for the next step the festival will take.

As the word suggests, a festival should be “festive.” However, the contemporary world needs something more than simply immersing people in a nebulous festive spirit. From the World Expo to the Olympic Games and FIFA World Cup, we are all aware how these gargantuan “mega events” are today position at great historic crossroads. And it is precisely for this reason that Kyoto Experiment must have a clear goal in order to fulfill its historical and social role to the maximum possible extent. I am certain that this goal should above all be creating a truly stimulating site for younger generations, the people who will be the next leaders of society.

As the sixth festival prepares to open, it is gradually developing its own unique character. For example, we can see this in the Official Program: no other performing arts festival in Asia continues to present the constantly changing contemporary theater and dance scene from Latin America. Nothing can surpass the happiness I feel when everyone interested not only in the performing arts but all forms of creative art across multiple media fully enjoys the creativity that spreads across the globe.

I wish to express my deep gratitude to everyone who has helped organize this year’s festival.

Naoto Moriyama  
Chairman, Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee

## ディレクターズノート

——この歴史的意識は一時的なものに対する意識であり、永続的なものに対する意識であり、また一時的なものと同永続的なものを一緒に意識するもの

(T.S. エリオット『伝統と個人の才能』／矢本貞幹 訳)

これまで秋に開催してきたKYOTO EXPERIMENTは、今回初めて3月に開催することになりました。この6回目のフェスティバルを迎えるにあたり、開催までに少し時間が空いたことで、プログラムの構成や趣旨について改めて考えを深めながら準備することができましたので、それをご紹介しますと思います。

公式プログラムですが、いくつかの軸に沿って紹介することができます。ひとつめの軸は、トリシャ・ブラウン・ダンスカンパニー、大駱駝艦、そして松本雄吉を紹介することで、現代舞台芸術の源流を辿る試みです。1960年代～70年代にかけ、ブラウンが拠点にしたニューヨークと同時期の東京はその動向がパラレルだと言えるほどに、分野の境目なく様々な才能が集い、そして互いに共同作業を行い、その後のそれぞれの芸術領域や社会にも大きな影響を及ぼしました。そこに、過去の振付家と対峙することをひとつのテーマに掲げてきたフランス・ダンス界の寵児ボリス・シャルマツを配置することで、時代のある大きな流れを意識させたいと思います。

二つ目の軸は、そうした第一世代に続き、次代を担う存在になりつつある作家たちの共同作業による新作物です。地点と音楽家三輪真弘による二度目となる取り組み、チェルフィッチュと美術家久門剛史の初顔合わせ、そして音楽家足立智美とパフォーマンス集団contact Gonzoに加え子どもたちが登場する新作は、次代を牽引していくという野心と責任感に溢れる力強い流れが、ここから立ち上がるはずで。

三つ目の軸は、継続的な視点に立った国際交流プロジェクトとして、作品だけでなくアーティスト自身の活動をフォローしていく試みです。これまでに様々な形でKYOTO EXPERIMENTに関わってきたチョイ・カファイやダヴィデ・ヴォンパクは、新作を携えて再び京都に戻り、各々にプロジェクトを展開させていきます。そして初来日となるチリの新鋭マヌエラ・インファンテの作品発表を機に、チリ・スペイン語圏の演劇と長期的に関わるプロジェクトをスタートさせます。

最後の軸は、researchlightと称する新たなリサーチプロジェクトです。これまでもKYOTO EXPERIMENTはいわゆる舞台芸術に限らず、美術や音楽などのジャンルを越境しながら一つの言葉で区別することの出来ない、可能性に開かれた表現を紹介してきました。それを更に一歩押し進めるために、ものごとを計画、設計するという意味で芸術と隣接するジャンルでありながら、そこに人々の経験が織り込まれてはじめて生き生きと存在する、デザインや建築にも内容を広げていきたいと思えます。

そう考えたのは、京都に新たな芸術の拠点、ロームシアター京都が誕生することと無縁ではありません。こうした施設は絶えず、社会との関わりについて問われることとなります。そんな中、「いかに社会の役に立つか」というベクトルだけで考えることを、そろそろ止めに

したいのです。なぜならそのベクトルが、「芸術が上位で日常や社会が下位である」という芸術に関わる側がでっぴり上げたつまらない考えに支配されているように感じられるからです。こうした施設が、人間の息づかいを感じられるような生きられた空間として存在意義を持つとするならば、むしろ“生きられる”ために、食欲に人々の日常の営みや経験を織り込んでいくことが大切ではないでしょうか。いっそベクトルを逆にして、日常や社会が芸術に食い入るような可能性を開いておくこと、それが今必要だと考えます。

さて、“京都の実験”という名を冠したこの舞台芸術フェスティバルにとって、“新しさ”は常に意識せざるを得ないところですが、何が新しいのかということと同時に、どれほどの範囲の時間感覚で新しいのかということの問題にしなければならないと改めて考えています。

劇作家・演出家の太田省吾はかつてこのように書きました。

「舞台芸術は、その表現の生命を、生成と同時に消滅していくところにおいている。またその素材を、生きた人間とするところで成り立たせる。いわばわれわれの生の〈宇宙=永遠〉の中の〈一瞬〉に対する抗いを基底とした表現ではないだろうか。」

ただ、現実の私たちの生活は、めまぐるしく移ろう日々や時代を中心にして、太田の言うような〈永遠〉の相を、どうも遠ざけている気がしてなりません。かつてポーランドの演出家タデウシュ・カントルが語った「芸術とは現実に対する応答である」という考え方は、ある種の破壊力を持っていました。その言葉を意識しているかどうかは別にして、同時代の表現においては、芸術全般の傾向として、時代を、そしてそこで起こった問題（戦争や災害のような）をどのように捉えるかという反射神経が求められる場面も少なくないからです。そうして作家や私たち企画側もまた、その問題を表現に反映させたいという強い誘惑に駆られてしまうことも確かです。

しかし、そうした反射神経に頼ることだけが、同時代の感覚を鋭敏につかむ方法なのかと疑問にも思えます。ここKYOTO EXPERIMENTで追求しようとしている表現が、同時代に生まれたものとして（たまたまではなく）必然性をもって存在するためには、〈永遠〉と〈一瞬〉を行き来するような、ある幅を持った時間感覚が必要なのではないか、そのように感じています。

こうした時間感覚を意識したとき、これまでの5年を経た今を折り返し地点として次の5年を射程に収めることができ、それを経た10年という時間はひとつの時代を画することになるのではないかと、そうしてはじめて見えてくるものがあるのではないかと考えています。公式プログラムを圧倒する数のフリンジ企画「オープンエントリー作品」、そして内側に異なる視点を取り入れるために新進のキュレーターによりプログラムされたショーケース「Forecast」、これらも含めて行われる6回目となる今回は、KYOTO EXPERIMENTの未来が指し示されています。是非たくさんプログラムにお越し頂き、それぞれのやり方で楽しんで頂きたいと思えます。未来と楽しみ方は開かれています。

KYOTO EXPERIMENT プログラムディレクター 橋本裕介とスタッフ一同

## Director's Statement

*Historical sense [...] is a sense of the timeless as well as of the temporal and of the timeless and of the temporal together...*

T.S. Eliot, *Tradition and the Individual Talent*

Kyoto Experiment, until now an autumn festival, will be held for the first time in the spring. For this sixth festival, we had some extra time to prepare, which gave us space to think anew about the structure and meaning of the programming. I would like to introduce this here.

The Official Program can be presented according to several axes. The first is an attempt to trace the headstream of contemporary performing arts through the work of Trisha Brown Dance Company, Dairakudakan, and Yukichi Matsumoto. During the 1960–1970s in New York where Brown was based, the situation almost parallels what happened in Tokyo, with a wide range of talents coming together across fields to work collaboratively, greatly influencing their respective later artistic fields and society as a whole. By positioning Boris Charmatz, the darling of the French dance scene who has previously confronted the work of past choreographers, as part of this, we want to make audiences conscious of one of the major trends of our times.

The second axis is a collection of new works created collaboratively by leading artists who have come after this first generation. In the new works, which see the theater company Chiten team up again with composer Masahiro Miwa, chelfitsch partner with visual artist Tsuyoshi Hisakado, and composer Tomomi Adachi join performance group contact Gonzo and children, we can clearly see powerful currents abundant in ambition and a sense of purpose as pilots of the next generation.

A third axis is an attempt to follow, rather than their work, the personal activities of artists as a sustainable, international exchange project. Choy Ka Fai and David Wampach, who have both been previously associated with Kyoto Experiment in various ways, return to Kyoto with new works to develop their projects. Chile's latest star Manuela Infante is also bringing her work to Japan for the first time, marking the start of a new long-term project engaging with Chilean and Spanish-language theater.

The final axis is a new research project called researchlight. Kyoto Experiment has always transcended the borders between performing arts, visual art, and music to present a wide range of work that is full of potential and cannot be divided by labels. In order to take this a step further, we want to broaden our programming to include also design and architecture, which, in the sense that they plan and design things, are contiguous with the arts and into which people's experiences are vividly interwoven.

In this sense, this is not unrelated to the opening of ROHM Theatre Kyoto as a new hub for the arts in Kyoto. This facility will continually be questioned regarding its involvement with society. As part of this, I want to stop thinking just about the vec-

tor of whether or not it is useful to society. The reason is that this vector feels like it is controlled by that dreary idea cooked up by those involved with the arts that art somehow exists "above" society. If this facility is to have meaning as a lived-in space with a sense of humanity, then surely it is vital to interweave avidly the daily actions and experiences of people in order for it to be "livable." Turning the vector on its head, what is needed now is to open up the possibilities for the everyday and society to penetrate into the arts.

So while a festival that calls itself "Kyoto Experiment" cannot help always being conscious of the "new," it must also simultaneously explore the issues of what is "new" and within what scope of time does something count as new.

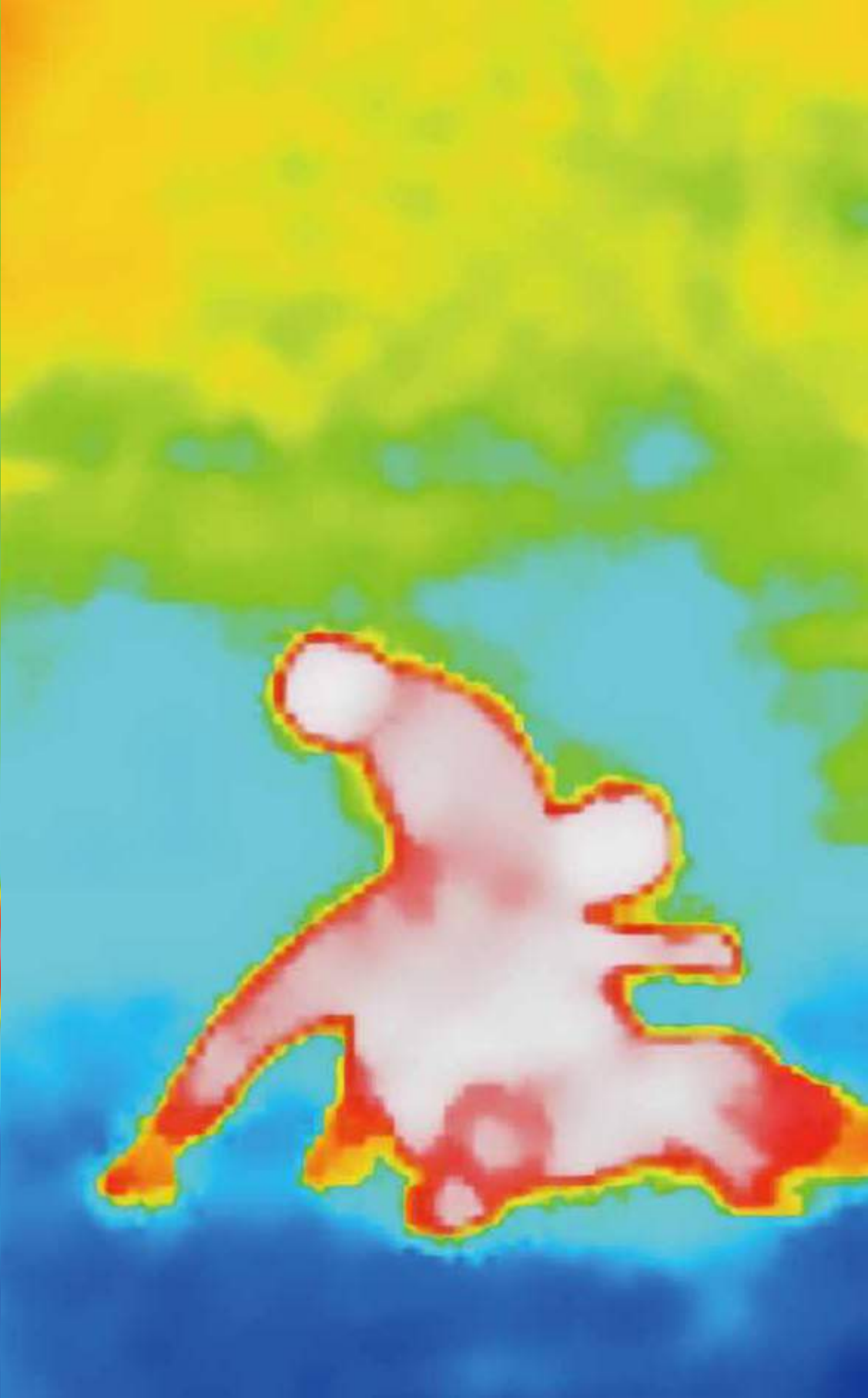
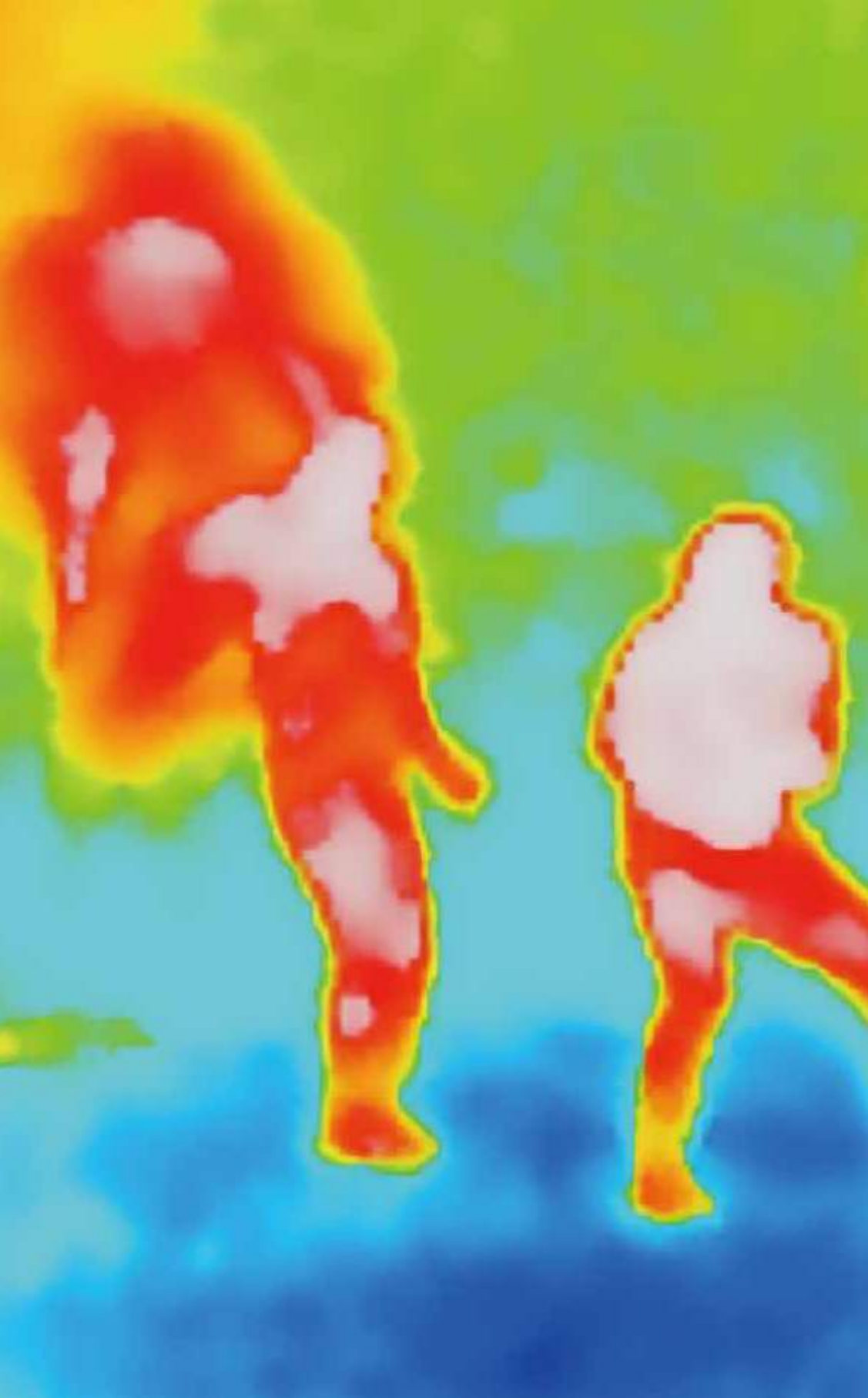
The playwright and director Shogo Ohta once wrote the following: "The performing arts place the anima of expression in simultaneous generation and extinction. Its materials are made possible at a place involving a live humanity. In a sense, is artistic expression not rooted in a conflict with the moment that exists within the universe and eternity of our lives?"

However, in reality our lives, constantly changing and evolving day by day, can't help but feel alienated from the "eternity" that Ohta professes. Tadeusz Kantor's way of thinking, that the arts are a response to reality, possesses a kind of destructive power. This is because, regardless of whether we are aware of the word or not, contemporary artistic expression frequently demands reflexes that ask how we perceive the era and those problems (war, disaster) that arise in it as the direction of the overall arts. And so it is clear that both artists and us programmers are seized by the strong temptation to reflect these problems in art.

However, I wonder if merely relying on such reflexes is a methodology that can astutely grasp the sensibility of the zeitgeist. In order to exist with certainty, rather than coincidentally, as something born out of the contemporary, the art that Kyoto Experiment is attempting to pursue requires a sense of time with some bandwidth, one that traverses between the eternal and the momentary.

When I became aware of this sense of time, I wondered if I could lock down the next five years, with today, five years having already passed, as a turning point and this time span of 10 years as one period. And in doing so, would there be things that we could see for the first time? For our sixth installment, comprising also the Open Entry Performances fringe program that actually far outnumbers the Official Program, as well as the Showcase: Forecast program by two budding curators who will weave alternative perspectives into the festival, we can see indications of the future of Kyoto Experiment. I hope audiences enjoy the many programs we have organized in their respective ways. Both our future and these ways to enjoy the festival are open.

Yusuke Hashimoto (Program Director, Kyoto Experiment)  
and the Kyoto Experiment team





# ダヴィデ・ヴォンパク

## David Wampach

● MONTPELLIER, FRANCE



© Martin Colombet

## 渴望

### URGE

🕒 55min (日本初演 / Japan Premiere)

📅 3/5 (Sat) 18:00-  
3/6 (Sun) 20:00-  
3/7 (Mon) 20:00-

🗨️ 関連イベント: アーティストトーク

Related event: Artist talk → p.64

### カニバリズムという人間としての臨界点から、 非日常的な感覚に宿る、肉体の野性へと迫る

この数年、世界各地のダンスフェスティバルや劇場に招聘されて作品を発表するなど、これからのフランス・ダンス界を担う存在としてますます注目を集めているダヴィデ・ヴォンパク。2011年にレジデンスアーティストとして京都のヴィラ九条山で行った6カ月の滞在制作以来、日本を度々訪れ、今回の来日に際しても寺山修司のリサーチを予定するなど、日本のアングラ演劇における肉体のあり方にも関心を寄せている。

日本初演となる『渴望(原題: URGE)』は、カニバリズムをテーマとして掲げたパフォーマンス。通常、「食人」と訳されるカニバリズムは、人間としての極限の原始的行為であり、社会的良識に背くタブー、そして他者を私物化する行為ともいえる。この数年、「儀式」や「トランス」といった行為を探求しているヴォンパクにとって、センセーショナルにも思われるカニバリズムとは何か。取り澄ました身体は舞台上に引きずり出され、あられない肉体として観客の前に立ち現れる。「カニバリズム」を切り口に、作品はあらゆる関係性に内包される欲動やほとぼしる感情について語りかけることになる。

### The physical wildness that resides in the extraordinary, witnessed from the edge of humanity that is cannibalism

David Wampach has built a reputation over recent years as an artist to watch, presenting his work at major festivals and theaters around the globe. Following his six-month creative residency at Kyoto's Villa Kujoyama in 2011, Wampach developed an interest in the physicality of Japanese *angura* (underground) theater, and plans to research the work of Shuji Terayama on this new visit to Kyoto and Tokyo.

Here presented in Japan for the first time, *URGE* tackles the theme of cannibalism. While a social taboo, cannibalism is nonetheless an extremely primitive human act: one of appropriating another person. Wampach has continued to explore the acts of trance and ceremony, and here takes on a seemingly sensational theme as a pretext for raising questions. On stage, the demure human body becomes something physically extraordinary. Starting with the topic of cannibalism, Wampach finally talks about desire and overflow, which are present in every kind of relationships.

📍 ロームシアター京都  
ノースホール  
North Hall, ROHM Theatre Kyoto

👤 12歳未満は保護者の同伴が必要  
Children under 12 must be accompanied by  
a parent or guardian

振付: ダヴィデ・ヴォンパク  
構成・出演: マリー=ベネディクト・カズヌーフ、  
ミッキー・マハール、オリヴィエ・ミュラー、ローラ・  
ルビオ、タマル・シェレフ、ダヴィデ・ヴォンパク  
衣装: レイシエル・ガルシア  
照明デザイン: ミンナ・ティッカネン  
舞台監督: ガエタン・ルブレ  
アーティストックコラボレーション: アイナ・  
アレグレ、ユネス・アンゼイン、ミッコ・ヒュンニネン、  
ダリラ・カーテル、ダヴィデ・マルケス、アン・  
エロディ・ソーリン、クリスティアン・ウブル  
プロデューサー・ツアーマネジメント: サビーン・  
サイフェルト  
制作: アントワヌ・ピエ  
製作: Association Achles  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT、ル・クラ  
テール・セーヌ・ナショナル・ダレス、モンペリエ・  
ダンス・フェスティバル 2015(アゴラ、シテ・アン  
テルナショナル・ド・ラ・ダンスにおける滞在制作)、  
クンストラハウス・ムーゾントゥルム・  
フランクフルト、ル・ファール・サントル・コレグラ  
フィック・ナショナル・デュ・アーヴル・オート=  
ノルマンディー、ミュゼ・ドゥ・ラ・ダンス/レンヌ・  
アルター・ニュ国立振付センター、ナント国立振  
付センター(スタジオ助成)  
助成: ADAMI, CND - un centre d'art pour  
la danse, accueil en résidence、在日フランス  
大使館/アンスティチュ・フランセバリ本部  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Choreography: David Wampach  
Interpretation: Marie-Bénédicte Cazeneuve,  
Mickey Mahar, Olivier Muller, Lola Rubio,  
Tamar Shelef, David Wampach  
Costume: Rachel Garcia  
Lighting design: Minna Tiikkainen  
Stage manager: Gaëtan Lebre  
Artistic collaboration: Aina Alegre, Youness  
Anzane, Mikko Hynninen, Dalila Khatir, David  
Marques, Anne Elodie Sorlin, Christian Ubl  
Producer and tour management: Sabine  
Seifert  
Administration: Antoine Billet  
Production: Association Achles  
Co-produced by: Kyoto Experiment, Le  
Cratère - Scène nationale d'Alès, Festival  
Montpellier Danse 2015 - in residency at  
the Agora, cité internationale de la danse,  
Künstlerhaus Mousonturm, Le Phare - Centre  
chorégraphique national du Havre Haute  
Normandie, Musée de la Danse - Centre  
chorégraphique national de Rennes et de  
Bretagne, Centre chorégraphique national de  
Nantes in the frame of accueil studio  
With the support of: ADAMI, CND - un centre  
d'art pour la danse, accueil en résidence and  
Ambassade de France/Institut français  
Presented by: Kyoto Experiment



## レビュー

### 肉体と感覚の叫び

ダヴィド・ヴォンパクは、これまで一貫して身体をテーマに数多くの作品を発表しており、反復する鼓動音や過呼吸などを使ったスタイルを守り続けている。2011年にモンペリエ・ダンス・フェスティバルで上演された『SACRE』は忘れ難い作品であった。この作品のすべてのドラマは、陶酔状態に陥ったダンサーが発する呼吸の、極限の緊張から生まれていた。

今回の『渴望』では、4人のダンサーが舞台上で涎(よだれ)を垂らしている。(もう2人は舞台上から4人を見下ろしている)ダンサーたちがまとうネオブレ(合成ゴム)でできたコンビネゾン、この未来主義的のハイパークリーンな衣装の上を、涎が糸を引いて伝う様は衝撃である。しかしこの糸を引く涎、これこそが、社会生活を営むために正しい振る舞いをするようにつけられ抑圧されてきた我々の本来の姿、“原始的な肉体”のシンボルなのである。

涎を垂らすダンサーたちは、咀嚼、嚥下、欲望による唾液分泌といった行為を(腹のグルグル音、歯のガチガチ音と共に)始め、それを続けながら世界と関わりをもっていく。これは作品を通してのテーマでもあり、人食い習慣についての近代的思想、特にオズワルド・デ・アンドラーデの著書『食人宣言』に由来する、具体的で一貫した考察に基づいている。

ヴォンパクはこの『食人宣言』を、とりわけ性的欲望のメタファーとして解釈しており、それは大食いの欲、食い尽くしの欲、他者嚥下(食人)、混じり合った肉体を意味する行為で表現している。そしてこれらの行為を行うことで表れるダンサーたちの欲望の露出した表情、口を過度に使うことで歪められた顔、ほとばしる汗や唾液がこの作品の原動力となっているのだ。

舞台上のダンサーたちの行為は、あたかも中世の悪魔的な激しいカーニバル、あるいは度を越したカーマストラのようであるが、振付や作品構成は見

事で非の打ちどころがない(例えばローラ・ルビオとヴォンパク自身の横で踊るミッキー・マハールとタマル・シェレフの位置構成が素晴らしい)。さしずめ、完璧な美であるギリシャ壺のコレクションが地獄の殺伐渾沌とした美術館の収蔵庫に置かれているイメージ、といったところであろうか。ヴォンパクの熱く官能的な演出によって、一種常軌を逸した動きやエレメント(体のねじれや歪み、発汗、臭気)が、肉体の始原的な欲望へと姿を変えるのである。

オリヴィエ・ミュラーとマリー＝ベネディクト・カズヌーヴは見事なまでの不可思議さで、下方で繰り広げられる肉体と欲望の氾濫に鋭い疑問の視線を投じる。冷ややかに、見張り番のように立ち、むき出しの尻を宙に浮かせたカテドラルのガーゴイル(雨水の排水口)よろしく居座っている。通常の習慣通り体を隠さないと、何を見せることができるのか、何を見ることができると、ここではこの二者間に生ずる緊張感、ショックが演出されている。舞台芸術の分野では、性的な行為を直接演出することはいまだに問題視されているが、これは非常に喜ばしいことである。この“障害”のおかげで逆に身体表現の様々な可能性、想像が広がるからだ。『渴望』では、見事な独創性、そして軽妙なユーモアとなって表れている。

見る側にとっては、タブー感に囚われてしまうこの“表現”が耐えがたいものに思えるだろう。とりわけ涎を垂らす体、この涎の存在が、ノーマルな性的関係の領域からは逸脱していると感じさせるのかもしれない。しかしこの作品では、つけられ自ら抑圧してしまった性の欲動が、エネルギーな演出のもと、解放され、再び姿を現したとも言えるのではないだろうか。

ジュラル・マイエン「肉体と感覚の叫び」  
mouvement.net <http://www.mouvement.net/critiques/critiques/ecrire-a-corps-et-a-sens> (2015年7月9日掲載、2015年12月25日閲覧)より抜粋

## Review

### Writings on Body and Sense

David Wampach has already developed many pieces that follow a single corporeal mechanism, never abandoning it — for example repetitive grands battements, or hyperventilation. We have yet to forget his piece *SACRE* (in 2011, already at Montpellier Danse). In this work, the entirety of the dramaturgy was born from an extreme tension in the breath, which pushed the performers to the brink of inebriation.

Today, when the four performers of *URGE* take the stage (under the gaze of two others, sentinels who oversee them), they are drooling. As it makes contact with their neoprene jumpsuits, futuristic and impeccably tailored, the image is striking. These dripping stains evoke from the very beginning an organic and archaic language of signs, habitually repressed by the educative systems that define the correct behavior of the body in society.

In *URGE*, when the performers drool, it is because they take on the world through an activation (also auditory, with growling and the gnashing of teeth) of the masticating, swallowing, and salivating of desires. This principal will be worked through to the end. This articulates with a very consistent reflection departing from modern theories of anthropophagy, notably in the genealogy of Brazilian Oswald de Andrade's *Manifesto Antropofagia*.

Wampach proposes a corporeal translation of this work in which anthropophagy emerges to particularly overwhelming effect in what concerns metaphors of sexual desire, here seen in a wide repertoire of gluttonies, desires to consume, ingestions of the other, osmoses of intermingled flesh. Resolutely based on these foundations, the piece evolves behind expressionist faces, deformed by their buccal hyperactivity and the froth that shoots forth from them.

The performers are charged with maintaining impeccably designed configurations (extraordinary compositions with Mickey Mahar and Tamar Shelef, alongside Lola Rubio and Wampach himself) even as the action on stage conjures a sort of diabolic medieval carnival, a derailed Kama Sutra, or a collection of Greek vases left in the forgotten archives

of some hellish museum. It is a torrid orchestration of more or less extravagant patterns of attractions of the flesh, its contortions, its perspirations, its exhalations.

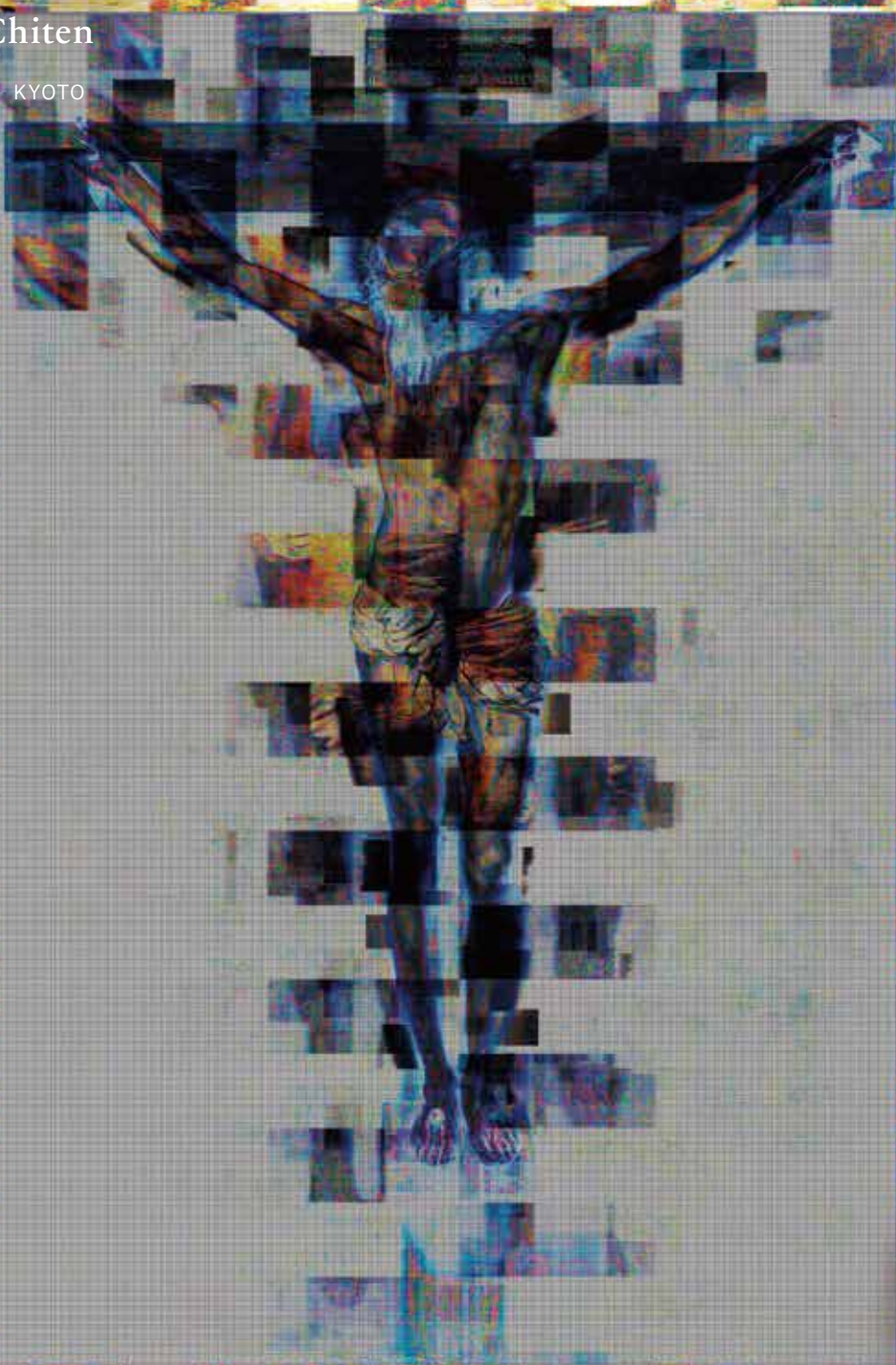
Superbly enigmatic, Olivier Muller and Marie-Bénédictte Cazeneuve hone the question of the gaze upon these resurgences from the depths : impassive, they overshadow the scene, planted like gargoyles on a cathedral made from their naked, suspended butts. For in the end, it is truly the tension between that which can be shown and that which can be seen that is at play, when the body hides less than that to which we are accustomed. It is extremely fortunate that the explicit *mise en scène* of copulation continues to be an unresolved problem on the stages of the performing arts. This habitual restraint creates a margin for the variability of possible bodies, formidably inventive and spirited, in *URGE*.

For a portion of the audience, corseted by proscriptive thinking, the resulting evocative power already seems intolerable. Especially if a body appears to drool, and that this liquid invites us to deviate outside of the normative circuits and geographies of sexual relations. In *URGE*, one might particularly read a resurgence, pulsions that would otherwise be repressed, here expanded upon in a butt-kicking orchestration.

Gérard Mayen, *Writings on body and sense*  
An excerpt from a review first published on [mouvement.net](http://www.mouvement.net/critiques/critiques/ecrire-a-corps-et-a-sens) <http://www.mouvement.net/critiques/critiques/ecrire-a-corps-et-a-sens> (posted on July 9, 2015; accessed on December 25, 2015)

# 地点 Chiten

KYOTO



design: Hisaki Matsumoto

## スポーツ劇

Sports Play

🕒 105min (予定 | TBC) (新作 / New Creation)

📅 3/5 (Sat) 20:00-  
3/6 (Sun) 18:00-

🗨️ 日本語  
Performed in Japanese

政治とメディアに翻弄される現代のスポーツの姿。  
地点×イエリネク×三輪真弘の顔合わせ再び

2013年、京都に開設したアトリエ「アンダースロー」を拠点に国内外で活動を展開し、演劇、そして劇場のあり方にいたるまで徹底して問い直している劇団、地点。チェーホフをはじめ国内外のテキストを用いながら、三浦基による言語と身体の固定観念を解体するような演出によって、先鋭的な現代演劇を生み出している。

そんな地点とドイツ語圏のノーベル賞作家エルフリーデ・イエリネクの出会いは2012年。東日本大震災とその後の原発事故を題材にした『光のない。』を同年に初演、そして昨年はKYOTO EXPERIMENTの舞台でも再上演を果たした。物語を捨て去ったイエリネクの戯曲、音楽家・三輪真弘による生の声を響かせた音響的音楽、そして三浦基の緻密に構築された演出。ポストドラマ演劇の、さらに先へと踏みこんだ地点と三輪真弘の果敢な試みは、大きな評判を呼んだ。

そして今回、地点が選んだのは、イエリネクが1998年に発表した長大な戯曲『スポーツ劇』。大衆が熱狂するスポーツの今のあり様を戦争にも見立てて批判するイエリネクだが、エレクトラ、アキレウス、ヘクトールといったギリシャ悲劇の登場人物たちを舞台に登場させ、膨大なテキストのカラーージュあるいは断片的なモノログが多層的に織りなす戯曲は、単なる社会批判に終わらない。音楽監督には再び三輪真弘を迎え、現代演劇の最前線において、政治とメディアに翻弄される21世紀のスポーツはいかに料理されるだろうか。

### Reuniting Chiten, Elfriede Jelinek, and Masahiro Miwa for a provocative critique of sport, politics, and the media

Chiten opened its own performance studio, UNDER-THROW, in Kyoto in 2013, where it continues to challenge the conventions of theater and theater spaces. Utilizing a wide range of global texts by the likes of Chekhov, Chiten has honed a radically new style of theater through director Motoi Miura's deconstruction of language and body.

Chiten first tackled the work of Nobel laureate Elfriede Jelinek in 2012 with its staging of *Kein Licht.*, a postdramatic text devoid of narrative which Jelinek wrote in response to the Great East Japan Earthquake and Fukushima crisis. The highly acclaimed production was revived at Kyoto Experiment 2014. Deftly directed by Miura, it also featured a soundscape by composer Masahiro Miwa that resonated live voices.

Chiten has now chosen to stage Jelinek's long 1998 work, *Sports Play*. In it, Jelinek likens today's mass frenzy for sports to warfare. Her text interweaves multiple layers of fragmentary monologues, forming a vast collage with characters from Greek tragedy such as Electra, Achilles, and Hector that transcends straightforward social critique. Once again teaming up with composer Miwa, Chiten serves up a bold and avant-garde portrayal of sports in the twenty-first century, continually exploited by politics and the media.

📍 ロームシアター京都  
サウスホール  
South Hall, ROHM Theatre Kyoto

作: エルフリーデ・イエリネク  
翻訳: 津崎正行  
演出・構成: 三浦基  
音楽監督: 三輪真弘  
出演: 安部聡子、石田大、小原康二、窪田史恵、河野早紀、小林洋平、田中祐気  
合唱隊: 朝日山裕子、今井飛鳥、大畑和樹、大道朋奈、田嶋奈々子、園羽山園、真都山みどり、村田結、米津知実、ほか  
舞台美術: 木津潤平  
衣裳: コレット・ウシャール  
照明: 大石真一郎 (KAAT 神奈川芸術劇場)  
音響: 徳久礼子 (KAAT 神奈川芸術劇場)  
舞台監督: 小金井伸一 (KAAT 神奈川芸術劇場)  
プロダクション・マネージャー: 山本園子 (KAAT 神奈川芸術劇場)  
技術監督: 堀内真人 (KAAT 神奈川芸術劇場)  
宣伝美術: 松本久木  
制作: 伊藤文一 (KAAT 神奈川芸術劇場)、小森あや、田嶋結菜 (共に地点)、武田知也 (ロームシアター京都)  
製作: 地点  
共同製作: KYOTO EXPERIMENT/ロームシアター京都、KAAT 神奈川芸術劇場  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Text: Elfriede Jelinek  
Translation: Masayuki Tsuzaki  
Direction: Motoi Miura  
Music direction: Masahiro Miwa  
Cast: Satoko Abe, Dai Ishida, Koji Ogawara, Shie Kubota, Saki Kohno, Yohei Kobayashi, Yuki Tanaka  
Chorus: Yuko Asahiyama, Asuka Imai, Kazuki Ohata, Tomona Omichi, Nanako Tajima, Hayama, Midori Matsuyama, Yui Murata, Tomomi Yonezu and others  
Stage design: Junpei Kizu  
Costumes: Colette Huchard  
Lighting design: Shinichiro Oishi (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Sound design: Reiko Tokuhisa (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Stage manager: Shinichi Koganei (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Production manager: Sonoko Yamamoto (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Technical director: Mahito Horiuchi (KAAT Kanagawa Arts Theatre)  
Publicity design: Hisaki Matsumoto  
Production coordinator: Bunichi Ito (KAAT Kanagawa Arts Theatre), Aya Komori, Yuna Tajima (all for Chiten), Tomoya Takeda (ROHM Theatre Kyoto)  
Production: Chiten  
Co-produced by: Kyoto Experiment/ROHM Theatre Kyoto, KAAT Kanagawa Arts Theatre  
Presented by: Kyoto Experiment

## オリンピックに向かう社会

三輪真弘

改めて言うまでもなく、スポーツとは戦争の代理行為であり、そこでむしろ問題になるのは、注目を集めるプレーヤーなどではなく、ぼくら観衆の存在である。「対戦」に期待し、応援し、熱狂するのはぼくらなのであり、やがてぼくら自身(の子孫)が戦争という凄惨な「ルールのないゲーム」のプレーヤーにされる番が来るはずだ。そこにまで至るプロセスを操っているのは、今の日本ならば安倍政権に違いない。しかし、先の歴史を振り返ると、不思議なことに、それは「誰がやっても同じこと」になるようにも見えないだろうか。もしそうだとすれば、それはさらに驚くべきことであり、ぼくらはヒトラーならぬ安倍晋三という人物の品性や知性を越えた、何か別の「力」や、それを生み出す「メカニズム」を想定しなくてはならないのかもしれない。

勝手な想像だが、おそらくそれは、ぼくらひとりひとりの、日本国で言うなら約一億数千万の心の中の、言語とは異なる次元の「感情」に関係があるのだろうと思う。逆に言うなら、国会の答弁から日常の会話まで、誰もが「フェアプレー」の前提となる「ルール」を可能にしてきた「言語」というものを根本的に信じなくなってきたということだ。思うままに喋ってはいても、誰もその意味を

聴かなくなり、機械のように黙りこくるかと思えば妙に饒舌になる。嘘をついても恥じることなく、約束を破っても、支離滅裂でも、「とにかく言い負けせば勝ち」の時代が再び訪れたのだ。それは「言葉」が、ぼくらひとりひとりの「わたし」という主体から離れていくから、いや言語というものが、人間の根源的な不条理に対峙してきた死者たちからの「遺言」であることをぼくらがあっさりと忘れようとしているからに違いない。しかし、それでも作動し続けるのが意識下の欲動、すなわち生者たちの無言の「感情」だ。もちろん、それ自体に善悪などはないが、確かにそれは留まるところを知らない暴力や破壊を指向するものでもあり得る。ぼくたちはその狂気を鎮める死者たちの知恵、すなわち言語をただ嘲笑うことしかできない。「歴史から人が学ぶことは、歴史から人は何ひとつ学ばないということである」と誰かが言った。ぼくは今、オリンピック開催に向かうこの世界をそのように感じている。

出典：特設ウェブサイト <http://chiten-kaat.net> より一部転載  
三輪真弘「オリンピックに向かう社会」を筆頭に、2016年の今、日本の政治、メディア、スポーツ、言葉、感情をリレー形式で考える特集記事など、随時更新予定。

三輪真弘

作曲家。1958年生まれ。1980年代後半からコンピューターを用いたアルゴリズム・コンポジションと呼ばれる手法で数多くの作品を発表。音楽についての独自の的方法論「逆シミュレーション音楽」がブリ・アルスエレクトロニカ、デジタル・ミュージック部門でグランプリ(ゴールデン・ニカ)を受賞するなど、国際的に高く評価されている。佐近田展康との「フォルマント兄弟」としての創作・講演など、その活動は多岐にわたる。現在、情報科学芸術大学院大学(IAMAS)教授。

## A Society Facing the Olympics

Masahiro Miwa

As we know, sport is a proxy action for war, and the issue then becomes not the players who attract the attention, but rather us spectators. We are the ones anticipating the confrontation, supporting it, and getting wild with enthusiasm, and so eventually it will be our (or our descendants') turn to be players in war, that awful game without rules. And make no doubt about it: in Japan today, it is Shinzo Abe's government that is manipulating processes so we will arrive at that stage. But if we look back at history, the strange thing is that it has surely always been this way regardless of who was in charge. In that case, what becomes even more surprising then is that we must probably assume the existence of another "power" or "mechanism," one that transcends not only the character and intelligence of Shinzo Abe, but even Adolf Hitler.

This is just how I imagine it, but I think it is likely connected to the sentiments, which are from a dimension different to language, in the hearts of each and every one of us—in Japan's case, a population of some 100-plus million. Put another way, from parliamentary pleas to daily conversation, we have funda-

mentally stopped believing in this thing called language that made the rules possible upon which fair play is presumed. If we just continue saying what we think, people stop listening; just when you think they will shut up forever like a machine, they become strangely loquacious. Lying brings no shame, nor does breaking promises or speaking nonsense: once again an age of just speaking others down to win has arrived. That is undoubtedly because language is moving away from the agency that is the individual—or rather, we are simply forgetting that language is the last testament of the dead that had confronted the fundamental absurdity of humanity. However, continuing to operate regardless is a subconscious drive, that is, the silent sentiments of the living. Of course, this in itself is neither good nor bad, but it can certainly become something that points to unstoppable destruction or violence. All we can do is merely ridicule the knowledge—that is, the language—of the dead who have appeased that madness. "We learn from history that we do not learn from history," as someone once said. This is what I feel our world heading toward the Olympics is like.

Masahiro Miwa

Composer. Born in 1958. Since the second half of the 1980s, he has created numerous music works using a technique with computers called "algorithmic composition." His original "reverse simulation music" theory has received international acclaim, winning the Golden Nica for Digital Music at Prix Ars Electronica 2007. Along with Nobuyasu Sakonda, he is part of the creative unit Formant Brothers. He currently teaches at the Institute of Advanced Media Arts and Sciences.

# チョイ・カファイ

## Choy Ka Fai

SINGAPORE and BERLIN



Video stills from SoftMachine: Surjit & Rianto © Choy Ka Fai

## ソフトマシーン：スルジット&リアント

SoftMachine: Surjit & Rianto

100min (休憩含む | with interval) (日本初演 / Japan Premiere)

1 3/11 (Fri) 19:30-  
3/12 (Sat) 15:00-  
3/13 (Sun) 19:00-

■ 英語など(日本語での逐次  
通訳、字幕あり)  
Performed in English with  
Japanese surtitles and  
consecutive interpretation

□ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

【展示】「ソフトマシーン」 会期:3/5(Sat)-3/13(Sun) 10:00-20:00  
会期中無休・入場無料 会場:京都芸術センター フリースペース

【Exhibition】SoftMachine Dates: 3/5 (Sat) - 3/13 (Sun) 10:00-20:00  
Open every day, free admission Venue: Multi-purpose Hall, Kyoto Art Center

■ 京都芸術センター 講堂  
Auditorium, Kyoto Art Center

構成・演出・出演・記録:チョイ・カファイ  
出演・振付:リアント、スルジット・ノングメイ  
カバム  
ドラマツルク:タン・フクエン  
音響:ズルキフレ・マーモド  
照明デザイン:アンディー・リム(Stage "LIVE")  
制作:ヤップ・セオク・ファイ  
逐次通訳・日本語字幕:井上知子  
舞台監督・照明:筆谷亮也  
製作:チョイ・カファイ  
主催:KYOTO EXPERIMENT

Concept, direction, performance and  
documentary: Choy Ka Fai  
Performance and choreography: Rianto,  
Surjit Nongmeikapam  
Dramaturge: Tang Fu Kuen  
Sound design: Zulkifli Mahmud  
Lighting design: Andy Lim (Stage "LIVE")  
Production manager: Yap Seok Hui  
Live translation and Japanese surtitles:  
Tomoko Inoue  
Technical manager and lighting adaptation  
in Japan: Ryoya Fudetani  
Production: Choy Ka Fai  
Presented by: Kyoto Experiment

### アジアにおけるダンスの現在地を探る途方もない試み

ダンサーに刻まれた記憶や経験、身体言語を探り、掴みとること。ベルリン在住のシンガポール人アーティストのチョイ・カファイは、アート、デザイン、テクノロジーを援用しながら、振付家やダンサーへのリサーチを続けている。なかでも、2012年のKYOTO EXPERIMENTでスタートした作品シリーズ『ソフトマシーン』は、アジアにおけるコンテンポラリーダンスの途方もないインデックスを作成しようとする試みであり、京都ではcontact Gonzoの塚原悠也がその焔上にあげられた。

その後もリサーチ、制作が続けられている『ソフトマシーン』から、今回はインドのスルジット・ノングメイカバム、インドネシアのリアントという、ふたりのダンサー・振付家との作品を紹介する。それぞれの国の古典舞踊を学びながら、伝統に留まらないコンテンポラリーな活動を続けるふたり、彼らのドキュメンタリー作品でありながら、アジアへの図式的理解を食い破るダンサーの豊穡な身体を目撃する機会ともなるだろう。また、アジアの身体へと深く潜っていくリサーチの行方は、日本の観客にとってダンスに限定されない切実さをもって浮かび上がるに違いない。

### An expedition across the choreographic landscape of Asia

How can we search for and grasp the memories, experiences, and physical language of dancers?

Berlin-based Singapore artist Choy Ka Fai employs the means of art, design, and technology to research choreographers and dancers. His *SoftMachine* series is an attempt to create an impossible lexicon of contemporary dance in Asia, first launched at Kyoto Experiment 2012 with a showcase of the work of contact Gonzo's Yuya Tsukahara.

Since then Choy Ka Fai has continued his research for *SoftMachine*, and here presents two documentary dance performances of Surjit Nongmeikapam, from India, and Rianto, from Indonesia. Both have studied the classical dance of their respective countries but also work with the contemporary ideas arriving and departing from traditional forms.

This documentary work is an opportunity to witness the rich bodies of the dancers rip into the schematic understanding of Asia. For Japanese audiences, the direction of this research taking us deep into Asian physicality emerges with a poignancy that goes beyond dance.

## チョイ・カファイの方法

竹田真理

ベルリン在住のシンガポール人アーティスト、チョイ・カファイとは何者だろう。振付家として創作をするのではないが、テクノロジーと舞踊史への知見を駆使しつつ、ダンスの状況を批判的に捉えるための特異なパフォーマンスを考案して見せる。2012年のKYOTO EXPERIMENTでは舞踊史上のレジェンドたちの動きをデジタル信号に変換、ダンサー寺田みさこの身体に送信し動きを再現するという、西洋ダンス史を手玉に取った実験に仕立ててみせた。ダブル・ビルのもう一方の演目ではパフォーマーの塚原悠也を舞台に上げ、contact Gonzoが生まれるに至る思考の過程を紐解いていった。こちらが、リサーチをもとにアジアのコンテンポラリーダンスの目録をつくる壮大な構想『ソフトマシーン』のご始まりだったのだ。

当時のことをもう少し語るなら、KYOTO EXPERIMENTに先立ってチョイは関西でいくつかのリサーチと上演を行っている。振付家、教育者、研究者など20名におよぶ関係者へのインタビュー\*は、個々の語りが見え、東京のダンス「マーケット」に対する関西の「コミュニティ」というあり方を浮かび上がらせた。また普段は劇場スタッフとして働く二名のダンサー、文と田中幸恵を取り上げたパフォーマンス\*\*では、各々の個人史を辿る過程で、ラバンに由来するある身体技法が関西のコミュニティの一部に色濃く受け継がれている事実が明らかになった。関西のダンスの根底に流れる近代舞踊の水脈がドキュメントされた瞬間である。

チョイ・カファイのリサーチはその後5か国13都市に及んでいる。これを可能にするのは、インタビューと映像の展示、および舞台上でのドキュメンタリー・パフォーマンス、二つの形式でアプローチする『ソフトマシーン』独自の手法だ。アジアのダンス地図を辿りながら各地で展開するダンスの現在を問う作業は、ダンサーの来歴や経験、記憶と表現、さらには各地に固有の風土、文化、社会

的背景をも射程に入れる。それは西洋を通してではない「アジアからアジアを語る」新しい視点を示すことであり、個に還元された日本のコンテンポラリーダンスが舞踊史へ、メソッドへ、コミュニティへと根拠を求め、震災以後は伝統芸能への関心を高めている状況とも呼応する。

近年盛んなダンスのアーカイブ論を巡っては、生きる身体から切り離された情報や物を知の集積として一所に収蔵するアーカイブの概念において、ダンサーの身体のローカルな歴史性を伝達していくことの不／可能性が議論されている\*\*\*。おそらく、『ソフトマシーン』は、この欧米的な知のシステムに対するレスポンスになり得る。かりそめの舞台で遂行されるドキュメンタリーという方法が、歴史を編むことの政治性を免れ、永遠に未完のインデックスとして、個々の事象へのアクセスの可能性のみを担保することになるからだ。

今回ドキュメンタリー・パフォーマンスの舞台に上がるのは、インドはマニプール出身のスルジット・ノングメイカバムと、インドネシアのバニユス出身のリアント。彼らの舞踊言語を裸にしていこうという場所もまた近代の生んだ権力的な装置に他ならないが、それにしても二人の古典とコンテンポラリーを行き来するダイナミズム、ステレオタイプな眼差しを操作し返してみせるしたたかさはどうだろう。各々の身体の複雑にして濃密な文脈に、見る側の視線も大きく切り開かれるに違いない。

\* 映像が『ソフトマシーン』を構成する一部としてKYOTO EXPERIMENT 2012で展示された

\*\* KOBÉ-Asia Contemporary Dance Festival #2にて(主催：NPO法人ダンスボックス)

\*\*\* 中島那奈子「(古い)と踊り——アーカイブ化されない踊りをめぐって」『埼玉大学リベラルアーツ叢書6: musica mundana 気の宇宙論・身体論』(2015、埼玉大学教養学部・文化科学研究科) 参照

竹田真理

東京都出身、ダンス批評家。2000年より関西を拠点にコンテンポラリーダンスとその周辺の状況を取材、執筆。公演評やインタビュー記事をダンス専門誌紙、一般紙、ウェブ媒体等に寄稿。国際演劇評論家協会会員。

## Choy Ka Fai's Process

Mari Takeda

Who is Choy Ka Fai, the Singaporean artist based in Berlin? He doesn't create work as a choreographer, but rather devises peculiar performances that utilize technology and knowledge of dance history in order to present critical interpretations on the state of dance. At Kyoto Experiment 2012, he converted the movements of dance legends into digital signals, which he sent into the body of the dancer Misako Terada to be recreated, forming an experiment that took western dance history by the nose. The double bill also featured a performance by Yuya Tsukahara, unraveling the process that led to the birth of Tsukahara's unit contact Gonzo. This was the start of *SoftMachine*, his grand vision of researching and cataloguing contemporary dance in Asia.

If we examine a little more about what he did at that time, ahead of Kyoto Experiment 2012, Choy carried out research and performances in Kansai. He interviewed\* 20 choreographers, educators, and researchers, and these individual accounts formed a net from which a Kansai community—as opposed to the Tokyo dance “market”—emerged. Moreover, a performance\*\* with the dancers Aya and Sachie Tanaka, who ordinarily work as theater staff, made apparent, through a process of tracing each dancer's personal histories, the fact that physical training methods derived from Laban are deeply carried on even in part of the community in Kansai. It was a moment that documented the channels of modern dance that flow through the roots of dance in Kansai.

Choy Ka Fai's research later took in five countries and thirteen cities. This was made possible by *SoftMachine*: his dual approach of exhibiting interview footage and live documentary performance. The work of tracing the dance map of Asia, while also inquiring into how dance is developing in each region today, incorporated dancer history, experience, memory, and expression, as well as climate, culture, and social background. It demonstrated a new perspective of speaking about Asia, from Asia, rather than via the interface of the West, whereby Japanese contemporary dance, hereto reduced to individuals, seeks for a basis in dance history, methodologies, and communities, while also responding to the increased interest in traditional performing arts

following the 2011 Great East Japan Earthquake.

While dance archive theory has recently thrived, the concept of archiving information and things detached from living bodies in one place as an accumulation of knowledge then brings up a debate over the possibility or impossibility of transmitting the local historicity of dancers' bodies.\*\*\* *SoftMachine* can perhaps form a response to this western intellectual system. The method of documenting the transient actions on stage avoids the political nature of editing history and, as an eternally incomplete index, secures only the potential for access to individuals.

The documentary performances this time are Surjit Nongmeikapam, from Manipur in India, and Rianto, from Banyuwasan in Indonesia. This place we call the stage for denuding their dance language is also nothing less than the authoritative device produced by modernity. That being so, what will this pair's acumen be like, dynamically traversing both the classical and contemporary, re-operating the stereotypical gaze. I am certain that in the complexity of the individual bodies and their dense contexts, viewers' perspectives will also be greatly opened up.

\* Videos of these interviews were exhibited at Kyoto Experiment 2012 as part of the *SoftMachine* project.

\*\* It was staged as part of Kobe-Asia Contemporary Dance Festival #2, organized by the non-profit Dance Box.

\*\*\* Nanako Nakajima, “Agind and Dance: Dance against Archiving,” in Saitama Liberal Arts 6: Hidden traditions of musica mundana (Faculty of Liberal Arts and Graduate School of Cultural Science, Saitama University), 2015.

Mari Takeda

Dance critic, born in Tokyo. Since 2000, she has covered contemporary dance in the Kansai region, writing reviews and interviews for dance magazines, newspapers, and online media. She is a member of the International Association of Theatre Critics.

# 松本雄吉×林慎一郎

Yukichi Matsumoto & Shinichiro Hayashi

OSAKA and TOYONAKA, JAPAN



© Yuya Tsukahara

## PORTAL

🕒 120min (予定 | TBC) (新作 / New Creation)

📅 3/12 (Sat) 19:00-  
3/13 (Sun) 15:00-📍

🗣️ 日本語  
Performed in Japanese

🗨️ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

維新派の松本雄吉 × 劇作家・林慎一郎。  
その声を担う役者として、異才・志人が舞台に

1970年の維新派設立から大阪を拠点に活動し続けてきた松本雄吉。野外劇の雄として知られる松本だが、近年は劇場における作品も増えており、寺山修司『レミング』、中上健次『十九歳のジェイコブ』など、演出家として話題作への参加もたえない。そして今回、満を持してのKYOTO EXPERIMENT初登場となる。

松本の演出に対峙する戯曲は、関西の若手劇作家の登竜門として知られるOMS戯曲賞で大賞、特別賞を受賞している林慎一郎が担う。大阪の「衛星都市」である豊中に暮らす林が戯曲を書き下ろし、まずは、2016年秋プレオープン予定の豊中市立文化芸術センター開設プレ事業として上演される。タイトルの「PORTAL」とは、壁に穴を開けて空間を飛び越えるパズルゲームのこと。同じく世界中で大人気の、実際の町を舞台にした拡張現実陣取りゲーム「ingress」も題材にしなが、衛星都市の現代神話をつくりあげる。大都市との間にある風景のグラデーションの中で、都市に向けられたまなざしをミクロにもマクロにも入れ替えながら、音と身体で地図を描いていく。

関西の演劇界のさらなる活性化を目指して、京都・大阪で作品をシェアするという今回のプロジェクト。主役をダブルキャストとして、京都公演では志人が務めることが決定している。ヒップホップユニット・降神のMCにして、時に詩人とも評される志人の比類のない声が、松本×林の劇空間に響きわたる瞬間を想像するだけでも身震いがする。

**Ishinha's Yukichi Matsumoto directs hip-hop legend Sibitt in a script by Shinichiro Hayashi**

Yukichi Matsumoto founded the Osaka-based theater company Ishinha in 1970 and is known for his bravado outdoor spectacles. In recent years he has also had hits directing Shuji Terayama's *Lemming* and Kenji Nakagami's *Nineteen-Year-Old Jacob*. Now he makes his long-awaited debut at Kyoto Experiment.

Matsumoto will direct a script by Shinichiro Hayashi, the Kansai playwright who has twice won OMS Drama Prizes. Hayashi resides in Toyonaka, an Osaka satellite city, and his script will be staged as a pre-opening event for Toyonaka City Arts Center, which opens in autumn 2016. The title refers to puzzle games where a hole in a wall allows you to jump to another place. Specifically, Hayashi draws on the popular augmented reality game *ingress*, which turns the actual city into a game where players "capture" portals by visiting certain places. In his play Hayashi creates a contemporary mythology of the satellite city. Substituting the gaze directed at the city at both micro and macro levels within the changing landscape between the satellite and the metropolis, the play weaves a map through sound and body.

The main role is played by Sibitt, who is known as an MC for the hip-hop unit Origami. Also an acclaimed occasional poet, Sibitt's unique voice will complete Matsumoto and Hayashi's theatrical vision.

📍 ロームシアター京都  
サウスホール  
South Hall, ROHM Theatre Kyoto

脚本：林慎一郎  
演出：松本雄吉  
出演：志人、大石英史、後藤七重、鈴木麻美、武田暁、茅田茜、福田雄一、増田美佳、松井壮大、松田翔、森正史  
音楽・演奏：内橋和久  
美術：柴田隆弘  
照明：吉本有輝子(真昼)  
映像：小西小多郎  
音響：佐藤武紀  
小道具：中西美穂  
衣装：伊吹佑紀子、松永理央  
舞台監督：大田和司  
宣伝写真・美術：塚原悠也、松見拓也(共に contact Gonzo)  
企画協力：奈良歩  
制作：山崎佳奈子、清水翼  
企画：豊中市  
製作：維新派/カンカラ社  
主催：KYOTO EXPERIMENT

Text: Shinichiro Hayashi  
Direction: Yukichi Matsumoto  
Cast: Sibitt, Eiji Oishi, Nanae Goto, Asami Suzuki, Aki Takeda, Akane Tada, Yuichi Fukuda, Mika Masuda, Morihiro Matsui, Sho Matsuda, Masashi Mori  
Music and musical performance: Kazuhisa Uchihashi  
Stage design: Takahiro Shibata  
Lighting: Yukiko Yoshimoto (Mahiru)  
Video: Kotaro Konishi  
Sound: Takenori Sato  
Props: Miho Nakanishi  
Costumes: Yukiko Ibuki, Rio Matsunaga  
Stage manager: Kazushi Ota  
Publicity photography and design: Yuya Tsukahara, Takuya Matsumi (all for contact Gonzo)  
In co-operation with: Ayumi Nara  
Production coordinator: Kanako Yamasaki, Tsubasa Shimizu  
Planning: Toyonaka City  
Production: Ishinha / Kankara Co., Ltd.  
Presented by: Kyoto Experiment

## 戯曲と譜面

松田正隆

私は、松本さんの演出する戯曲を二つ、書いている。考えてみれば、その二つ以来、きちんとしたかたちの戯曲を書いていない。今さら、そんなことに気付いて驚いてみても仕方がないのだけど。

松本さんは演出家なので、松本さんと作品をつくるということは、劇作をする者が演出という上演の作業と関係することをどのように考えたらいいのかをつきつけられることになる。演劇作品をつくるのだから、演出と戯曲がこのような関係にあることはあたりまえのことなのだけど、ほとんどの場合、戯曲に書かれていることが、演出家なりに解釈(母性的なおせっかい)されて上演にむすびつくようになっている。つまり、演出の目的は、戯曲に書かれた意味を誰が見てもわかるような形(時間化ではなく空間化)にして観客にうまく伝達されるようにする、ということなのかもしれない。そういうことなら、戯曲を読めばいいので、わざわざ上演することもない。劇を書く者にしたなら、そっちのほうが安心できる。書いたイメージがそのまま舞台の上演に反映(可視化)されるのだから。

松本さんはそういう舞台の上演を演出しなかった。会話としてのセリフとは、どのようなことなのか。俳優はそれを上演でセリフとして会話するということになるのだけど、いま、まさにそこで話されているような時間性を舞台上にもたらずことが、会話劇の時間の面白さでもある。それは、いま、まさにそこで話されているように模倣し再現すること、すなわち巧妙な偽りの行為でもある。しかし、そのような会話の現在のうちに胚胎する虚偽が思わず、抜き差しならない出来事を生起するということもあるのではないか。カフェにいる痴話喧嘩をする男女の会話が進行するうちにヒートアップしてコップの水を相手にかける、というシーンが上演されたら、たとえそれも戯曲に書かれていることだとしても、一つのアクシデント(事件)を俳優も観客も経験することになるだろう。演劇の上演は、現実とは違う時間と場所であり、そこで再現される会話であっても、そこに生起する出来事がある。虚偽の会話表現をしているうちに、マジになるみたいなことが起こる。

そういうねらいがあって私も会話のセリフを書いている。しかし、そのような予想外の弾みを孕む会話のアクチュアリティに、松本さんはほとんど興味がないのだ。結局はそんなものは心理的な感情の動きにすぎない。演劇は感情サンプルの品評会ではなく、スペクタクルの立ち上げであり、舞台芸術なのだ。私はなるべく鬱陶しい会話の時間を持続するようにセリフを書いたが、そんな会話劇でさえ、松本さんのリズムに翻訳されて演出されていた。そのことに私は驚かされたのだ。そんな、会話劇の構造が生み出す「弾み」のような姑息なリアリティはなくていいからと、すべてのセリフは松本音階に手直しされて上演された。それゆえ、その上演は、戯曲の空間的な可視化ではない独特な位相の時間性を獲得していたように思う。そう、あの松本グループの生成である。

さて、林さんの戯曲はどうなるのであろうか。林さんの書く戯曲にある時間の流れかたは、普通の会話劇のものとは違う。都市の物語が脈絡のある構成で描写されるというより、都市に住まう人物たちの話す言葉や身振り、街角の言葉にならない雰囲気にとりためもなく收拾され、それが圧倒的なモノログとなって表現される。それは、さながら路地裏に堆積する時間の地図である。松本さんにとってセリフの文字は一種の音符であるとすれば、これほど、松本さんがタクトを振るのに興奮を覚える音符の連なりがあるだろうか。戯曲を上演することが地図を譜面にすることになる。ほう、うまいこと言うな、という声が聞こえてきそうだけど、稽古ではそんな煙にまくような言葉じゃどうにもならんねんと松本さんなら言うのかもしれない。そう、松本さんは徹底したプラグマティストでもあるのだ。

松田正隆

劇作家・演出家。1962年長崎生まれ。現在、立教大学現代心理学部映像身体学科教授。『海と日傘』(1996)で岸田國士戯曲賞、『月の岬』(1997)で読売演劇大賞作品賞、『夏の上』(1998)で読売文学賞受賞。2003年より演劇の可能性を模索する集団「マレビトの会」を結成、代表をつとめる。主な作品に『長崎を上演する』(2015)など。

## Play Scripts and Musical Scores

Masataka Matsuda

I have written two plays that Yukichi Matsumoto directed. Now I think about it, I haven't written a proper script since those two plays. Of course, nothing can be done about being surprised by this now of all times.

Matsumoto is a director, so when creating a play with him the playwright must be confronted by the question of how they consider their relationship with the task of directing the performance. Since it's about making a work of theater, there is obviously going to be this kind of relationship between the direction and the script, though almost all of the time, what is written in the script is interpreted by the director in his or her own (maternal meddling) way and then joined up to the performance. In other words, the aim of directing is perhaps to put the meaning of what is written in the play into a form in which someone can see and understand (make it spatial, rather than temporal), so that it is conveyed effectively to the audience. If that's the case, then you can just read the script and you don't need to put it on. For someone writing plays, that is actually the safest, because then what you wrote will be reflected (visualized) just as it is onto the stage.

But Matsumoto does not direct plays like that.

What is dialogue as conversation? Actors converse as dialogue by performing this, but the temporality of what is said that is brought to the stage is what makes the time of a drama interesting. This is the act of imitating and recreating what is said there—that is, the act of deft fabrication. However, within the present of this kind of conversation, the embryonic falsehood will unintentionally give rise to inextricable incidents. If a scene is performed showing a quarrel between two lovers in a cafe that escalates to one throwing a glass of water over the other, no matter how it is written in the script, it will become an incident that is experienced by both actors and audience. A theater performance is a time and place different to reality, and even if there is a conversation that is reenacted there, it creates an incident. While expressing a fabricated conversation, something totally real happens. And it is with this aim that I write dialogue. However, Matsumoto has almost no inter-

est in such conversational actuality pregnant with unexpected momentum. Ultimately, such things are mere psychological emotions. Theater is not a fair for emotional samples, but a spectacle—and example of the performing arts. Though I wrote dialogue that maintained a gloomy atmosphere as much as I could, this was translated and directed by Matsumoto into his own rhythm. This astonished me. I realized there was no need for the patchwork reality of the momentum produced by the structure of the drama, and reworked all the dialogue in the play to Matsumoto's musical scale. For that reason, the performance was able to acquire a distinct phase of temporality, rather than a spatial visualization of the play. Yes, this was the Matsumoto groove.

So, what will Shinichiro Hayashi's play be like?

The flow of time in Hayashi's plays is something different to a normal drama's. Less a story of the city that is portrayed by a composition of contexts than a desultory cleaning up the gestures and words spoken by people living in the city, or the wordless atmosphere of street corners, which is then converted and expressed as an overwhelming monologue. This is just like a map of the time that accumulates in the back streets. If for Matsumoto, a word of dialogue is a type of musical note, then surely Matsumoto has a range of stimulating notes for conducting with his baton. Performing a play is to turn a map into music. I can hear you congratulating me on my clever phrase, but if this were a rehearsal, Matsumoto would probably just tell me to stop mystifying things with words. Yes, in the end Matsumoto is a pragmatist through and through.

Masataka Matsuda

Playwright and director, born in Nagasaki in 1962. He currently teaches at the Body Expression and Cinematic Arts faculty at Rikkyo University. He received the Kishida Kunio Drama Award for *Sea and Parasol* (1996), the Yomiuri Theater Grand Prix Drama Award for *Cape Moon* (1997), and the Yomiuri Prize for Literature for *Over Summer Sands* (1998). He formed marebito theater company in 2003. His plays include *Performing Nagasaki* (2015).



# 大駱駝艦・天賦典式

## Dairakudakan Temptenshiki

TOKYO



photo: Hiroyuki Kawashima

## ムシノホシ

Space Insect

🕒 90min

📅 3/16 (Wed) 19:00-  
3/17 (Thu) 15:00-📍

📄 ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

圧倒的な個にして、群である。

鷹赤児率いる大駱駝艦が舞踏の世界を拡張する

1972年に舞踏集団、大駱駝艦を創設した鷹赤児は、「舞踏」を創始した土方巽の薫陶を受けるとともに、アングラ演劇の第一人者として知られる唐十郎の状況劇場に参画するなど、60年代から現在まで、変わらず第一線でまさに“怪男児”として八面六臂の活躍をみせている。大駱駝艦からは、室伏鴻、山海塾を主宰する天児牛大、白虎社を主宰していた大須賀勇ら、多くの舞踏家や舞踏グループを輩出。吉祥寺にある拠点「壺中天」では、現在も研鑽を重ねる多くの若手ダンサーの姿を見ることができる。そんな鷹が第一にしているのが、「天賦典式」（この世に生まれ入ったことこそ大いなる才能とする）。個々の人間が本来持っている豊穡な身ぶり・手ぶりを採集、再構築することで、スペクタクル性の強い舞台演出に拮抗できる肉体を確保して、現在進行形の鮮烈なButohを世界中に発信してきた。

2014年、世田谷パブリックシアターで初演された『ムシノホシ』はバリ、バンクーバーなどでも上演され、多くの観衆を魅了してきた近年の代表作。ヒトとムシを行き来しながら現代社会に警鐘を鳴らす鷹流ファンタジーにして、大駱駝艦の艦員22名が身体表現を繰り広げる大スペクタクルである。デトロイト・テクノの御大ジェフ・ミルズ、気鋭の尺八奏者にして作曲家の土井啓輔という両極端な音楽を野放図に取り込んでしまうあたりにも、40年以上続く舞踏集団の出鱈目なまでの貪欲さが感じられるはず。日本の舞踏を背負ったカンパニーの底力には、どこまでも圧倒される。

**Overwhelming as individual and mass, Akaji Maro's Dairakudakan expands the world of Butoh**

Akaji Maro founded Dairakudakan, the Butoh company in 1972. Trained and inspired by Butoh founder Tatsumi Hijikata, Maro was also an actor with Juro Kara's famed *angura* (underground) theater troupe, Jokyo Gekijo (Situation Theater). Since the 1960s to the present, Maro has been a chimeric figure working crossing over the borders of several genres. The principle element of Maro's praxis is *temp-tenshiki*: the idea that being born into the world is a great talent itself. The company gathers and reconstructs the fecund body and human movement and behavior every individual possesses inherently, securing a physicality that can countervail the spectacular stage direction, in order to convey a vivid, contemporary style of Butoh around the world.

*Space Insect* is one of the company's most alluring and popular recent works, premiered at Setagaya Public Theatre in 2014 and subsequently staged in Paris and Vancouver. This Maro-esque fantasy, a grand physical spectacle featuring 22 members of the company, traverses between motifs of humanity and insect as it sounds a warning to contemporary society. In the unbridled music of the two extremes of Detroit techno pioneer Jeff Mills and shakuhachi player and composer Keisuke Doi, we can sense the company's haphazard appetite that has continued for over 40 years. Dairakudakan, whose boundless strength has carried Japanese Butoh so far, once again utterly overwhelms.

📍 京都芸術劇場 春秋座  
Kyoto Art Theater Shunjuza



未就学児入場不可

Children under school age not admitted

振舞・演出: 鷹赤児  
音楽: 土井啓輔、ジェフ・ミルズ  
舞踏・出演: 鷹赤児、村松卓矢、田村一行、松田篤史、塩谷智司、奥山ぼらぼ、湯山 大 一 郎、若羽幸平、小田直哉、小林優太、金能弘、宮本正也、我妻恵美子、高桑晶子、鉾久奈緒美、藤本梓、梁鐘譽、伊藤おらん、齋門由奈、岡本彩、柏村さくら、谷口舞衣裳、堂本教子  
美術: 安部田保彦  
鍛冶屋: 本田浄人  
舞台監督: 中原和彦  
照明: 森規幸 (balance,inc.DESIGN)  
音響: 及川誠之 (SHOW-YA project)  
制作: 山本良  
プロデューサー: 新船洋子  
製作: 大駱駝艦  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Choreography and direction: Akaji Maro  
Music: Keisuke Doi, Jeff Mills  
Cast: Akaji Maro, Takuya Muramatsu, Ikko Tamura, Atsushi Matsuda, Tomoshi Shioya, Barabbas Okuyama, Daiichiro Yuyama, Kohei Wakaba, Naoya Oda, Yuta Kobayashi, Yoshihiro Kim, Seiya Miyamoto, Emiko Agatsuma, Akiko Takakuwa, Naomi Muku, Azusa Fujimoto, Jongue Yang, Oran Ito, Yuna Saimon, Aya Okamoto, Sakura Kashiwamura, Mai Taniguchi  
Costumes: Kyoko Domoto  
Stage Art: Yasuhiko Abeta  
Iron works: Kiyoto Honda  
Stage manager: Kazuhiko Nakahara  
Lighting: Noriyuki Mori (balance,inc. DESIGN)  
Sound: Satoshi Oikawa (SHOW-YA project)  
Company manager: Ryo Yamamoto  
Company producer: Yoko Shinfune  
Production: Dairakudakan  
Presented by: Kyoto Experiment

## 大駱駝艦について

宮沢章夫

大駱駝艦には不思議な魅力がある。単純に面白さと書いてもいだろう。どこか人を驚かせようとする発想の飛躍があり、だから人を惹きつけると考えられるが、同時に表現の根源に、「身体」への深い洞察と眼差しがある。

いや、ごくあたりまえのことだ。つまり、日常的にしている「私」のこの動作や行為はなにによって規定されているかという問いだ。もちろん、ルールやマナーはあるから、バスの車内での正しいふるまい方、自転車の正しい乗り方、あるいは正しい歩き方がある。それを抑圧だと考えたこともなかったけれど、一度、その規範から逃れることをしようと考えるのなら、徹底しなければいけないと大駱駝艦を主宰する鷹赤児は考えているにちがない。舞踏という表現に初めて出会ったとき、舞踏の「変」な状態、あるいは、「奇妙」さといってもいいような表現を、わたしはとても魅力的に感じた。なぜ、そんな動きをするのかわからないのだ。なぜ白塗りのかも怪しい。なにもかもわからないが、けれど舞台上にいる舞踏手たちに惹きつけられた。

創作者の意識は「からだ」の方に向かう。

舞踏に限らず、コンテンポラリーダンスでも、演劇でも、古典芸能でも、「問い」はそこから出発しているだろう。からだはそもそも、「私」が所有している。けれどそれはしばしば不自由さを感じるが、不自由さとは、社会的に置かれた「私」の状態か、もっと根源的に「私」の内部から出現し、「私」を縛るなものなのか。単純な仕草や、行為、日常的に反復され自動的に動くからだの状態に疑いを持ち、ここではない何者か、異形であること、目を背けたくなるような怪異であることを意思することを大駱駝艦は、まず最初に目指したのではなかったか。

それまで踊ることに、あたりまえのように「美」を求めていた者からすれば、慄然とするような表現としての「Butoh」を、師である土方巽とともに作り上げた鷹の創作の源泉がどこにあったか、たとえば多くの舞踏家が参照する「胎児」のイメージは、私たちの記憶のはるか遠くにあるからこそ、日常から離れ、かといって、それはまぎれもなく「私」だ。その奇妙な胎児の時間から、現在の「私」、ごく当たり前の仕草、自動的にお辞儀のような仕草をする「私」のからだを問う。

いや、もちろんそれは誰でも考えているだろう。だからなおさら、鷹赤児が、そして、大駱駝艦が生み出そうとする、その方法、その思考の動きに注目したい。ある時期まで、これを書いているわたしは、舞踏の表現をうまく言葉にすることができず、ただ「変なものを見た」という素朴な感想しか抱けなかった。だが、いまになって

あらためて大駱駝艦に、「変なものを見た」という賛辞を書きたいと欲する。

なぜなら、「変なもの」であり、「異形」こそ、この時代にあってはきわめて強い特権性を語ることになるからだ。それはなにかのテレビのインタビューで鷹赤児が語っていた言葉だった。まだ若いころの鷹が稽古場で眠っていた。その姿を見た土方巽が、それが面白いと言ったという。鷹が眠っている姿が面白いからそれを舞台でやれと。おそらく、鷹さんが眠っていたらわたしも面白く感じるだろう。それを舞台上で表現してもらいたいと求めるだろう。

なにしろ鷹赤児が寝ているのだ。

けれど、土方と鷹が、その「面白さ」から生み出す表現と、わたしのそれでは、きつとかなりのちがいがあ。発端は同じだ。

「鷹さんが寝ている」

だが表現になったとき異なるのは、先に書いた、わたしがはじめに抱いた「舞踏」への違和感や、「変なもの」を遠ざけたい気持ちになる。わたしは、自分の表現しかできないが、からだへのまた異なるアプローチ、ごく当たり前の人の仕草への疑い、まっすぐ歩いて目的地まで行けばいいのに余計なことをついでしてしまう逸脱、そして、胎児の記憶、それらを統合したある瞬間、舞踏は奇跡的に生まれるとしたら、それに嫉妬する。そして、最初に書いたような、大駱駝艦が持つ発想から出現する魅力がある。それらの表現が形をなして観客の前に現れる。

根源的な思考の果てに、また新しいダンスが生まれる。その強靱さ、そしてしなやかさ、初々しさが観る者を圧倒する。

ちなみにこれは余談になるが、もう十年以上も前、京都造形芸術大学の春秋座で大駱駝艦の公演があった。学内に喫煙所はほとんどなく、舞踏手たちも、屋外の決められた場所で煙草を吸っていた。十二月だったと記憶する。ほぼ全裸に近い彼らは煙草を吸いつつ、口々に、「寒いなあ」と言っていた。舞踏手も寒いのである。冬に裸で屋外にいるのは寒いのだ。

宮沢章夫

劇作家。演出家。小説家。1956年生まれ。多摩美術大学中退。1980年代半ば、竹中直人、いとうせいこうらとともに、「ラジカル・ガジベリピンバ・システム」を開始。その作演出をすべて手掛ける。1990年「遊園地再生事業団」の活動を始める。『ヒネミ』（1993）で第37回岸田國士戯曲賞受賞。執筆も多数。最新著作は、『東京大学「80年代地下文化論」講義 決定版』（2015、河出書房新社）。

## On Dairakudakan

Akio Miyazawa

Dairakudakan has a strange allure.

We could perhaps simply call it “interesting.” The leaps of ideas seem somewhere to be trying to astonish, which we might think is responsible for the attraction, but simultaneously at the roots of the expression is deep insight and a gaze toward the body.

No, it’s something really straightforward: it’s the question of whether or not our everyday behavior and actions are prescribed by something. Of course, there are rules and manners, so we have correct ways to be have on the bus, correct ways to ride a bike, and correct ways to walk. I’ve never thought of that as oppression, but there is no doubt that Dairakudakan leader Akaji Maro thinks that, if you are going to try to escape those standards, you need to be thorough. When I first encountered Butoh, I was utterly beguiled by its strangeness, its peculiarity. I didn’t understand why they moved like that, or why they painted themselves white. I didn’t understand anything, but nonetheless I was fascinated by the Butoh dancers on the stage.

The creator’s consciousness is directed toward the body.

Not only Butoh, the inquiry surely starts from this point also in contemporary dance, theater, and even the classical performing arts. The body is originally something that “I” possess. However, it often feels inconvenient, meaning it may be something that appears from the state of the socially located “I” or, even more primordially, from within me, and which then binds me. Suspicious of the state of the body that ordinarily reflects pure gestures and actions, and moves automatically, from the very start Dairakudakan intended to be something that is not here; a freak or a phantom that makes you want to turn your eyes away.

Where was the creative source for this “Butoh” that Maro built up his teacher Tatsumi Hijikata, a dance that would seem to send shudders down the spine of those who had always pursued beauty in their dancing? For example, the image of the fetus that is referenced by so many Butoh dancers is detached from daily life precisely because it exists in a far away place in the memory, though nevertheless it is undeniably “me.” From that peculiar time of the fetus, Butoh questions the body of the “I” in the present, which carries out utterly ordinary gestures, automatically performs gestures like bowing.

Of course, everyone thinks this. But that’s precisely why, now of all times, I want to focus on the movement of those methods and ideas being created by Akaji Maro and Dairakudakan. Until a certain point, unable to put into words what Butoh is doing, all I could write were naive impressions like “I saw something strange.” But now, looking at it again, I actually want to write “I saw

something strange” as a tribute to Dairakudakan.

The reason is that being “strange” or a “freak” today allows you to talk of an incredibly powerful privilege.

That’s something Maro once said in a TV interview. When he was still young, Maro was sleeping in the rehearsal studio. Tatsumi Hijikata saw this and found it interesting. He told Maro to make that into a performance. Most likely, even I would have found it interesting to watch Maro sleeping. I too would probably request him to express that in a play.

At any rate, Akaji Maro is sleeping.

But what Hijikata and Maro would create from this “interesting” thing is surely different to what I would do. The source is the same: Maro is sleeping. But when it becomes artistic expression, how it differs is, as I wrote before, the initial uneasiness I felt about Butoh, the feeling that I want to shun this strange something. If we think of Butoh as what is miraculously born in a moment when those who can only express themselves come together and integrate different approaches to the body, suspicion of ordinary human gesture, excessive deviation (even though all you need to do is walk straight to reach your destination), and the memory of the fetus, then that is something to envy indeed. As I wrote at the start, Dairakudakan has this allure that comes from its ideas. The expression of these is formed and appears before the audience.

New dance is born as a result of primordial ideas. That tenacity, suppleness and innocence overwhelms the viewer.

This is something of a digression, but more than 10 years ago there was a Dairakudakan performance at the Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design. On the campus there was hardly any place where you could smoke, so the Butoh dancers were having a cigarette at this allocated spot outside. I remember it was December. As these dancers, almost completely naked, smoked, they all muttered about how cold it was. Yes, Butoh dancers also get cold. It is cold to be naked outside in winter.

Akio Miyazawa

Playwright, director and novelist. Born in 1956, he studied at Tama Art University but left without graduating. In the mid-1980s he was part of Radical Gajiberibinba System with Naoto Takenaka and Seiko Ito, writing and directing all their work. He launched his theater company U-enchi Saisei Jigyodan in 1990. *Hinemi* (1993) won the 37th Kishida Kunio Drama Award. He is also a prolific writer and his most recent book is about underground culture during the 1980s.

# チェルフィッチュ chelfitsch

JAPAN

photo: Masumi Kawamura

## 部屋に流れる時間の旅

Time's Journey Through a Room

🕒 90 min (予定 | TBC)

◀ 新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere

📅 3/17 (Thu) 20:00-  
3/18 (Fri) 20:00-  
3/19 (Sat) 15:00-, 20:00-  
3/20 (Sun) 12:00- (追加公演), 17:00-  
3/21 (Mon) 12:00-, 17:00- □

🗨️ 日本語 (英語字幕あり)  
Performed in Japanese with  
English surtitles

🗨️ ポスト・パフォーマンス・トーク ゲスト: 濱口竜介 (映画監督)  
Post-performance talk Guest: Ryusuke Hamaguchi (Film director)

永遠の希望をもった死者への羨望。死者と生者の関係を描いた『地面と床』を経て、新たな「音／言葉／身体／空間」に迫る待望の最新作

新作戯曲が文芸誌にぎわす岡田利規による脚本と批評性の高い演出、鋭敏な感覚でそれに応える役者を揃えて、世界各国の舞台芸術シーンから熱い注目を集めるチェルフィッチュの新作。すでに世界各地の重要なフェスティバルでの上演が予定されている本作の世界初演をKYOTO EXPERIMENTで行うことが決定した。

前作の『地面と床』では、日本独自に洗練を遂げてきた能楽をも参照しながら、生者と幽霊が行き交う世界が構築されたが、今回はさらに踏み入って、“死者に対する生者の羨望”が描かれる。また、音楽と役者が並列に存在する新しい“音楽劇”の形を模索した前作に対して、今作では、京都の現代美術家久門剛史との共同作業により、フィールドレコーディングの手法も用いながら舞台環境が調えられる。久門は、微細な気配をもとに時間や記憶を呼び覚ますような、劇的なインスタレーション作品を作ってきた話題のアーティスト。まだ見ぬ音と言葉と身体と空間の関係へ。チェルフィッチュがさらなる前進を見せる。

**Toshiki Okada's follow-up to *Ground and Floor* portrays the living's envy of the dead through a new interpretation of sound, voice, body, and space**

Whenever Toshiki Okada publishes a new play in a literary magazine he creates a storm, while his sharply directed productions with subtly responsive performers have attracted attention on the theater circuits around world. This new play, written and directed by Okada, premieres at Kyoto Experiment before touring to major international festivals.

In *Ground and Floor*, Okada previously referenced the elegance of Japanese Noh theater to construct a world that traversed the living and the dead. Taking this further, his new play portrays “the living's envy of the dead.” Following on from his earlier exploration of new musical formats through overlapping the music of the band Sangatsu with the live voices of actors, Okada here works with Kyoto-based visual artist Tsuyoshi Hisakado to create an on-stage environment and field recordings. Hisakado is known for his theatrical installations that delicately evoke time and memory. Together with Hisakado, chelfitsch now takes audiences further into unknown relationships between sound, the body, language, and space.

📍 ロームシアター京都  
ノースホール  
North Hall, ROHM Theatre Kyoto

作・演出: 岡田利規  
音・舞台美術: 久門剛史  
出演: 青柳いづみ、安藤真理、吉田庸  
舞台監督: 鈴木康郎  
音響: 牛川紀政  
照明: 大平智己 (ASG)  
演出助手: 柳雄斗  
宣伝写真: 川村麻純  
フライヤーデザイン: 佐々木暁  
制作: 黄木多美子、ケティン・菜々、兵藤菜衣 (共にプリコグ)、河本あずみ (ロームシアター京都)  
製作: チェルフィッチュ  
企画制作: プリコグ  
国際共同製作: KYOTO EXPERIMENT/  
ロームシアター京都、クンステンフェスティバル  
デザール (ブリュッセル)、フェスティバルド  
トヌ・バリ、クンストラ・ハウス・ムーン・トゥ  
ルム・フランクフルト、ラ・パティ・フェスティバ  
ル・ジュネーヴ、スプリング・パフォーミングア  
ーツ・フェスティバル・ユトレヒト  
協力: にしすがも創造舎、水天宮ビッド  
京都芸術センター制作支援事業  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Writer and director: Toshiki Okada  
Sound and set design: Tsuyoshi Hisakado  
Cast: Izumi Aoyagi, Mari Ando, Yo Yoshida  
Stage manager: Koro Suzuki  
Sound director: Norimasa Ushikawa  
Lighting director: Tomomi Ohira (ASG)  
Assistant director: Yuto Yanagi  
Publicity photography: Masumi Kawamura  
Publicity design: Akira Sasaki  
Production manager: Tamiko Ouki, Nana Koetting, Mai Hyodo (all for precog), Azumi Komoto (ROHM Theatre Kyoto)  
Production: chelfitsch  
Associated production: precog  
Co-produced by: Kyoto Experiment/ROHM Theatre Kyoto, Kunstenfestivaldesarts (Brussels), Festival d'Automne à Paris, Künstlerhaus Mousonturm Frankfurt, La Bâtie - Festival de Genève, SPRING Performing Arts Festival Utrecht  
In co-operation with: Nishi-Sugamo Arts Factory, Suitengu Pit  
Kyoto Art Center Artist in Studio Program  
Presented by: Kyoto Experiment

## 出会いへの期待

建畠哲

KYOTO EXPERIMENTに足を運ぶ方々には釈迦に説法ということになってしまいそうだが、今日の先端的な作品では、時間芸術と空間芸術の弁別はもはや不可能であるか、少なくとも積極的な意味は失いつつあるように思われる。私にいわせればそんな単純な弁別自体に無理があるのであって、両者はもとより相互的に密接な関係を有していたはずなのだ。

ともあれ今回のKYOTO EXPERIMENTで旧知の岡田利規と久門剛史がコラボレーションするというのは、大いにうれしいニュースであった。もちろん世間的には岡田は演劇人であり、久門は美術家であるには違いない。しかし両者ともそれぞれの作品において時間と空間の関係について実にユニークな発想をもち、言葉と身体を直接的に関わらせる方法においても注目すべき実験を行ってきているのである。

10年ほど前、たまたま神戸のシンポジウムで一緒に演劇評論家の鴻英良さんの薦めで、チェルフィッチュの『三月の5日間』を六本木のスーパーデラックスまで見に行き、その場にいた岡田さんに即座に美術館のギャラリー(空間芸術のための場所)で公演してくれないかという無謀な申し入れをしたのも、また一昨年、久門からチャイムの音が不穏に響く廃校になった京都の小学校の教室を使った彼のインスタレーションの中で詩を朗読してくれないかという依頼に一も二もなく応じたのも、両者の姿勢にジャンルの既成概念を更新する、あるいは根源へと遡行するような可能性を感じたからといえなくはない(まあ、それは建前で、正直なところは、単なるミーハー的なファンに過ぎないのかもしれない)。

今回の新作の内容については何も聞いていないし、このお二人がどのようにして出会ったのかも知らないが、私としては両者の共同作業が単なる芝居と舞台装置との関係を越えた新たな光景

を出現させてくれるのではないかと、わくわくする気持ちを禁じえない。ここまで期待させる演劇人と美術家の出会いは、おそらく遠藤利克や内藤礼と組んだ太田省吾の舞台以来のことではなかろうか。

そういえば岡田利規はこれまでもベルリン在住の美術家、塩田千春とのコラボレーションを二度ほど行っている。金沢21世紀美術館での試み(『記憶の部屋について』、2009)は、ギャラリー内に設置された無数の窓枠(解体された家屋からもってきたもの)を組み合わせた巨大な構築物の回りで不意に芝居が始まるという仕掛けで、特にストーリーが決められているわけでもない不思議な空間=時間であった。

それぞれに新たな局面を切り開いてきたご二人だが、さて、今回の『部屋に流れる時間の旅』ではどのようなコラボレーションの光景が展開されるのであろうか、両者の出会いの成果を楽しみに待ちたい。

建畠哲

1947年京都生まれ。1972年に早稲田大学文学部卒業後、多摩美術大学教授、国立国際美術館長、京都市立芸術大学学長を経て、現在は京都芸術センター館長、多摩美術大学学長。専門は近現代美術。1990年、1993年のヴェネツィア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、横浜トリエンナーレ2001、あいちトリエンナーレ2010のアーティストック・ディレクターなどを務める。アジアの近現代美術の企画にも多数参画。詩人としても活躍し、1991年に歷程新鋭賞、2005年に高見順賞を受賞、2013年に萩原朔太郎賞を受賞。

## Expectations on an Encounter

Akira Tatehata

While for audiences attending Kyoto Experiment this might be like preaching to the converted, it seems that making a distinction between temporal and spatial art in the avant-garde today is surely no longer possible, or at the least we can consider it to be losing meaning in any proactive sense. For me, such a simplistic distinction is impossible, and in fact both possess a mutually intimate relationship.

At any rate, this collaboration between Toshiki Okada and Tsuyoshi Hisakado is a wonderful thing. Of course, there is no doubt that publicly Okada is a theater artist and Hisakado is a visual artist. That being said, in their respective work we can see truly unique ideas about the relationship between time and space, and noteworthy experiments being attempted in ways that directly involve language and body.

Some 10 years ago, on the recommendation of the theater critic Hidenaga Otori when we appeared together at a symposium in Kobe, I went to see the chelfitsch production of *Five Days in March* at SuperDeluxe in Roppongi, where I met Okada and immediately made an imprudent proposal that he put on a performance in an art museum gallery (a place for the spatial arts). The year before last, I readily agreed to Hisakado's request to read my poetry in his installation in the classroom of a former Kyoto elementary school, filled with the disquieting resonance of chimes. One could say the reason was that in both artists I sensed possibilities in how they were renewing the existing concepts of category and genre, or even returning things back to their roots. (Well, while this is ostensibly true, you could also just say that I'm simply a star-struck fan.)

I haven't heard anything about the content of this new work, nor how these two artists managed to meet each other, and yet I cannot stop myself from getting excited about the new spectacle their collaboration will create transcending the relationship between mere play and stage set. Such an anticipated encounter between a theater and visual artist is perhaps the first such since Shogo Ota paired up with Toshikatsu Endo and Rei Naito.

Incidentally, Okada has also collaborated with the Berlin-based visual artist Chiharu Shiota on two previous occasions. The first was at the 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa (*About A Room of Memory*, 2009), where countless numbers of window frames (taken from demolished houses) were installed in the gallery space and arranged into a giant structure around which a play abruptly began. It was a mysterious space (and time) with no fixed particular narrative.

Both Okada and Hisakado are pioneering new aspects in their respective ways. I look forward to seeing the fruits of their encounter as it unfolds in *Time's Journey Through a Room*.

Akira Tatehata

Born in 1947 in Kyoto. After graduating from the Department of Literature at Waseda University in 1972, he served a lecturer at Tama Art University and director of the National Museum of Art, Osaka. After serving as president of Kyoto City University of Arts, he is currently director of Kyoto Art Center and president of Tama Art University. He specialism is modern and contemporary art. He was commissioner for the Venice Biennale Japan Pavilion in 1990 and 1993, and has also served as artistic director at the Yokohama Triennale 2001 and Aichi Triennale 2010. He has organized numerous Asian modern and contemporary art projects. He is also the recipient of several awards for his poetry.

# トリシャ・ブラウン・ダンスカンパニー

## Trisha Brown Dance Company

NEW YORK



Trisha Brown: In Plain Site (Group Primary Accumulation)  
in Museo Universidad Navarra Pamplona, 2015. © Alexandre Moyrand

## Trisha Brown: In Plain Site

🕒 60min (日本初演 | Japan Premiere)

📅 3/19 (Sat) 19:00-  
3/20 (Sun) 19:00-  
3/21 (Mon) 19:00-📍

🗉 ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

### 美術館を舞台に立ち上がる、膨大なレパートリーから選り抜かれたトリシャ・ブラウンの初期作品群。ダンス界の伝説が今の時代を射抜く

モダンダンスからポスト・モダンダンスへ。その転換を生み出した最も多岐にわたる時代の当事者として、トリシャ・ブラウンの名前は世界のコンテンポラリーダンス史に刻まれている。1960年代初め、それまでのモダンダンスを刷新する即興的、実験的な創作方法を実践した集団ジャドソン・ダンス・シアターで活躍をはじめ、その後、音楽家のジョン・ケージ、ローリー・アンダーソン、美術家のドナルド・ジャッドやロバート・ラウシェンバーグ、そして、振付家のマース・カニングハムら、さまざまなアーティストと創作の時間を共有しながら、コンテンポラリーダンスの牽引者として最前衛に立ち続けてきた。

ブラウンがダンス界に与えた影響から思えば、日本での公演は数えるほど。ブラウン自身は2014年、カンパニーの代表を退いているが、彼女の作品アーカイブを再構成する形で、カンパニーは世界ツアーを行い、その一環で京都公演が実現する。用意された舞台は京都国立近代美術館。劇場から解放された公共空間でのパフォーマンスを行っていた、実験精神みなぎる初期作品をオムニバス形式で上演する。50年近い時間を越えて、現代に響きあうブラウン作品。非劇場でのパフォーマンスはその鋭敏な批評性と明るい魅力を見るに絶好の機会といえるだろう。

### Early works and excerpts from Trisha Brown's vast repertory, performed in an art museum

Trisha Brown's name is engraved in the annals of contemporary dance history as one of the pioneers from the liminal era when modern dance evolved into postmodern dance. From her time in the early 1960s with Judson Dance Theater, whose experimental work with improvisational dance proved groundbreaking, to her later collaborations with the likes of music artists John Cage and Laurie Anderson, artists Donald Judd and Robert Rauschenberg, and choreographer Merce Cunningham, Brown has been a leading figure in avant-garde dance.

Despite her great influence globally, Brown's work is rarely performed in Japan. Although she no longer leads her company, the troupe continues to tour the world, reconstructing her archive of work. As part of this project the company comes to Kyoto to perform at the National Museum of Modern Art. There the company presents an omnibus of Brown's experimental works in the unique setting of a public art museum, transcending the five decades since their first inception to resonate with contemporary audiences in an unconventional performance space. This is a very special opportunity to experience Trisha Brown's critically incisive, vibrant dance.

DANCE

📍 京都国立近代美術館 1階ロビー

1F Lobby, The National Museum of Modern Art, Kyoto

創設者、アーティスティックディレクター：トリシャ・ブラウン

アソシエイト・アーティスティックディレクター：キャロライン・ルーカス、ダイアン・マッデン

出演：セシリー・キャンベル、マルク・クルジラ、オルシ・ジェシ、レア・イヴ、ローレル・ジェンキンス、ジェイミー・スコット、ステュアート・シュグ

エグゼクティブディレクター：バーバラ・デュフィ  
助成：ミッド・アトランティック芸術財団・USArtists国際プログラム(全米芸術基金およびアンドリュー・W.メロン財団の提携による)、日米友好基金

協力：京都国立近代美術館  
主催：KYOTO EXPERIMENT

Founding Artistic Director and Choreographer: Trisha Brown

Artistic Directors: Carolyn Lucas, Diane Madden

Dancers: Cecily Campbell, Marc Crousillat, Olsi Gjerci, Leah Ives, Laurel Jenkins, Jamie Scott, Stuart Shugg

Executive Director: Barbara Dufty

Supported by: Mid Atlantic Arts Foundation through USArtists International in partnership with the National Endowment for the Arts and the Andrew W. Mellon Foundation, and by the Japan-United States Friendship Commission

With the cooperation of: the National Museum of Modern Art, Kyoto

Presented by: Kyoto Experiment

日米友好基金  
JUSFC 40th Anniversary  
Japan - United States  
Friendship Commission  
Supporting People & Partnerships

MID ATLANTIC  
ARTS FOUNDATION

## トリシャ・ブラウンとニューヨーク・シーン

一柳慧

私が滞在していた1950年代後半から、1960年代のニューヨークは、今思い返しても、街全体が芸術的熱気に満ち溢れていた時代であった。それは特に前衛芸術の領域で顕著であり、それぞれの分野がお互いに刺激し合いながら連繋し、コラボレートしながら新しい創造活動を行っていた。トリシャ・ブラウンはそのような時代や社会の申し子のような存在として彗星の如く登場してきたニューヨークのダンサーであった。

当時のニューヨークのダンス界ではマース・カニングハムを頂点とするモダンダンスが活動の最盛期にあったが、カニングハムの弟子たちや、ブラウンのように更に次のダンスを目指す若い人たちも台頭してきていてそれぞれが個性的な営みを行っていた。デボラ・ヘイ、イヴォンヌ・レイナー、ルシнда・チャイルズ、ポール・テイラー、シモーヌ・フォルティ、ステイーヴ・パクストンといった若手のダンサーたちは、音楽や、美術や、映像をはじめ、当時先端的傾向として注目されていた芸術と技術<sup>テクノロジー</sup>のかかわりに積極的に参加し、推進する役割も果たしていた。他の分野の芸術家たち、たとえば音楽家のジョン・ケージやデイビット・テュードア、美術のロバート・ラウシェンバーグ、ジャスパー・ジョーンズ、アレックス・ヘイ、ロバート・モリスら、映像作家のスタン・ヴァンダービーク、建築家のバックミンスター・フラーやフィリップ・ジョンソン、そして電子技術者のビリー・クルーヴァーたちもダンサーたちと能動的にかかわりをもって臨んでいたこともあって、そこでの各ジャンルの出会いやコラボレーションは、さながら新しい総合芸術の誕生を促すような趣があった。事実、インターメディア、ミクスド・メディア、マルチ・メディアなどの言葉が生まれたのも、1960年代のこの時期であった。

最近も世界的にみると、ダンス界は多士済々でその活動は目覚ましいものがある。だが、かつて多くの可能性を秘めていたニューヨークのダンサーたちの流れを受け継ぎ、発展させたのは、近年はヨーロッパ系のダンサーたちに目立つようになった。自己主張に貫かれた活動を、長い年月の間維持し、行ない続けることがいかに難しいかを感じさせるそんな状況の中で、トリシャ・ブラウンは今もニューヨークを拠点に、実験精神が横溢したたくましいアメリカン・ダンスを発信し続けている稀有な存在だと言えるだろう。

出典：DVD「トリシャ・ブラウン初期作品集 1966-1979日本版」(2006、株式会社プロセスアート配給) 附属ブックレットより転載

一柳慧

作曲家、ピアニスト。1933年神戸市生まれ。1954-1957年ニューヨークのジュリアード音楽院に学び、1961年まで同市に滞在、ジョン・ケージ、デヴィッド・テュードア、ステファン・ウォルベ、マース・カニングハムらと前衛的芸術活動を展開。1961年吉田秀和らの「20世紀音楽研究所」フェスティバルの招聘により帰国。自作および日欧米の新しい音楽の紹介と演奏をおこない、様々な分野に強い影響を与える。ロックフェラー財団、ケルン現代音楽祭、ベルリン芸術週間など世界各地のフェスティバルから招聘を受け、委嘱作を含めた作品を発表している。これまでに、交響曲「ベルリン連詩」などで尾高賞を4度(1982、1984、1989、1990)、フランス文化勲章(1985)、毎日芸術賞(1989)、京都音楽賞大賞(1989)、紫綬褒章(1999)、サントリー音楽賞(2002)など数々の賞を受賞。2008年文化功労者。現在、セゾン文化財団評議員、公益財団法人神奈川芸術文化財団芸術総監督などを務める。

## Trisha Brown and the New York Scene

Toshi Ichiyanagi

Even looking back on it now, the period when I resided in New York from the second half of the 1950s to the 1960s truly was a time when the whole city seemed to overflow with artistic fervor. This was particularly prominent in the avant-garde arts, with each field mutually stimulating the other, cooperating and collaborating in the work of creating new art. Into this scene in New York appeared the dancer Trisha Brown like a comet, a product of her time.

In the New York dance world, modern dance was then at its height, with Merce Cunningham as the apotheosis. Cunningham's disciples and younger artists like Brown aspiring to create the next dance movement were also emerging and participating in activities in their own individual ways. Young dancers like Deborah Hay, Yvonne Rainer, Lucinda Childs, Paul Taylor, Simone Forti, and Steve Paxton energetically explored and developed the relationship between art and technology, which was gaining attention as the cutting-edge trend of its time also in such fields as music, visual art, and video art. Artists from other fields—for example, the composers John Cage and David Tudor, the artists Robert Rauschenberg, Jasper Johns, Alex Hay and Robert Morris, the filmmaker Stan VanDerBeek, the architects Buckminster Fuller and Philip Johnson, and the electrical engineer Billy Klüver—also proactively involved themselves with dancers, resulting in encounters and collaborations between fields that fostered the birth of a new total art (*Gesamtkunstwerk*). In fact, it was during this period during the 1960s that the terms “intermedia,” “mixed media,” and “multimedia” first appeared.

These kinds of activities are also recently conspicuous among a great number of people in the international dance scene. However, the inheritance and development of what the one-time such enormously important New York dancers were doing has actually been most prominent of late among European dancers. Even as it seems harder and harder to maintain fully self-assertive activities over a long period, Trisha Brown is what we should surely call a truly rare talent, still based today in New York and continuing to create American dance that is robust and immersed in an experimental spirit.

First printed in a booklet included with the DVD “Trisha Brown: Early Works, 1966-1979” (2006, PROCESSART inc.)

Toshi Ichiyanagi

Composer and pianist, born in Kobe in 1933. He studied at the Juilliard School from 1954 to 1957, and then remained in New York until 1961 where he was active in the avant-garde arts with the likes of John Cage, David Tudor, Stefan Wolpe, and Merce Cunningham. He returned to Japan in 1961 to take part in Hidekazu Yoshida's 20th-Century Music Laboratory Festival. His own music as well as showcasing and performances of new European and American music had a profound influence on many other fields. He has received commissions and invitations from festivals around the world, including the Rockefeller Foundation, Cologne Festival of Contemporary Music, and Berliner Festwochen. Among his numerous awards are the L'ordre des Arts et des Lettres (1985), Purple Medal of Honor (1999) and Suntory Music Prize (2002). In 2008, he was made a Person of Cultural Merit. He is currently a member of the board of trustees at the Saison Foundation and general artistic director of Kanagawa Arts Foundation.

# マヌエラ・インファンテ / テアトロ・デ・チレ

## Manuela Infante / Teatro de Chile

SANTIAGO, CHILE



© Valentín Zaldívar

### 動物園

Zoo

🕒 60 min (日本初演 / Japan Premiere)

1 3/25 (Fri) 20:00-  
3/26 (Sat) 20:00- □  
3/27 (Sun) 17:00-

🗣️ スペイン語(日本語・英語字幕あり)  
Performed in Spanish with Japanese  
and English surtitles

□ ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

マヌエラ・インファンテ ワークショップ / Manuela Infante Workshop  
篠田千明演出『動物園』のためのオープンセッション  
/ Open Session for Chiharu Sinoda's Staging of Zoo  
→p.64, 65

📍 京都芸術センター 講堂  
Auditorium, Kyoto Art Center

脚本: マヌエラ・インファンテ、テアトロ・デ・チレ  
演出: マヌエラ・インファンテ  
出演: クリスティアン・カルバル、アリエル・エルモシージャ、エクトル・モラレス、フアン・パブロ・ペラガジョ、カティ・カベサス  
映像: ニコル・セネルマン  
舞台美術: クラウディア・ショリン、ロシオ・エルナンデス  
音響、音楽: ディエゴ・ノゲラ  
トレーナー: マリア・ホセ・バルガ  
プロデューサー: カティ・カベサス  
日本語字幕: 二村奈美  
製作: テアトロ・デ・チレ  
助成: チリ共和国外務省文化部 (Dirac)  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Text: Manuela Infante and Teatro de Chile  
Direction: Manuela Infante  
Cast: Cristián Carvajal, Ariel Hermosilla, Héctor Morales, Juan Pablo Peragallo, Katy Cabezas  
Video: Nicole Senerman  
Stage design: Claudia Yolín and Rocío Hernández  
Sound design and original score: Diego Noguera  
Training and physical preparation: María José Parga  
Producer: Katy Cabezas  
Japanese surtitles: Nami Futamura  
Production: Teatro de Chile  
With the support of: Dirac, Department of Cultural Affairs, Ministry of Foreign Affairs of the Republic of Chile  
Presented by: Kyoto Experiment



#### 新世代ひしめくチリから、最注目才能が登場。 言語の政治性から世界の非対称性を暴く

今回のKYOTO EXPERIMENT参加者にあって最も若い世代、1980年生まれのマヌエラ・インファンテは、チリ演劇界のホープとして世界にその名を知られつつある。そもそも1990年までピノチェト独裁が続いたチリでは、軍事独裁政権で途切れてしまった演劇文化が、その後生まれた若い世代のアーティスト、観客たちによって新たな盛り上がりを見せているという。そんなポスト独裁主義世代の筆頭にあげられるインファンテが、待望の初来日を果たす。

2013年に初演された『動物園』は、絶滅したと思われていた原住民を発見した科学者によるレクチャーという形式をとりながら、ダーウィンの『種の起源』に端を発する帝国主義、知識や文化の偏差、言語の違いから生まれるさまざまな齟齬を舞台上に上げる。それは、19世紀にいたるまで長く植民地地下におかれたチリの土地の記憶に根ざした作品でもあるが、見る／見られるの関係を孕んだ「人間の展示」という主題は、観劇に興じる私たちにも向けられているのではない。

#### A leading talent from Chile's new generation presents an exploration of the political nature of language and asymmetry

Born in 1980, Manuela Infante is the youngest artist participating in this Kyoto Experiment, though the Chilean theater artist is already widely known around the world. Theater in Chile was long stymied by dictatorship, with the Pinochet regime remaining in power until as recently as 1990. The people growing up after this have, as artists and audiences, helped create a new cultural revival. Manuela Infante is a preeminent figure in this post-dictatorship generation and now makes her debut in Japan.

Premiered in 2013, Zoo is a lecture performance by scientists who have discovered an indigenous tribe believed extinct. It explores the various discrepancies born out of linguistic differences, deviations in knowledge and culture, and imperialism, which emanated from Darwin's *On the Origin of Species*. Rooted in Chile's protracted history as a colony until the nineteenth century, Zoo examines the theme of exhibited humanity. As audiences watch the performance, they find themselves questioning the direction of the "viewing." Who is watching whom?

## レビュー

### 前時代の人々、見えない接点

マヌエラ・インファンテは起承転結に無関心である。テアトロ・デ・チレの創り出す演劇はすっきりまとまった作品というよりは、できる限りの方法を駆使しテーマに切り込んでいく作品と言える。時に対立するものを接近させ、そうすることで一方的な見方に異議を唱え、紋切り型の表現に疑問を投げかける。インファンテの最新作『動物園』も同様である。19世紀ヨーロッパで人間動物園の展示物としての運命をたどったフエゴ島民に着想を得たというインファンテは、その論争の舞台を21世紀に置き換えている。2人の科学者が舞台上に現れ、絶滅したと考えられていた部族の生き残り2人をブンタ・アレナスの廃屋で発見したと告げる。科学者は彼らを入念に研究し、ダーウィン説の証拠として保護しようと、経験主義に基づき彼らの反応1つ1つを記録する。一方、絶滅の一途にある2人は模倣をすることで新しい環境に適応しようとし、科学者が投げかける言葉を理解しようとはせずオウム返しするだけである。

『動物園』は複雑な作品であり、単なる逸話を遙かに超えた考察に取り組もうという野心的な作品と言えるだろう。だが決して理解しがたい閉鎖

的な作品とはなっていない。むしろ逆である。エクトル・モラレス、ファン・パブロ・ペラガシヨ、クリスティアン・カルバハル、アリエル・エルモシシャといった俳優陣は、保護すべき文化を相手にするという常軌を逸した、もどかしい状況の中でもユーモアたっぷりに演じている。観察者である科学者と観察される側である先住民の間の噛み合わない会話は時に笑いを誘う。そして役が逆転し、観察する者が観察される側となる。観察される側とは、服従者であり、標本であり、動物であり、展示物の一つである。コミュニケーションなど不可能である。なぜなら時として言語は不十分だからだ。現実のある種の核心を探ろうとする時、言語には限界があるのだと、わたしたちはこの舞台を見て気づくのである。理性という道具で現実の核心を解読しようとしても無駄におわる。そしてそのとき言語も概念も記憶もノスタルジーも役に立たないと分かるだろう。舞台上の科学者は、言語に音以上の意味を与えたいと望みながらも、空しくこう問いかけてくる。「自然の中で言語だけが唯一雄弁な音だとも思っていたのか?」。無闇に理解するよりも、まず耳を傾け聴くこと。それが『動物園』のテーマである。

出典:アレハンドラ・コスタマグナ「前時代の人々、見えない接点」  
Qué PASA <http://www.quepasa.cl/articulo/guia-del-ocio/teatro/2013/05/249-11762-9-hombres-antiguos-nudos-ciegos.shtml> (2013年5月13日掲載、2016年1月6日閲覧)

## Review

### Ancient men, blind knots

Manuela Infante's works often lack a beginning, a middle and a perfectly rounded ending. Rather than a round narrative, the Teatro de Chile theater company shows diverse ways of presenting certain issues: its approach is often conflicting; it defies unilateral vision and questions clichés. This happens in *Zoo*, their more recent show that tells the story of the "fueguinos," or natives of Tierra del Fuego, who were exhibited in a human zoo in XIX century Europe. Infante transfers the conflict to the 21st century and introduces two scientists who find two survivors of an ethnic group believed to be extinct, in an abandoned house in Punta Arenas. The scientists strive to study them and empirically test each of their reactions to preserve them as a Darwinian evidence. The almost extinct men seem to adapt mimetically to the new circumstances and become empty receptors of a message they reproduce without understanding.

Although *Zoo* is complex and perhaps ambitious in its intent to follow a reflection that goes beyond mere anecdote, it is not a cryptic or enclosed production.

On the contrary, actors Héctor Morales, Juan Pablo Peragallo, Cristián Carvajal and Ariel Hermosilla play humor-charged situations, becoming outrageous and provocative against political correctness. The deft dialogue between scientists and the observed natives is often hilarious. The roles are reversed and the watcher becomes the watched; the subjugated, the specimen, the animalized being, the museum piece. And no communication is possible because sometimes language is not enough.

And we understand they are telling us also about the inability of words to explain certain knots of reality. Those knots blind us each time we try to decipher them with the tools of reason. And then we understand that language is wasted, concepts are wasted, memory is wasted and even nostalgia is wasted. "Have you realized that words are the only arrogant sounds in nature?", asks one of the characters out loud, referring to the pretentious claim to assign additional meanings to words besides that of sound. It is about listening rather than blind understanding. That is what *Zoo* is all about.

Source: Alejandra Costamagna, *Ancient men, blind knots*  
Originally published on Qué PASA <http://www.quepasa.cl/articulo/guia-del-ocio/teatro/2013/05/249-11762-9-hombres-antiguos-nudos-ciegos.shtml> (posted on May 13, 2013; accessed on January 6, 2016)



# 足立智美 × contact Gonzo

Tomomi Adachi & contact Gonzo

BERLIN and OSAKA

## てすらんばしり

Teslan Run

🕒 60 min (予定 | TBC) (新作 | 世界初演 / New Creation | World Premiere)

📅 3/26 (Sat) 14:00-  
3/27 (Sun) 14:00-📍

📄 ポスト・パフォーマンス・トーク / Post-performance talk

子どもたちのパフォーマンスが加速する。

型破りな2組の機知と奔放

KYOTO EXPERIMENTの子どもに向けたプロジェクトの新たな試みとして、舞台の音楽を子どもたちとともに制作する。音楽づくりを行うのは、ヴォイスパーフォーマー、作曲家の足立智美。ベルリンを拠点に、即興演奏、楽器の創作、音響詩の演奏など幅広い活動を展開している。子どもたちとの事前のワークショップでは、図形楽譜を用いて自由な音が引き出される。

足立と共同作業を行うのは、前回のKYOTO EXPERIMENTで西京極スタジアムという規格外の会場で新作を発表したcontact Gonzo。激しく身体をぶつけあうパフォーマンスをベースに、さまざまな共演者や会場にあわせてしなやかに表現を生みだしてきた。既存の枠に収まらない唯一無二のパフォーマンスを繰り広げてきた両者だが、それぞれの表現の最初の衝動は子どもの遊びの延長上にあるともいえる。

本作は、足立と子どもたちとの事前のワークショップで作られた図形楽譜をもとにした音楽を起点に、舞台には放電によって稲妻を発生させる放電共振型変圧器「テスラコイル」が据えられる。

初顔合わせとなる足立智美とcontact Gonzo、その音と身体に子どもたちのパフォーマンスが加わり、かつてない音の空間が立ち上げられるに違いない。

**A wild and witty partnership that breaks conventions, performed with children**

Part of a new kids' project at Kyoto Experiment, the music for this performance is created with children by voice performer and composer Tomomi Adachi. Based in Berlin, Adachi's wide-ranging output includes improvisational performances, self-made instruments, and sound poetry. At a preview workshop he used a musical score made from shapes in order to elicit freer sounds.

Working with Adachi is contact Gonzo, the performance group who presented a new work at the last Kyoto Experiment was at the unconventional venue of Nishikyogoku Stadium. Their bodies crashing violently into each other, contact Gonzo showcased a lithe class of physical performance. While both Adachi and contact Gonzo have pursued unique styles of performance unrestrained by conventions, the basic impulse of their creativity remains an extension of children's playfulness.

Departing from music based on a musical score created in workshops between Tomomi Adachi and children, the stage features a Tesla coil, a type of transformer that generates lightning from electrical discharge.

For their first collaboration, contact Gonzo and Adachi are joined by the young performers to create an utterly new kind of soundscape.

MUSIC + PERFORMANCE

京都府立府民ホール“アルティ”  
Kyoto Prefectural Citizens' Hall ALTI



本作品は高電磁波が出る舞台美術を使用します。大きな音が出る可能性があります。

This performance features high-frequency electromagnetic waves. There may be loud sounds

構成: 足立智美、contact Gonzo

音楽: 足立智美

出演: 足立智美、contact Gonzo、ワークショップ参加及び一般公募による子どもたち  
特殊効果: 葉師寺三津秀

音響: 西川文章

照明: 筆谷亮也

舞台監督: 夏目雅也

音響助手: 井上美幸

制作: 川崎陽子 (SAYATEI)、和田ながら

製作: KYOTO EXPERIMENT

【子どもたちの舞台芸術創造事業～未来の「劇場文化」のために～】

助成: 一般財団法人地域創造、独立行政法人国立青少年教育振興機構「子どもゆめ基金助成活動」、公益財団法人セゾン文化財団

後援: 京都市教育委員会、公益社団法人京都市児童館学童連盟

共催: 京都府立府民ホール“アルティ”

主催: KYOTO EXPERIMENT

Concept: Tomomi Adachi, contact Gonzo

Music: Tomomi Adachi

Performer: Tomomi Adachi, contact Gonzo,

children from workshop and open call

Special effect: Mitsuhide Yakushiji

Sound: Bunsho Nishikawa

Lighting: Ryoya Fudetani

Stage manager: Masaya Natsume

Sound assistant: Miyuki Inoue

Production coordinator: Yoko Kawasaki

(SAYATEI), Nagara Wada

Production: Kyoto Experiment

Supported by: Japan Foundation for Regional

Art-Activities, Children's Dream Fund of

"National Institution for Youth Education",

The Saison Foundation

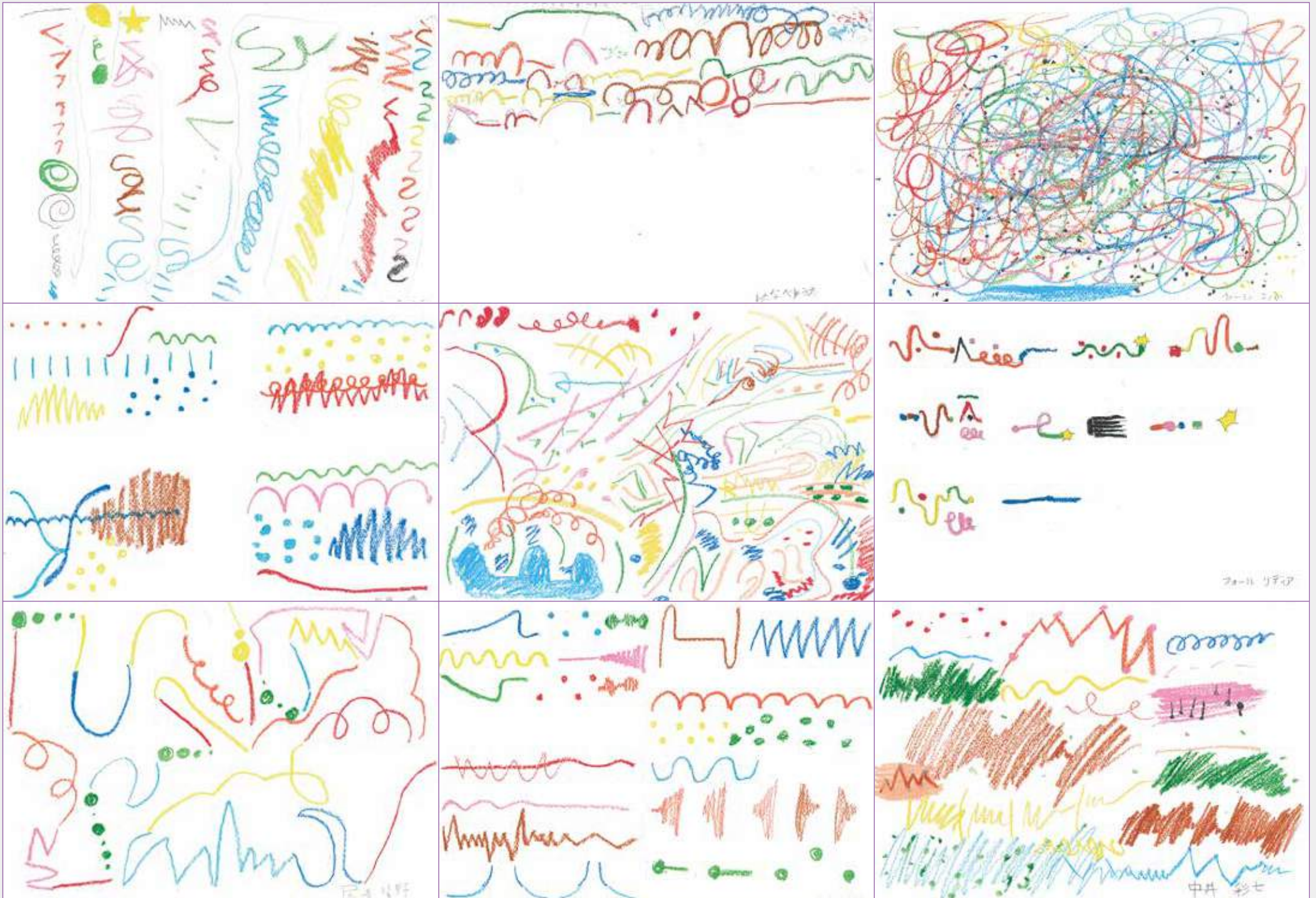
Under the auspices of: Kyoto City Board of

Education

Co-presented by: Kyoto Prefectural Citizens'

Hall ALTI

Presented by: Kyoto Experiment



2015年12月に行ったプレイベント「足立智美 音楽づくりワークショップ」にて参加者の小学生によって作られた図形楽譜(一部)。『てすらんばしり』はこれらの図形楽譜を元に作られた音を起点に制作される。これらの図形楽譜は全て「てすらんばしり スコアプロジェクト」としてウェブサイト公開され、誰もが演奏可能、演奏した音源を投稿できる。また、公演でもその音源が使用される予定である。  
てすらんばしり スコアプロジェクト: [teslanrun.wordpress.com](http://teslanrun.wordpress.com)

This is part of the graphic score made by elementary school students with Tomomi Adachi at a December 2015 preview workshop event. *Teslan Run* has been devised from sounds based on this graphic notation. The entire graphic score is available online. Anyone can play it and upload the sounds they make. The performance of *Teslan Run* plans to use these sound sources.  
[teslanrun.wordpress.com](http://teslanrun.wordpress.com)

# ボリス・シャルマツツ / ミュゼ・ドゥ・ラ・ダンス

Boris Charmatz / Musée de la danse

RENNES, FRANCE

## 喰う

manger

🕒 90min (talk: 30min./performance: 60min.) (日本初演 / Japan Premiere)

📅 3/26 (Sat) 17:00- ■

3/27 (Sun) 14:00- ■

🗨️ プレ・パフォーマンス・トーク / Pre-performance Talk

フランス・ダンス界の寵児が到達した“食べる”という行為に、ダンサーの身体は、観客は、何を見出すか

1996年、パニョレ国際振付家コンクールで振付賞と最優秀ダンサー賞を23歳で受賞して、華々しくコンテンポラリーダンス界にデビューしたボリス・シャルマツツ。2011年には、アヴィニョン演劇祭のアソシエイト・アーティストとして『enfant』を発表。大人の暴力、欲望の対象とされる子どもたちが、一転して大人を追い回しているような舞台は、現代の鮮やかなネガ/ポジとなっていた。2015年には、ダンスというレンズを通してみることで美術館を別の空間へと変貌させる『テートモダンがMusée de la danse だったら?』および、オペラ座バレエ団のダンサー20人が、パリのガルニエ宮のパブリックスペースで踊るシリーズの最新作『20世紀のための20人のダンサー』を発表し話題に。シャルマツツは、世界の注目を集める存在であり続けている。

2014年にドイツで初演された本作の原題「manger(マンジェ)」は、直訳すれば「食べる」の意。通常のダンス表現ではあまり重要な役を与えられない「口」をムーブメントの中心にして、食べることから歌うこと、そして、呼吸や消化といった根源的な行為へとダンサーの身体が駆り立てられることになる。食べ物に見立てられた何かに激しく噛みつき、飲みこみ、咀嚼し続けるパフォーマーの行為を、現実を消化している姿とみるか、宗教的な祈りの表現とみるか。あるいは、身体を使った劇画、サウンドインスタレーションだろうか。そして、最後にはすべてが消えてなくなる。

**The trailblazer of the French dance world scrutinizes the physical act of eating**

Boris Charmatz took the contemporary dance world by storm when he won the prize for best dancer at the Bagnolet Festival International Choreography Competition at the age of 23. In 2011, he presented *enfant* as the associate artist of Festival d'Avignon, turning dance on its head to examine adult violence and desire through the often inert bodies of children. Director of the Musée de la danse / Centre chorégraphique national de Rennes et de Bretagne since 2009, he created acclaimed projects in 2015 with *If Tate Modern was Musée de la danse?* a project that proposes a fictional transformation of the art museum via the prism of dance as well as with *20 dancers for the XX Century*, a new version of the project with 20 dancers of the Ballet de l'Opéra performed in the public spaces of Palais Garnier in Paris. Charmatz continues to attract international attention for his pioneering work.

Premiered in Germany in 2014, *manger* derives its title from the French word for “eating.” Centering on the movement of the mouth, an aspect of the body that rarely plays an important part in dance, the bodies of the dancers are compelled to “perform” the primordial acts of eating, singing, breathing, and digesting. The dancers, chewing, swallowing, and masticating, seem almost to be digesting reality itself. Or is it rather an expression of religious prayer? Or a tableau or sound installation that makes the use of body? In the end, everything vanishes.

京都芸術劇場 春秋座  
Kyoto Art Theater Shunjuza



未就学児入場不可

開演後入場不可

Children under school age not admitted,  
No entry after the performance starts.

振付: ボリス・シャルマツツ  
出演: オル・アヴィシャイ、マチュー・バルパン、ヌノ・ビザッロ、アシュレ・チェン、オルガ・デクホブナヤ、アリックス・エイノーディ、ベギー・グルラ・デュボン、クリストフ・イブ、モード・ル・プラデク、フィリップ・ルランソ、マーク・ロリマー、マニ・A・ムンガイ、マルレーヌ・サルダナ  
照明技術: ファブリス・ルフ  
音響: オリビエ・ルヌフ  
ボカール・トレーニング: ダリラ・カティール  
振付助手: ティエリー・ミカフン  
舞台監督: マチュー・モレル  
衣装: マリオン・レニエ  
制作: サンドラ・ヌヴエ、マルティナ・ホクス、アメリカ・ヌヌ・シャブラン  
企画・制作: ミュゼ・ドゥ・ラ・ダンス、レヌエ・ブルターニュ国立振付センター  
助成: アンステイチュ・フランス  
共同製作: ルール・トリエンナール、ブルターニュ国立劇場、パリ市立劇場、フェスティバル・ドートンヌ・パリ、シュタイヤーマルクの秋のフェスティバル(グラーツ)、オランダ・フェスティバル、クンステンフェスティバルデザール(ブリュッセル)、クンストラハウス・ムンヘン、フランクフルト(本作はルール・トリエンナール2014のために製作された)  
助成(日本公演): 平成27年度文化庁劇場・音楽堂等活性化事業費、在日フランス大使館/アンステイチュ・フランスパリ本部  
主催: KYOTO EXPERIMENT、京都造形芸術大学舞台芸術研究センター  
Choreography: Boris Charmatz  
Interpreted by: Or Avishay, Matthieu Barbin, Nuno Bizarro, Ashley Chen, Olga Dukhovnaya, Alix Eynaudi, Peggy Grelat-Dupont, Christophe Ives, Maud Le Pladec, Filipe Lourenco, Mark Lorimer, Mani A. Mungai, Marlène Saldana  
Lighting: Yves Godin  
Light technician: Fabrice Le Fur  
Sound: Olivier Renouf  
Arrangements and vocal training: Dalila Khatir  
Choreographic assistant: Thierry Micoquin  
General stage manager: Mathieu Morel  
Dresser: Marion Regnier  
Production coordinator: Sandra Neuveut, Martina Hochmuth, Amélie-Anne Chapelain  
Produced by: Musée de la danse, Centre chorégraphique national de Rennes et de Bretagne (directed by Boris Charmatz)  
The association receives grants from the Ministry of Culture and Communication (Regional Direction of Cultural Affairs / Brittany), the City of Rennes, the Regional Council of Brittany and Ile-et-Vilaine General Council.  
www.museedeladanse.org  
With the support of the Institut français  
Co-produced by: Ruhrtriennale-International Festival of the Arts, Théâtre National de Bretagne-Rennes, Théâtre de la Ville and Festival d'Automne Paris, steirischer herbst Graz, Holland Festival Amsterdam, Kunstfestivalsdesarts (Brussels), Künstlerhaus Mousonturm Frankfurt am Main  
Created at the Ruhrtriennale – International Festival of the Arts 2014  
Japan tour made possible with the support of Ambassade de France/Institut français  
Supported by the Agency for Cultural Affairs, Government of Japan in the fiscal 2015  
Presented by: Kyoto Experiment, Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design



## 『喰う』のための振付家による創作ノート

ボリス・シャルマツ

ダンスが拒食症を生みだした。マラソン選手は走りながら食べる。囚人たちはハンガーストライキをする。食事のときのさまざまな習慣は失われつつある。子どもは踊りながら食べる。わたしは口いっぱいものをほおばりながら踊る。君は寝ながら食べる。彼女は立ったまま寝る。わたしたちは情報を消化する。彼は咀嚼しながら踊る。彼は踊りながら、歌いながら咀嚼する。わたしたちは口から動きをはじめ。唇から。くわえた指から。床のうえの食べ物にふれる足から。ダンスは腹のもの。ダンスは口の裏のもの。ダンスは歯のもの。ダンスは舌のもの。テーブルや椅子やテーブルクロスは取り払おう。動きながらの食事を想像してみよう。すべてを食べる。すべてから食べる。ずっと。わたしたちは動くオーケストラ、栄養は自動供給。思索的生態系。脈々とつづく食物連鎖は、早送りで腕から腕へと移動する。そして食物はついにはからだのなかに消える。残り物のなかにはいつでも置いておくべきものがある。舞台装置は見えなくなる。完全に姿を変えるまでめつくされてしまう。体液のコレオグラフィ。人間のコレオグラフィも、空間とからだを内側から通過する食物のコレオグラフィになる。完全な透過性。からだは食物にひらかれ、また食物を閉じこめる。大事なことはのどに埋めこまれる。あなたも息がたまって死にたくはないだろう。あなたは、読みもせずメッセージを呑みこむ。あなたは現実を呑みこむ。争いを消化する。彼らは、広い意味で食べているのだ。呑みこまれた現実。

……寝ながら食べる／立ったまま眠る／情報を消化する／口いっぱいそのまま踊る／噛みながら歌う／踊りながら噛む／思考しながら歌いながら呑みこみながら踊る／口から動きをはじめ／唇から／くわえた指から／床の食べ物にふれる足から／テーブル／椅子／テーブルクロスを取り払う／食事のときのいろいろな習慣を取り払う／動く夕食を想像する／無限に動く食事／ぜんぶ食べる／ぜんぶから食べる／ずっと／逃れていく長い

食物連鎖／舞台装置の消失／大事なものは喉に埋めこまれて見えなくなる／息がたまって死ぬことはしない／ハンガーストライキ／ストの対象になるからだ／メッセージを呑みこむ／現実を口からとりこむ／現実を呑みこみながら争いを消化する／呑みこまれた現実／踊りながら食べる子ども／栄養を自動供給する人間オーケストラ／他の人が動きにつけることができるように小さなお菓子を与える／口の裏のダンス／歯の／舌の／そしてなんといても終わりのない……

わたしたちは寝ながら食べる 立ったまま眠る 情報を消化する わたしたちは口いっぱいそのまま踊る わたしたちは噛みながら歌う 歩きながら噛む わたしたちは考えながら歌いながら呑みこみながら踊る わたしたちは動きをはじめ 口から 唇からくわえた指から 床の食べ物にふれる足から ダンスは口の裏のもの ダンスは歯のもの ダンスは舌のもの わたしたちはテーブルと椅子とテーブルクロスを取り払う わたしたちは食事のときのいろいろな習慣を取り払う わたしたちは一種の動きながらの食事を想像する わたしたちはすべてを食べる わたしたちはすべてから食べる ずっと 腕から腕へと連なる長い食物連鎖 食べ物ほからだのなかに消える 舞台装置は見えなくなる 人間のコレオグラフィも空間とからだを内側から通過する食物のコレオグラフィになる 大事なことは喉に埋めこまれる わたしたちは息がたまって死にたくはない わたしたちはハンガーストライキをする わたしたちのからだはストの対象になる わたしたちはメッセージを呑みこむ わたしたちは現実を呑みこむ わたしたちは争いを消化する 子どもが踊りながら食べる

## Choreographer's Notes for *manger*

Boris Charmatz

Dancing is the mother of anorexia. Marathon runners eat on the run. Prisoners go on hunger strikes. The dinner ritual is disappearing. Children eat while dancing around. You eat lying down. She sleeps on her feet. We digest information. He dances while chewing. He chews while dancing while singing. We launch movement with our mouths. With our lips. With fingers that we suck. With feet that touch food on the ground. Dance is in the stomach. Dance is in the palate. Dance is in the teeth. Dance is in the tongue. We take away the table and chairs and the tablecloth. We envision a sort of meal in motion, we eat everything, we eat anything, all the time. We are an orchestra in motion, self-fueled. A speculative ecosystem. The long food chain is fast-forwarded from hand to hand, and food finally disappears inside the bodies. There is always something to be saved from the leftovers. The décor becomes invisible: it has been licked into a total transformation. A choreography of juices. The choreography of people also becomes a choreography of food that traverses the inside of space and bodies. Total permeability. The body opens up to the food that it encloses. The essence is jammed down the throat. You don't want to die stuffed. You swallow the message without having read it. You swallow reality. You digest conflicts. They eat in the broadest sense. Reality devoured.

... Eating lying down / Sleeping standing up / Digesting information / Dancing with your mouth full / Singing while chewing / Chewing while dancing / Dancing while thinking while singing while swallowing / Launching movement with your mouth / Your lips / Your fingers that you suck / Your feet that touch the food on the ground / Taking away the table / The chairs / The tablecloth / Dispensing with the dinner ritual / Imagining a dinner in motion / An endless meal in motion / Eating everything / Eating anything / All the time / Long food chain slipping away / Disappearance of the décor / The invisibility of the essence jammed down the throat / Not to die stuffed / Hunger strike / Body-object-of-strike / Swallow the message / Ingest reality / Digest conflicts by swallowing reality / Reality devoured / Child eating dancing / Self-fueled human orchestra / Giving a treat to another so that she keeps moving

/ Dance in the palate / In the teeth / In the tongue / and above all with no end...

we eat lying down we sleep on our feet we digest information we dance with our mouths full we sing while chewing we chew while walking we dance while thinking while singing while swallowing we launch movement with our mouths our lips our fingers that we suck our feet that touch the food on the ground dance is in the palate dance is in the teeth dance is in the tongue we take away the table and the chairs and the tablecloth we dispense with the ritual of the meal we imagine a sort of meal in motion we eat everything we eat anything all the time long food chain passed from hand to hand food disappears in the bodies the décor becomes invisible the choreography of people also becomes a choreography of food that traverses the inside of space then of the body the essence is packed down the throat we don't want to die stuffed we go on a hunger strike our body becomes the strike of hunger our body becomes an object of strike we swallow the message we swallow reality we digest conflicts a child eats while dancing

## 河童よ、ふたたび

In search of Kappa

1 3/5 (Sat) - 3/27 (Sun) 10:00-20:00

※会期中無休  
※時間は京都芸術センターギャラリーのオープン時間です  
※会期中には「up objects」など様々なことが行われます(詳細は公式ウェブサイトにてお知らせします)

Open every day during festival.  
Opening hours are the same as Kyoto Art Center.  
During the installation period there are numerous events, including "up objects" (see below).  
Visit the festival website for more information.

### 京都のインフラを握る疏水の地、岡崎が実験場に。 デザインと建築の視点からいまの社会を新たに問いなおす

これまで、舞台芸術と隣接するアートジャンルの作品を紹介してきた KYOTO EXPERIMENT。今回はさらに一歩踏みこんで、デザイン、建築の視点から京都の街を再編集して提示するプロジェクトが立ち上がる。中心となるのは、グラフィックデザインから空間デザイン、展覧会や福祉、地域に関わるプロジェクトなど領域を越えて活動を展開、KYOTO EXPERIMENT のアートディレクションも担当しているUMA/design farm。そして、建築設計から現場施工まで手がけ、「建築」を通したプロジェクトで街や社会に新たな視点を投げかけてきた建築ユニットの dot architects。

彼らが目をつけたのは街のインフラ。経済基盤や生活基盤を工学的に布置することによってできあがるインフラは、社会における透明な存在として日々の生活や環境を強く管理している。しかし、それによって失われたものはないのだろうか。疏水によって発展した岡崎地区に、もし「河童」がいるとしたら…。そんな岡崎に位置するロームシアター京都の中庭、ローム・スクエアをオープンな実験場として、現代における失われたものとしての「河童」を新たに見出そうという企みがスタートする。ローム・スクエアでは、街で見出したインフラ的オブジェを設置して、その使い方の新たな実践や変換が、ワークショップなどを通して行われる。また、京都芸術センターでは、リサーチにもとづく映像やアイデアノートなどを展示する。

KYOTO EXPERIMENT が、先鋭的な舞台作品を上演するだけでなく劇場や舞台芸術を介したコミュニケーションのハブとなるために、このリサーチプロジェクトは大きな道標となるだろう。

### Designers and architects transform the Okazaki canal area into a test site for investigating infrastructure

Kyoto Experiment has continued to explore the intersections between performance and other fields. Taking this a step farther, this new project presents a "recut" of Kyoto from the perspective of design and architecture. Leading the project is UMA/design farm, a studio whose wide-ranging portfolio includes graphic design, spatial design, exhibitions, welfare, and regional projects, and who also handles art direction for Kyoto Experiment. Partnering with UMA/design farm is dot architects, a team working to present fresh perspectives on social through architecture projects, from planning to construction.

Together they will examine the theme of urban infrastructure. While on the one hand infrastructure is the organization of economic and lifestyle bases through engineering, it is also an invisible presence in society controlling our daily lives and environments. What has been lost through this? This project will open a "test site" in the ROHM Theatre Kyoto courtyard, ROHM Square, in an attempt to recover what has been lost in modern times due to the advance of infrastructure. A symbol of this is the kappa, a supernatural creature from Japanese folklore said to live in rivers. The courtyard space will host infrastructure-inspired sculptures, along with experiments in finding new ways to use infrastructure as well as workshops. Videos and design notes will be exhibited at Kyoto Art Center.

ロームシアター京都 ローム・スクエア、  
京都芸術センター ギャラリー  
北・南  
ROHM Square, ROHM Theatre  
Kyoto  
North and South Gallery, Kyoto  
Art Center

## up objects

ローム・スクエアに設置したインフラを模したオブジェは、会期中にスケーターや職人、ダンサーらが関わることによって、解体・変換・アップデートされていきます。

日時: 3/12 (Sat), 3/19 (Sat)  
場所: ロームシアター京都 ローム・スクエア

## up objects

The infrastructure sculptures installed at ROHM Square will be dismantled, reformed and updated by skaters, artisans and dancers during the installation period.

Dates: 3/12 (Sat), 3/19 (Sat)  
Venue: ROHM Square, ROHM Theatre  
Kyoto

コンセプト・製作・展示: UMA/design farm  
+ dot architects  
映像: 松村康平  
プロジェクトマネージャー: 上村絵梨子  
主催: KYOTO EXPERIMENT

Concept/produce/exhibition: UMA/design farm  
+ dot architects  
Film: Kohei Matsumura  
Project manager: Eriko Kamimura  
Presented by: Kyoto Experiment

## 河童よ、ふたたび

researchlight プロジェクトメンバー

私たちの暮らしは、いつも見えているが見ていないインフラのネットワークによって支えられてきた。ここでいうインフラとは、都市計画による街区の配置や土木、道路や鉄道などの交通流通網、通信網、それに付随する諸々の設備の付置による「公」の整備と、自治体単位での小さな設備の付置による「共」の整備の双方を含むものとして捉えている。

今回のリサーチ対象である岡崎地区は京都の東の端に位置している。そこは政治や経済など、時勢が反映される最前線であり、平安時代後期の都市計画に始まり、後の戦乱や動乱による伸縮（農地と市街地の反転の繰り返し）と上書きの歴史の上に成り立っている。そこに存在し続けているインフラは、時に計画的に、時に場当たりの様相を呈しながら今も目の前に生き続ける歴史の語り部のようなものである。

近代の幕開け当りまでのインフラは、粗野で開かれた存在として人々の生活の近くにあり、遊びや仕事と密接に結びつきながら、さまざまな関わりしろを持っていた。その関わりしろの多さは人の集散に伴う情報交換や噂話、想像力を生み出す磁場となっており、「河童」や「鵜」など、太古より何者か分からないものを生み出し、豊かな心を育ててきた。しかし現在に至るまでの経済性、効率性、合理性をもたらすテクノロジーの発達と共に洗練されたインフラは、そのアクセスの容易さ故に私たちの想像力を削ぎ落とし、見えているが見ていないものになってしまう。その見ていないものに対して新たな想像力を身につけることは、私たちのまちをもっと楽しく奥行きのあるものにするのではないだろうか。

researchlight は、従来とは別の思考と技術によって、現代における私たちの暮らしと直結しているインフラの関わりしろへアプローチするプロジェクトである。用途が様々に解釈可能なオブジェを設置し、そこに人々が集うことによって生まれる新しい磁場を生み出すことと同時に、そこに至るまでのプロセスと実験を提示する。

## In search of Kappa

researchlight project members

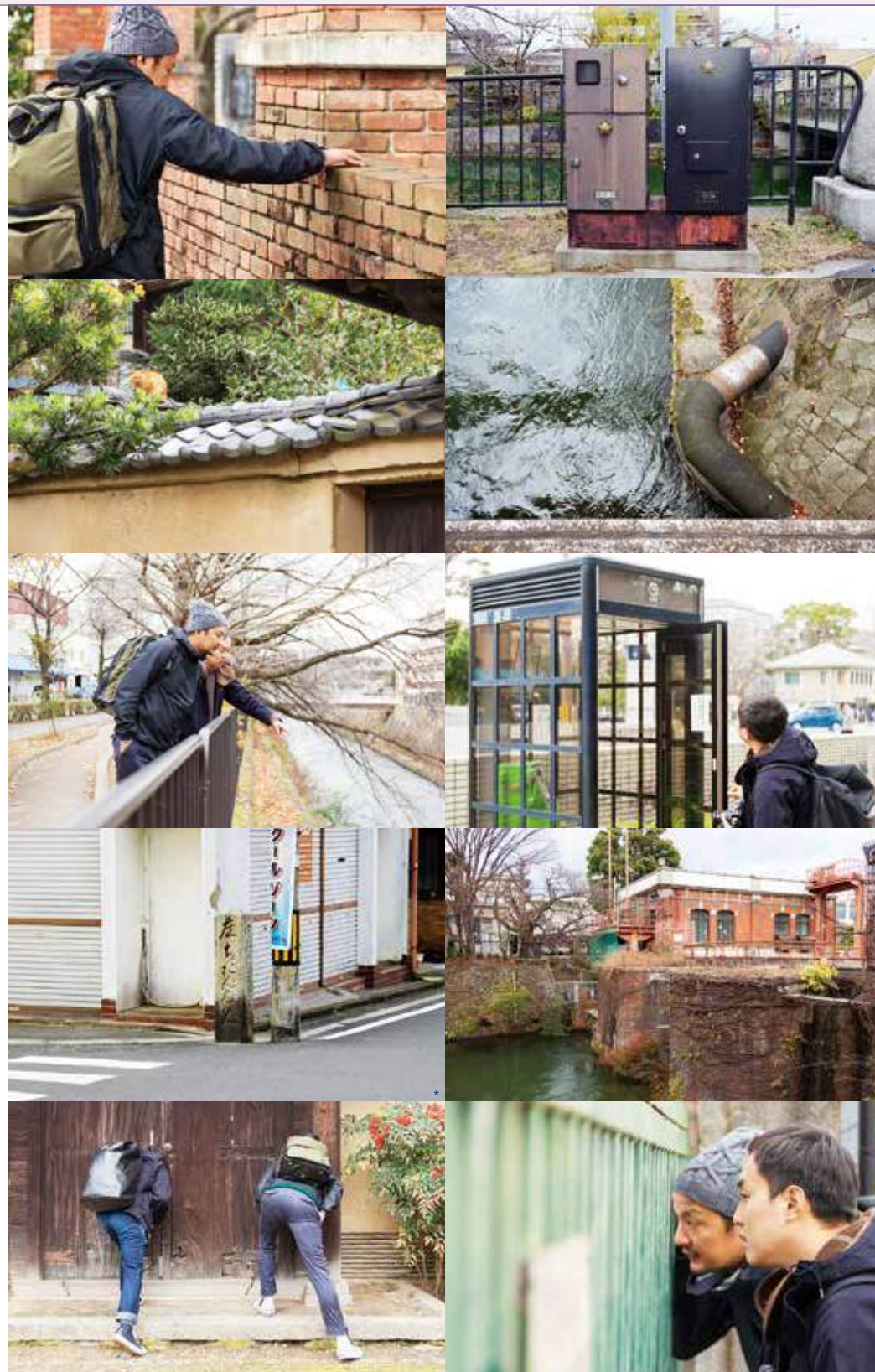
Our lives are always supported by a network of infrastructure that is seen yet unseen. This “infrastructure” can be interpreted as both the “public” improvements produced by the layouts of urban planning, the transport distribution network of railroads, roads and civil engineering, communications network, and the various facilities attached to these, and the “public” improvements produced by smaller facilities at the local government level.

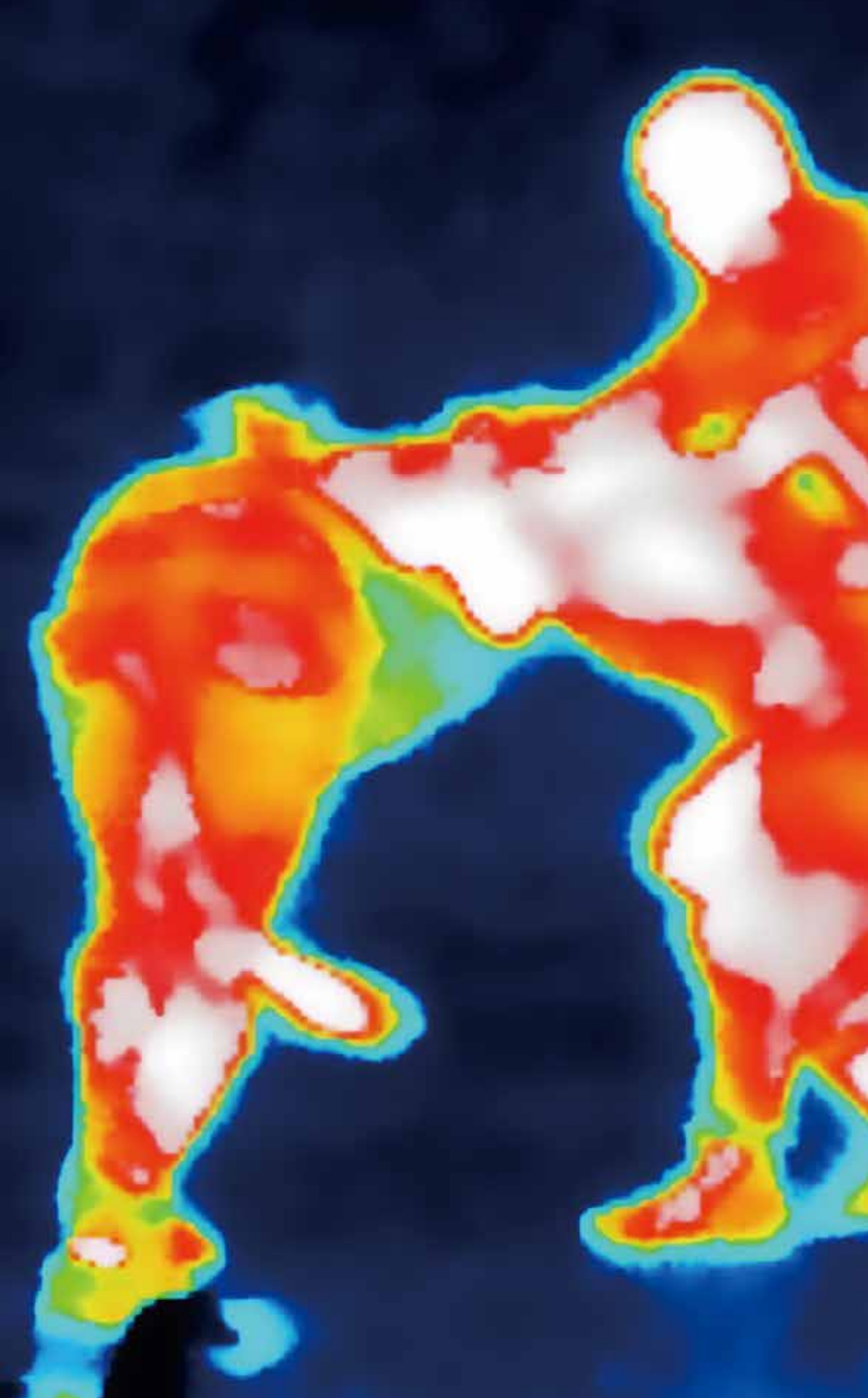
The subject of research for this project is the Okazaki district, which is located in the far east of Kyoto. The area has been a frontline reflecting the times, from politics to economics; a place started by city planning in the late Heian Period, formed over the top of history such as the expansion and contraction (a continuing cycle of switching between agricultural land and urban land) caused by later wars and upheavals. The infrastructure that has continued to exist there is like a storyteller of the living history before our eyes, showing us aspects at times systematically, at times arbitrarily.

The infrastructure from the start of modernity to the present exists close to our lifestyles as something rough and open, intimately connected to work and play and possessing overlapping relations. That overlap of connections becomes a magnetic field producing the exchange of information associated with the concentration of people, as well as gossip and imagination. It engenders many figures not understood since ancient times, such as “kappa” and “nue,” and cultivates a rich mindset. However, along with the development of technology that has brought economy, efficiency and rationality until the present, our refined infrastructure has stripped away our imagination due to the ease of access it provides, becoming something seen but unseen. Acquiring the imagination toward these things we do not see is surely what can make our community more fun and complex.

Researchlight is a project approaching the overlap of infrastructure directly connected to our lives in the present through ideas and technology different to the norm. Creating a new magnetic field born out of the people who gather there and arranging objects with all manner of possible usage interpretations, the installation also presents the processes and experiments that led up to its final development.

photo: Takuya Matsumi (except\*)





## ショーケース「Forecast」/ Showcase: Forecast

ショーケース「Forecast」では、外部から招いた専門家によるキュレーションで、日本の新進アーティストの作品をショーケース形式で連続上演します。今回は、劇作家・演出家・アトリエ劇研ディレクターのあごうさとし、丸亀市猪熊弦一郎現代美術館学芸員の国枝かつらのキュレーションにより、公式プログラムとは異なる視点で同時代の舞台表現を紹介します。

### 3/20 (Sun)

13:00- あごうさとしプログラム  
/ Satoshi Ago Program

16:00- 国枝かつらプログラム  
/ Katsura Kunieda Program

### 3/21 (Mon)

13:00- 国枝かつらプログラム\*  
/ Katsura Kunieda Program\*

15:30- あごうさとしプログラム  
/ Satoshi Ago Program

\*上演後に2人のキュレーターによるトークあり /

\* Includes talk with curators after performances.

### 京都芸術センター

[あごうさとしプログラム] 講堂  
[国枝かつらプログラム] フリースペース  
Kyoto Art Center  
[Satoshi Ago Program] Auditorium  
[Katsura Kunieda Program] Multi-purpose Hall

### [各プログラム / per program]

一般 / Adults ¥2,500  
ユース(25歳以下)・学生 / Youth (Up to 25), Students  
¥2,000

シニア(65歳以上) / Senior (65 & Up) ¥2,000  
高校生以下 ¥1,000

※当日券は前売券+500円(高校生以下は同額)  
Tickets on the day are an additional ¥500 (but not for High School Students & Younger tickets)

### [セット券 / Tickets Sets]

¥4,000  
「あごうさとしプログラム」と「国枝かつらプログラム」の両方をお得に観劇できるセット券。本人のみ有効。前売のみ。

This set allows entry to both the Satoshi Ago and Katsura Kunieda programs in Showcase: Forecast. Valid only for the ticket-holder. Advance only

チケット取扱= KYOTO EXPERIMENT チケットセンター、京都芸術センター(セット券を除く)

Tickets: Kyoto Experiment Ticket Center, Kyoto Art Center (except Tickets Sets)

チケット情報 / Ticket Information → p.74

Forecast is a showcase of work by emerging Japanese artists, curated by guest specialists. One program is directed by playwright, director, and Atelier Gekken director Satoshi Ago, and another by Katsura Kunieda, a curator at Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Contemporary Art. The showcase offers an alternate perspective on contemporary performing arts to the main Kyoto Experiment program.

### キュレータープロフィール / Curator Profiles

#### あごうさとし

劇作家・演出家・俳優・アトリエ劇研ディレクター。1976年生まれ。「複製技術の演劇」を主題にデジタルデバイスや特殊メイクを使用した演劇作品を制作する。2014-2015年文化庁新進芸術家海外研修制度研修員として3ヶ月に滞在。代表作に『total eclipse』(2011、横浜美術館・国立国際美術館)、『複製技術の演劇—パサージュIII—』(2013-2014、こまばアゴラ劇場・enoco・アトリエ劇研)等がある。2010年度京都市芸術文化特別制度奨励者。2013-2014年公益財団セゾン文化財団ジュニア・フェロー。神戸芸術工科大学非常勤講師。

#### Satoshi Ago

Born in 1976. Satoshi Ago is an artistic director at theatre "atelier Gekken." Ago's "theater of mechanical reproduction" utilizes digital devices and special makeup. He studied in Paris for three months in 2014-15 on the Agency for Cultural Affairs' Program of Overseas Study for Upcoming Artists. His major work includes *total eclipse* (Yokohama Museum of Art, National Museum of Art, Osaka, 2011) and *Theater of Mechanical Reproduction: Passage III* (Komaba Agora Theater, enoco, Atelier Gekken, 2013-14). He was a 2010 Kyoto City Arts and Culture Special Promoter. He is a 2013-14 junior fellow of the Saison Foundation.

#### 国枝かつら

1978年東京都生まれ。丸亀市猪熊弦一郎現代美術館学芸員。担当企画展に現在準備中の「金氏徹平展(仮称)」(2016開催予定)、「マルティン・ガンパー 100日で100脚の椅子」(2015)、「あそびのつくりかた」(2014)など。パフォーマンスを紹介するシリーズ〈PLAY〉を担当、「PLAY vol.01-03 塚原悠也(From contact Gonzo)」(2014-2016)を企画。

#### Katsura Kunieda

Born in Tokyo in 1978, Katsura Kunieda is a curator at Marugame Genichiro-Inokuma Museum of Contemporary Art. Some of the exhibitions Kunieda has helped planned include a new Teppei Kaneuji exhibition, set to open in 2016, "Martino Gamper: 100 Chairs in 100 Days" (2015), and "Playmaking" (2014). Kunieda is also responsible for the "Play" performance showcase series. The first featured the work of Yuya Tsukahara.

## あごうさとしプログラム Satoshi Ago Program

### Theatre in motion

地震を経て政治の季節に入り、時代の動きが速度を帯びている。人が饒舌になるこのような時節のなかで、芸術が自由な表現を体現し続ける為には、アーティストは何を描くのかという事と同時に、いかに描くのかという形式が一層重要であり、形式が存在に直結すると思う。作品制作上の複雑な手続きや、抽象性、それらを念頭に改めて着目したいのは、あらゆる表現の根底にある、身体のあるようだ。

展開される「身体」は劇場でどのように存在しうるのであるのか。3つのカテゴリーが考えられる。1. 身体それぞれで立つ 2. 身体と物・映像などのメディアとの併存 3. 身体不在。辻本佳さんによる、柔道を基礎とした完成された肉体と動き、岩淵貞太さんによる、身体構造にオルタナティブな解釈をのせて発動する動き、あごうによる出演者不在の空間における動き。劇場で思考される3組の異なる視点は、さらに、八木良太さん、山城大督さんという現代美術作家の視点が加わり、身体グラデーションが明確に表現されるだろう。これは偶然だが、参加アーティストの年齢が30~39才という30代のグラデーションでもある。

安易な言葉や、ワンクリックで自己を規定してしまいうような時代において、抽象性を孕んだ身体表現を介して私たちのありようを見つめる機会になればと思っている。

あごうさとし

Satoshi Ago

### 岩淵貞太×八木良太『RECORDS』 Teita Iwabuchi + Lyota Yagi, RECORDS

「記録物」があつかう時間と、人間の「身体」が持つ時間、そのコミュニケーションの可能性について。ダンサー・振付家の岩淵貞太と、多岐にわたる表現手法で作品を発表している美術家・八木良太による二度目の共同作業。

This is the second collaboration between dancer and choreographer Teita Iwabuchi and multimedia artist Lyota Yagi, exploring the possibilities of communication between time dealing with recorded material and time possessed by the human body.



photo: Gosuke Sugiyama/Gottingham

### 辻本佳『Field Pray #2 擬態と遊行』 Kei Tsujimoto, Field Pray #2 Mimicry and Retracing

ダンサー・振付家の辻本佳が、幼いころから続けていた柔道の身体性を基礎に、自身の育った環境を自伝的要素として作品に組み込みながら、既存のダンスや武道の身体操法をサンプリングし、展開させる。

Based on the physicality of judo, which dancer and choreographer Kei Tsujimoto has been doing since his youth, this performance incorporates autobiographic elements such as the environment in which Tsujimoto grew up, as well as sampling and developing the physical techniques of dance and Japanese martial arts.



photo: kimsajik

### Theatre in Motion

Following the 2011 earthquake, we have entered a political season, an accelerating era. As people grow more garrulous, in order for the arts to continue to embody free expression, the question of what an artist creates becomes more important, simultaneously with the format he or she uses, with format becoming directly linked to existence. With abstraction and the complex processes involved in making a work in mind, what I want to focus anew on is the makeup of the body, which lies at the base of all manner of expression.

In a theater, what kind of body is possible? There are perhaps three types: firstly, the body that stands there alone; secondly, the body that coexists with other media such as objects or video; and thirdly, the absent body. From Kei Tsujimoto's consummated physicality and movement founded on judo, to Teita Iwabuchi's actualizations of alternative interpretations with physical structures, and my own movement in a space absent of performers, these three different sets of perspectives considered in the theater are also complemented by the perspectives of contemporary visual artists Lyota Yagi and Daisuke Yamashiro, explicitly expressing gradations of the body. And while only a coincidence, the artists are also all aged between 30 and 39, and thus offering a gradation of their thirties.

In this age of easy words, when we can prescribe the self with a single click, I hope this program will be an opportunity for discovering who we are through the medium of physical expression rife with abstraction.

Satoshi Ago

### あごうさとし『—純粹言語を巡る物語—バベルの塔II』 Satoshi Ago, Stories on Pure Language: The Tower of Babel II

舞台上に俳優が出てこなくても、演劇は成立するのか?そもそも、俳優とはなにか?ベンヤミンの思考を下敷きに、コンセプト・演出のあごうさとしと映像の山城大督が、俳優の演技を解体/再構成した「無人」の上演の可能性を探る。

Can it be called theater when there are no actors on stage? But what is an actor? Devised and directed by Satoshi Ago from the ideas of Walter Benjamin, Ago teams up with video artist Daisuke Yamashiro to explore the possibilities of a performer-less performance, deconstructing and reconfiguring the performance of the actor.





近年、多くの近現代美術館でパフォーマンスの展覧会やイベントが開催され、コレクションとしても収蔵していく取り組みが模索されています。そのような状況を背景に、パフォーマンスが行われる場所性とそこで生じる役割に意識的であり、時に了解される規範へのカウンターとして、より広い視野からパフォーマンスを思考し実践する3名のアーティストを紹介します。作品は、これまでに上演された形式に今回あらたに手を加えて再演するもので、そのどれもが人のからだと声というシンプルな要素で構成されています。小杉武久『Anima 2』(1962)の再考を通じてパフォーマンスにおける肉体と声を考察する小金沢健人の『CLOSED ANIMA』(2001)、指示書にもとづく即興という行為から、身体に原初的に備わったある種の機能を導き出そうとする田村友一郎の『D.H.L.』(2013)、動きと声が幾重にも呼応しながら、指揮者のような中心点を持たない合唱の形態を出現させることでオルタナティブな方法論を提示する梅田哲也の『COMPOSITE』(2014)。いずれの作品でも、最低限のインストラクションをもとに即興で進行していく次第は、パフォーマンスが身体の芸術であると同時に、時間を扱う芸術でもあることをあらためて想起させます。またそれは、美術、演劇、ダンス、音楽といったジャンルに拠るものでも、美術館や劇場といった場所に帰属するものでもなく、「ライブ/生であること」という一度きりの行為への思考と実践でもあるのです。

国枝かつら

Katsura Kunieda

**小金沢健人『CLOSED ANIMA』(2001)**  
Takehito Koganezawa, *CLOSED ANIMA*, 2001

「過去のパフォーマンスを現在の視点からもう一度取り上げる」というコンセプトのイベントで2001年に上演された作品の再演。1962年の小杉武久『ANIMA 2』をあつかつてパフォーマンスにおける声と肉体を考察する。

This is a recreation of a work first presented in 2001 at an event themed around reinterpreting past performances from the perspective of the present. It plays with Takehisa Kosugi's *ANIMA 2* (1962) to examine the nature of body and voice in performance.



photo: Katsuhiko Saiki

**田村友一郎『D.H.L.』(2013)**  
Yuichiro Tamura, *D.H.L.*, 2013

「D.H.L.」は田村の指示書の内容を示すアナグラムであり、パフォーマーは舞台の上で初めてその内容を知る。即興という行為から、身体に原初的に備わるある種の機能を導き出そうとするとともに、ダンスと声の在り方をも浮き彫りにする。

"D.H.L." is an anagram for the content of Yuichiro Tamura's book of instructions, which will be revealed for the first time during the performance. Using improvisation to elicit a certain function with which the body is primordially endowed, the performance explores dance and voice.



© Yuichiro Tamura

**梅田哲也『COMPOSITE』(2014)**  
Tetsuya Umeda, *COMPOSITE*, 2014

フィリピン山岳地帯にあるカヤン村の子どもたちと制作した作品を再構築する。動きと声の掛け合わせで進行する合唱のかたちは、指揮者のような中心点を持たないパフォーマンスの方法論を提示する。

This work reconstructs something first created by children from the mountain village of Kayan in the Philippines. It features a choir that operates by pairing movement and voice, presenting a performance methodology where a center like a conductor is absent.



photo: Yukie Mitomi

Recently we have seen many exhibitions and events at modern and contemporary art museums themed around performance, and venues are searching for how performance works can be added to museum collections. Against this background, I showcase three artists who are putting ideas about performance into practice from wide-ranging viewpoints; whose work is site-specific and aware of the role that comes about from its site-specificity, and at times runs counter to commonly understood standards. The three works are recreations and reconfigurations of previously performed pieces, though all are made up of the simple elements of the human voice and body. Takehito Koganezawa's *CLOSED ANIMA* (2001) examines the human body and voice in performance through a reconsideration of Takehisa Kosugi's *ANIMA 2* (1962). Yuichiro Tamura's *D.H.L.* (2013) attempts to elicit a kind of function our bodies are primordially equipped with using the act of improvisation based on a book of instructions. Tetsuya Umeda's *COMPOSITE* (2014) presents an alternative theory of methodology through a choir that responds again and again to movement and voice, and has no central figure like a conductor. All of the works develop through improvisation based on the most minimal of inspiration, as such freshly evoking how performance is simultaneously the art of the body and also art that deals with time. They also constitute ideas and practice of the one-time act of being live, neither dependent on the categories of visual art, theater, dance, or music, nor belonging to places like art museums or theaters.

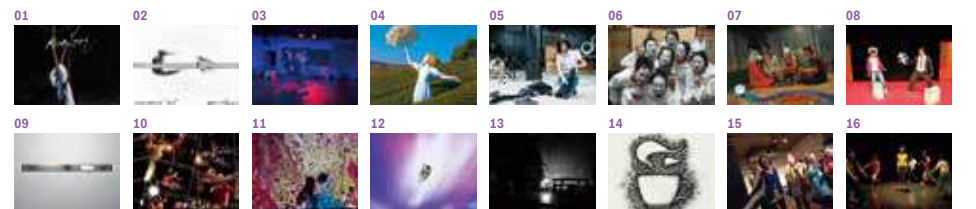
京都に、めくるめく春がやってくる。

「オープンエントリー作品」では、フェスティバル開催期間中に京都府内で発表される作品を一挙にご紹介いたします。ジャンル不問の公募によって集ったのは、その数なんと、45作品！アーティストの拠点、作品のジャンル、会場が、かつてない広がりとなりました。

詳細→www.kyoto-ex.jp/2016/fringe

The Open Entry Performance program presents a range of other events happening in Kyoto Prefecture during Kyoto Experiment 2016 Spring. This year the program brings together 45 entries regardless of genre, demonstrating how much the city's artist bases, performance styles, and venues have grown. Together with the Official Program and other events in the festival, these performances offer a spring in Kyoto rich in arts and culture.

- |  |   |   |
|--|---|---|
| <p><b>01</b><br/>Installation<br/>門阪翔大・杉本憲相・上田純・三枝愛・寺嶋剣吾・今尾拓真・藤村祥馬<br/>Shota Kadosaka / Kensuke Sugimoto / Jun Ueda / Ai Mieda / Kengo Terashima / Takuma Imao / Shoma Fujimura<br/>『MORPH』<br/>□ 2/27 (Sat) - 3/5 (Sat)<br/>12:00 - 19:00<br/>● 元・立誠小学校<br/>Former Rissei Elementary School</p> <p><b>02</b><br/>Installation<br/>林葵衣 Aoi Hayashi<br/>『水の発音』 <i>phonation of water</i><br/>□ 3/1 (Tue) - 3/6 (Sun)<br/>12:00 - 19:00 (最終日は18:00まで)<br/>● アートスペース虹<br/>ART SPACE NIJI</p> <p><b>03</b><br/>Theater<br/>サファリ・P safari・P<br/>『欲望という名の電車(作: テネシー・ウィリアムズ)』<br/><i>A Streetcar Named Desire</i><br/>□ 3/4 (Fri) 19:30 -<br/>3/5 (Sat) 15:00 -<br/>3/6 (Sun) 15:00 -<br/>3/7 (Mon) 15:00 -<br/>● アトリエ劇研<br/>atelier GEKKEN</p> <p><b>04</b><br/>Party event<br/>Apotheke<br/>『OPEN VILLAGE』<br/>□ 3/5 (Sat) 13:00 -<br/>● 旧田山小学校</p> | <p>Former Tayama Elementary School</p> <p><b>05</b><br/>Performance + Sound<br/>NPO 法人ダンスボックス NPO DANCE BOX<br/>『ぼくぼこアワー 京都編』<br/><i>"pokopoko hour" Kyoto ver.</i><br/>□ 3/5 (Sat) 18:00 -<br/>● Division</p> <p><b>06</b><br/>Dance<br/>高砂 BUTOH 協同組合 TAKASAGO BUTOH COOPERATION<br/>『高砂 BUTOH 協同組合 15 周年記念祝祭』 <i>TAKASAGO BUTOH COOPERATION 15 YEAR'S ANNIVERSARY CARNIVAL</i><br/>□ 3/5 (Sat) 18:30 -<br/>● UrBANGUILD</p> <p><b>07</b><br/>Theater<br/>H-TOA<br/>『ワンさんの一生とその一部』<br/><i>Wang's life and a part of Wang</i><br/>□ 3/5 (Sat) 11:00 - 15:00 - 19:00 -<br/>3/6 (Sun) 10:00 - 14:00 - 17:00 -<br/>● 多次元ギャラリーキョロキョロ (学舎内)<br/>kyorokyoro in Gakushinnsha</p> <p><b>08</b><br/>Theater<br/>夕暮れ社 弱男ユニットの伊勢村圭太アワー <i>yuguresya yowaotoko unit's Isemura Keita Hour</i><br/>『ジャパニーズ・サラリーマン』<br/><i>Japanese Salaryman</i><br/>□ 3/5 (Sat) 19:00 -</p> | <p>3/6 (Sun) 13:00 - 17:00 -<br/>● 元・立誠小学校 音楽室<br/>Former Rissei Elementary School</p> <p><b>09</b><br/>Talk event + Installation<br/>伊藤豊 / 松浦莞二 Yutaka Ito / Kanji Matsuura<br/>『anima / body』<br/>□ 3/6 (Sun) 16:00 -<br/>● 元・立誠小学校 TRAVELING COFFEE<br/>Former Rissei Elementary School TRAVELING COFFEE</p> <p><b>10</b><br/>Dance<br/>八咲舞遊館 YAZAKIBUYUUKAN<br/>『八舞咲の会 ~第二章~』<br/><i>HACHIBUZAKINOKAI -dai2syo-</i><br/>□ 3/6 (Sun) 14:00 - 18:00 -<br/>● KAICA</p> <p><b>11</b><br/>Dance<br/>ミズモノ Mizumono<br/>『無題』 <i>Untitled</i><br/>□ 3/8 (Tue) 19:30 -<br/>● UrBANGUILD</p> <p><b>12</b><br/>Installation<br/>端地美鈴、小濱史雄、八田郁子、福田真知、東郷幸夫、夏池風冴、岡本光博、渡辺英司、大村大悟、平田剛志、前田菜月他<br/>Misuzu Hashiji, Fumio Kohama, Ikuko Hatta, Masakazu Fukuta, Yukio Togo, Kazayu Natsuike, Mitsuhiro Okamoto, Eiji Watanabe, Daigo Ohmura, Takeshi Hirano, Natsuki Maeda<br/>『timelake06「茶の間/庭先」』<br/><i>timelake06 "chanoma/niwasaki"</i></p> |
|--|---|---|



3/8(Tue)–21(Mon) 13:00–18:00  
 ◆ギャラリーいのくま亭 京都  
 Gallery Inokumatei Kyoto  
 3/8(Tue)–20(Sun) 12:00–19:00  
 [最終日は17:00まで]  
 ◆Gallery ARTISLONG  
 ※3/14は休廊 / closed 3/14

13  
 Installation + Dance  
 サイトウミサ / 竹之内芙美  
 Misa Saito / Fumi Takenouchi  
 『S=1/1』  
 3/10(Thu) 20:00–  
 ◆UrBANGUILD

14  
 Theater  
 劇団速度 theatre SOKUDO  
 『珈琲店』 Le Café  
 3/10(Thu)–13(Sun) 20:00–  
 ◆喫茶フィガロ  
 Café figaro

15  
 Theater  
 トランク企画 trunkkikaku  
 『Monthly Impro Live of Spring』  
 3/11(Fri) 19:30–  
 ◆UrBANGUILD

16  
 Dance  
 ウミ下着 Umishitag  
 『いつか みんな なかったことに』  
 WASH IT ALL AWAY  
 3/11(Fri) 19:30–  
 3/12(Sat) 14:00–, 19:00–  
 3/13(Sun) 12:30–, 17:00–  
 ◆KAICA

17  
 Theater  
 エイチエムピー・シアターカンパニー  
 HMP Theater Company  
 『静止する身体』  
 Bodies without the times  
 3/11(Fri) 19:45–  
 3/12(Sat) 14:00–, 17:00–  
 3/13(Sun) 11:00–, 15:00–,  
 18:30–  
 ◆アトリエ劇研  
 atelier GEKKEN

18  
 Theater  
 ユリイカ百貨店 yuriika hyakkaten  
 『MOON』  
 3/11(Fri) 14:00–, 19:00–

3/12(Sat) 11:00–, 19:00–  
 3/13(Sun) 11:00–, 15:00–  
 ◆元・立誠小学校 音楽室  
 Former Rissei Elementary School

19  
 Dance  
 戸田はる香 Haruka Toda  
 『In to the space and the time』  
 3/12(Sat) 19:00–  
 ◆HOTEL ANTEROOM KYOTO

20  
 Dance + Performance  
 酒井エル L.Sakai  
 『スプリーン』 spli:n  
 3/13(Sun) 13:00–  
 ◆UrBANGUILD

21  
 Kimono + Dance  
 櫻本多賀 × 吉野美亜  
 Taka Enomoto × Mia Tomano  
 『着物×ダンス「もののはれ」』  
 Kimono×Dance Mono no Aware  
 3/14(Mon) 13:00–, 15:30–  
 ※雨天決行  
 ◆京都国立博物館 庭園  
 Garden, Kyoto National Museum

22  
 Theater + Dance + Music  
 BRDG  
 『BRDG 5th Anniversary 特別感謝祭』  
 BRDG 5th Anniversary Thanks-giving Day  
 3/16(Wed) 19:30–  
 ◆UrBANGUILD

23  
 Dance theater  
 川柳舎みみひめぎっちゃん  
 SENRYUSHA MIMIHIME KITCHEN  
 『川柳舎みみひめぎっちゃん30年の軌跡  
 ～ニューヨーク凱旋公演』 The tra-  
 jectory of senryu building Mimi-  
 hime kitchen '30 -New York Tri-  
 umph performance  
 3/16(Wed) 19:30–  
 ◆UrBANGUILD

24  
 Theater  
 南鳥島ロランC局 Theater Marcus  
 Island Loran-C transmitter  
 『鉱石』 Ore  
 3/18(Fri) 19:30–  
 3/19(Sat) 14:00–  
 3/20(Sun) 14:00–

◆アトリエ劇研  
 atelier GEKKEN

25  
 Dance + Theater  
 富士山アネット Fujiyama Annette  
 『DANCE HOLE』  
 3/18(Fri) 21:00–  
 3/19(Sat) 12:30–, 14:00–, 15:30–,  
 17:00–, 20:30–, 22:00–  
 3/20(Sun) 12:00–, 14:00–, 15:30–,  
 17:00–  
 3/21(Mon) 11:00–, 12:30–, 14:00–  
 ◆ARTZONE

26  
 Installation + Performance  
 カルテジアン劇場 Cartesian Theater  
 『Heimat』  
 3/18(Fri)–21(Mon)  
 [展示 | Exhibition] 11:00–20:00  
 [上演 | Performance] 14:00–  
 14:30, 16:00–16:30, 18:00–  
 18:30, 19:30–20:00  
 ※3/18(Fri)のみ14:00の回休演  
 3/22(Tue)  
 [展示 | Exhibition] 14:00–20:00  
 [上演 | Performance] 16:00–  
 16:30, 18:00–18:30, 19:30–20:00  
 3/23(Wed)  
 [展示 | Exhibition] 10:00–15:00  
 [上演 | Performance] 11:00–  
 11:30, 13:00–13:30, 14:30–15:00  
 ◆元・立誠小学校 木工室  
 Former Rissei Elementary School

27  
 Art performance  
 宮北裕美 Hiromi Miyakita  
 『point A ⇄ point B』  
 3/18(Fri)–20(Sun), 3/25(Fri)–27(Sun)  
 16:00–21:00  
 [上演 | Performance] 3/19(Sat),  
 26(Sat), 27(Sun) 15:00–  
 ◆ozasahayashi\_project (KYOTO  
 ART HOSTEL kumagusuku 1F)

28  
 Performance + Installation  
 カウパー団 cowper-dann  
 『小さな海底』 The small bottom  
 of the sea  
 3/19(Sat)–3/20(Sun) 11:00–  
 17:00  
 ◆カウパー団代表宅  
 House of cowper-dann

29  
 Juggling  
 Juggling Unit ピントクル  
 Juggling Unit Pintcle  
 『像と響(かたちとひびき)』  
 Afterimage and reverberation  
 3/19(Sat) 14:00–, 19:00–  
 3/20(Sun) 11:00–, 16:00–  
 ◆KAICA

30  
 Video Installation  
 余越保子 Yasuko Yokoshi  
 『Hangman Takuzo』  
 3/19(Sat), 3/20(Sun) 13:00–  
 3/21(Mon)–3/25(Fri) 20:00–  
 3/26(Sat), 3/27(Sun) 13:00–  
 ◆ozasahayashi\_kyoto

31  
 Live performance  
 仙石彬人 AKITO SENGOKU  
 『SENGOKU night. Vol.08』  
 3/20(Sun) 19:30–  
 ◆UrBANGUILD

32  
 Dance  
 相模友士郎 Yujiro Sagami  
 『ナビゲーションズ』 Navigations  
 3/20(Sun) 15:00–, 19:00–  
 3/21(Mon) 13:00–, 17:00–  
 ◆元・立誠小学校 音楽室  
 Former Rissei Elementary School

33  
 Dance  
 舞踏カンパニー倚羅座  
 Butoh Company Kiraza  
 五條く妹の力) シリーズ第8弾『倚羅  
 座舞踏公演「夢衣」』  
 Kiraza Butoh Performance “Robe  
 of Dreams” 8th Performance in  
 “The Power of Sisters”  
 3/20(Sun) 15:00–, 19:00–  
 3/21(Mon) 15:00–  
 ◆五條會館  
 Gojo Kaikan

34  
 Theater  
 新聞家 sinbunka  
 『SABR』  
 3/20(Sun) 14:30–, 20:30–  
 3/21(Mon) 10:30–, 14:30–  
 ◆idギャラリー  
 id Gallery

35  
 Dance  
 SUN PUT DANCE  
 『春分十六夜公演「つぎのむら」』  
 The vernal equinox performance  
 “unevenness of the moon”  
 3/20(Sun), 21(Mon), 23(Wed),  
 24(Thu) 19:30–  
 ◆CAFÉ CUBE(細見美術館)  
 CAFÉ CUBE(Hosomi Museum)

36  
 Music + Dance + Installation  
 + Ceremony  
 混沌の首 Neck of Chaos  
 『Gate of DAWN /ゲート・オブ・ドーン』  
 3/21(Mon) 18:30–  
 ◆UrBANGUILD

37  
 Dance  
 山本和馬 Kazuma Yamamoto  
 『愛してしまうたびに。』  
 Ai shite shimau tabini.  
 3/24(Thu) 19:00–  
 3/25(Fri) 19:00–  
 3/26(Sat) 14:00–, 18:00–  
 ◆元・立誠小学校 音楽室  
 Former Rissei Elementary School

38  
 Dance  
 桂勤×黒子沙菜恵 ダンスがわかりません  
 Kan Katsura × Sanae Kuroko What  
 is DANCE?  
 『語り出す沈黙～身体に真く』  
 The Silence starts to talk - Lis-  
 ten with the body  
 3/25(Fri) 19:30–  
 ◆UrBANGUILD

39  
 Installation  
 bonna nezze kaartz  
 3/25(Fri)–3/27(Sun)  
 13:00–19:00  
 ◆Division

40  
 Dance  
 村川拓也 Takuya Murakawa  
 『終わり』 End  
 3/25(Fri) 19:00–  
 3/26(Sat) 19:00–  
 3/27(Sun) 15:00–  
 ◆アトリエ劇研  
 atelier GEKKEN

41  
 Theater  
 劇団衛星 Eisei Theatre Group  
 『珠光の庵～遣の巻～』 Jukou's IORI  
 -the messenger's account-  
 3/25(Fri) 19:30–  
 3/26(Sat) 14:00–  
 3/27(Sun) 14:00–, 19:00–  
 3/28(Mon) 19:30–  
 ◆KAICA

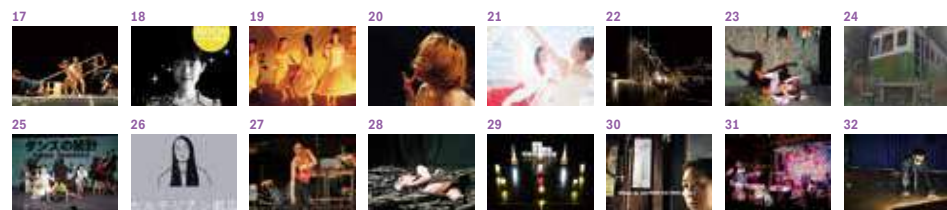
42  
 Theater  
 劇団三毛猫座  
 Mikeneco theatrical company  
 『傘下のひとりごと』  
 Monologize under the umbrella  
 3/26(Sat) 13:00–, 18:00–  
 3/27(Sun) 13:00–  
 ◆スペース・イサン  
 space isan

43  
 Theater  
 森林浴 shinrinyoku  
 『火星ハイツ三部作』  
 Mars heights trilogy  
 3/26(Sat) 16:30–, 19:30–  
 3/27(Sun) 13:30–, 16:30–,  
 19:30–  
 ◆cumono gallery

44  
 Theater  
 虹色結社 Nijirokessha  
 『ゼゼラゼラゼラデメニグス』  
 Zezera and Macropinna  
 3/26(Sat) 15:00–, 19:00–  
 3/27(Sun) 11:00–, 15:00–  
 ◆人間座スタジオ  
 Ningenza studio

45  
 Dance  
 Dance Project Revo  
 『余裕の朝』 Morning of leeway  
 3/27(Sun) 19:00–  
 ◆UrBANGUILD

Notes:  
 ・詳細は、KYOTO EXPERIMENT公式ウェブサイトおよび各主催団体のウェブサイトをご参照ください。  
 ・KYOTO EXPERIMENTでは、オープンエントリー作品のチケットを取り扱っておりません。チケットに関しては、直接主催団体にお問合せください。  
 ・For more information, see the website [www.kyoto-ex.jp] or each company's website.  
 ・Tickets only available from each company.



01. image by MORPH 04. image by Tomoya Kabutoiwa 05. photo: Junpei Iwamoto 08. photo: Chuki Katsuka 11. photo: Kazuo Yamashita-clip 12. Furio Kohana, Default Space, 2015 13. photo: Akane Onishi 14. image by Saichiro Matsuyama 15. photo: Yoshifumi Ogura 17. photo: Tomoka Korogi 18. photo: Shuhei Sakai 20. photo: Takuya Nishimura 21. photo: Ituka Sato 22. photo: Koichiro Kojima 24. image by Jiro Nagatani 25. photo: Hideki Nanao 27. photo: Toshihiro Shimizu 28. photo: Munehiro Bino 31. photo: Shimpu Maruyama 35. photo: KIM SAJIK 36. photo: Makoto Onozuka 37. photo: Yuki Moriya 40. photo: Satoshi Ago 43. photo: Kazuhiko Hiwa 44. photo: Miho Kamio

## 関連イベント / Related Events

### Next Producer's College

フェスティバルや劇場のプログラムを構築するプログラムディレクターの仕事について、海外から2名のフェスティバルディレクターを招き、レクチャーを実施します。

ゲスト(予定): イム・インザ(ソウル・マージナル・シアター・フェスティバル アーティスティックディレクター)  
ヴェロニカ・カウプ=ハスラー(シュタイヤーマルクの秋のフェスティバル ディレクター)

進行: 橋本裕介(KYOTO EXPERIMENTプログラムディレクター/ロームシアター京都プログラムディレクター)

□ 3/18(Fri) 13:00-

▲ ロームシアター京都 会議室

言語: 英語、韓国語(日本語逐次通訳あり)

¥ ¥2,000(要申込)

文化庁委託事業「平成27年度文化庁戦略的芸術文化創造推進事業」※

主催: 文化庁、京都国際舞台芸術祭実行委員会

制作: 京都国際舞台芸術祭実行委員会

### Next Producer's College

Two festival directors from Korea and Austria give lectures about their work programming festivals and theaters.

Speakers (TBC): Inza Lim (Artistic Director, Seoul Marginal Theatre Festival), Veronica Kaup-Hasler (Director, steirischer herbst festival)

Moderator: Yusuke Hashimoto (Program Director, Kyoto Experiment / ROHM Theatre Kyoto)

□ 3/18(Fri) 13:00-

▲ Meeting Room, ROHM Theatre Kyoto

¥ ¥2,000 (Reservation required\*)

Language: English, Korean (with consecutive Japanese translation)

Supported by: the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2015

### KYOTO EXPERIMENT

#### ×舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)

#### 公開シンポジウム

舞台芸術と社会を繋ぐ全国的、国際的な会員制ネットワーク「舞台芸術制作者オープンネットワーク」の公開シンポジウムを開催します。

国内外で活躍する劇場やフェスティバルのディレクターを招き、最新のトピックについて議論を展開します。

□ 3/20(Sun)

[シンポジウム1] 10:00-12:30

[シンポジウム2] 13:30-15:30

▲ 元・立誠小学校 講堂

京都市中京区蛸薬師通河原町東入備前島町310-2

¥ ¥500(予約不要)

お問合せ: 舞台芸術制作者オープンネットワーク事務局 info@onpam.net

主催: KYOTO EXPERIMENT、特定非営利活動法人舞台芸術制作者オープンネットワーク(ON-PAM)

共催: 立誠・文化のまち運営委員会



### Kyoto Experiment + Open Network for Performing Arts Managers (ON-PAM)

#### Public Symposium

This symposium is organized by Open Network for Performing Arts Managers, which works to connect society and the performing arts both nationally and internationally. It features directors from theaters and festivals from around the world, debating the latest important issues in their fields.

□ 3/20(Sun)

[Symposium 1] 10:00-12:30 [Symposium 2] 13:30-15:30

▲ Auditorium, Former Rissei Elementary School

310-2 Bizenjima-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

¥ ¥500 (No reservation required)

Inquiry: Open Network for Performing Arts Managers Office info@onpam.net

Presented by: Kyoto Experiment, Open Network for Performing Arts Managers (ON-PAM)

Co-presented by: Rissei Cultural City Steering Committee

### ダヴィデ・ヴォンパク アーティストトーク

ヴィラ九条山との共同開催により、2011年にレジデンスアーティストとしてヴィラ九条山にて滞在制作を行ったダヴィデ・ヴォンパクが、再び京都と東京を拠点に新作のためのリサーチを行います。寺山修司をはじめアンクラ演劇の肉体のあり方に関心を寄せているヴォンパクが、今回のリサーチと自身の作品について語ります。

□ 3/23(Wed) 18:00-19:30

▲ 京都芸術センター 和室「明倫」

¥ 無料(申込不要)

聞き手: 橋本裕介(KYOTO EXPERIMENTプログラムディレクター/ロームシアター京都プログラムディレクター)

言語: フランス語(日本語での逐次通訳あり)

主催: ヴィラ九条山、KYOTO EXPERIMENT

### David Wampach Talk

Following his 2011 residency at Villa Kujoyama, David Wampach returns to Kyoto and Tokyo to carry out further research for a new work, co-organized by Villa Kujoyama. Wampach's interests include the representation of the body in angura theater, such as Shuji Terayama. In this talk he will discuss his work and current research.

□ 3/23(Wed) 18:00-19:30

▲ Japanese-style Room "Meirin", Kyoto Art Center

¥ Free admission (No reservation required)

Moderator: Yusuke Hashimoto (Program Director, Kyoto Experiment / ROHM Theatre Kyoto)

Language: French (with consecutive Japanese translation)

Presented by: Villa Kujoyama, Kyoto Experiment



### マヌエラ・インファンテ 演劇ワークショップ

『動物園』の作・演出を手掛けるマヌエラ・インファンテによる俳優のためのワークショップを開催。チリ独自の演劇文化を土壌にインファンテの個性が紡ぎ出した演劇メソッドを体験してみませんか。

□ 3/31(Thu) 19:30-、4/1(Fri) 19:30-

▲ 京都芸術センター

¥ ¥3,000(2日間通し、要申込)



### Manuela Infante Theater Workshop

This is a workshop for actors, led by Manuela Infante, the writer and director of Zoo at Kyoto Experiment 2016 Spring. The event offers an opportunity to experience theater methods interweaving Manuela Infante's individual style with the unique theater culture of Chile.

□ 3/31(Thu) 19:30-、4/1(Fri) 19:30-

▲ Kyoto Art Center

¥ ¥3,000 (for 2days)

(Reservation required\*)

### 篠田千明演出『動物園』のためのオープンセッション 英語落語「動物園」+公開ブレンストーミング

2016年秋にマヌエラ・インファンテ作『動物園』を上演する篠田千明によるクリエーションのためのオープンセッション。断家桂かい枝が英語落語「動物園」を披露した後、篠田とドラマトゥルクの岸本佳子が創作に向けたアイデアを話し合う公開のブレンストーミングを行います。

□ 4/2(Sat) 14:00-16:30

▲ 京都芸術センター

¥ ¥500(要申込)

## 提携プログラム / Partner Program

### ロームシアター京都オープニング事業 搬入プロジェクトー京都・岡崎計画ー

『わが父、ジャコメッティ』(KYOTO EXPERIMENT 2014)の記憶も新しい「悪魔のしるし」が今回は代表作『搬入プロジェクト』を携えて入浴。ロームシアター京都によるプロデュースのもと、入らなそうでギリギリ入るサイズと形状の巨大な物体を京都市内の大学生らとともに設計・製作し、上演当日会場に居合わせた人たちとともに搬入作業を行います。上演後その物体はフェスティバル会期中を通じて館内で展示されます。

□ 搬入本番 3/5(Sat) 15:00-

物体展示 3/6(Sun)-3/27(Sun)

▲ ロームシアター京都

¥ 無料(予約不要)

参加アーティスト: 危口統之(演出家、悪魔のしるし主宰)、石川卓磨(建築家)、宮村ヤスヲ(グラフィックデザイナー)、岡村滝尾(プロダクションマネージャー)[以上、悪魔のしるしメンバー]、山城大督(美術家、映像ディレクター)、ドキュメント・コーディネーター)、RAD(建築リサーチ・プロジェクト)、増本泰斗(アーティスト、ARTISTS' GUILD) お問合せ: ロームシアター京都 Tel 075-771-6051(平日 9:00-17:00)

主催: 京都市、ロームシアター京都(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団)

共催: KYOTO EXPERIMENT

### Open Session for Chiharu Shinoda's Staging of Zoo English Rakugo & Public Brainstorming

Chiharu Shinoda will direct Manuela Infante's Zoo in autumn 2016 and this "open session" event forms part of the creative process for her staging. Following an English performance by Kaishi Katsura of the well-known Rakugo story Zoo, Shinoda joins dramaturge Kako Kishimoto for a public brainstorming for the upcoming production.

□ 4/2(Sat) 14:00-16:30

▲ Kyoto Art Center

¥ ¥500 (Reservation required\*)

\*申込: お電話(075-213-5839)もしくは公式ウェブサイト内申込フォーム(www.kyoto-ex.jp)にてKYOTO EXPERIMENT事務局までお申込みください。

\* Reservation: Call Kyoto Experiment Office (075-213-5839) or apply via festival website [www.kyoto-ex.jp]

### ROHM Theatre Kyoto Opening Program Carry-in-Project Kyoto-Okazaki

Following their contribution to Kyoto Experiment 2014 with *Mon Père, Giacometti*, Akumanoshirushi bring their acclaimed Carry-in-Project to Kyoto. Produced by ROHM Theatre Kyoto, Akumanoshirushi will join with students in Kyoto to design and construct an object so huge it can hardly fit into the theater. The team will then work together to carry their creation into the space, after which it will be exhibited inside the theater for the duration of Kyoto Experiment.

□ Carry-in Event: 3/5(Sat) 15:00-

Exhibition: 3/6(Sun)-3/27(Sun)

▲ ROHM Theatre Kyoto

¥ Free admission (No reservation required)

artists: Noriyuki Kiguchi (theater director), Takuma Ishikawa (architect), Yasuwo Miyamura (graphic designer), Takio Okamura (production manager) (all for Akumanoshirushi), Daitoku Yamashiro (artist, video director, document coordinator), RAD (architecture research project), Yasuto Masumoto (artist, Artists' Guild)

Inquiry: ROHM Theatre Kyoto Tel 075-771-6051

Presented by: Kyoto City, ROHM Theatre Kyoto (Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation)

Co-presented by: Kyoto Experiment



photo: Chisuke Sugita

## フェスティバル・ミーティングポイント / Festival Meeting Point

フェスティバル開催期間中に期間限定で出現する、参加アーティストと観客とのコミュニケーションのためのスポット「ミーティングポイント」。今回はメイン会場であるロームシアター京都内にある「京都岡崎 蔦屋書店」、「京都モダンテラス」の協力を得て新たな装いに。フェスティバルにちなんだブックフェアや特別サービスで盛り上げ、皆さんをお迎えます。

The Meeting Point is a space that appears during Kyoto Experiment to act as an interface for communication between festival artists and audiences. This festival the Meeting Point is Kyoto Okazaki Tsutaya Books and Kyoto Modern Terrace, located inside the newly opened main KEX venue, ROHM Theatre Kyoto. The bookstore hosts a book fair and menu linked to the festival.

### 出会う

「ミーティングポイント」は、たくさんのアーティストや観客が行き交うフェスティバルの雰囲気や劇場の外で体験できる場所。観劇後に観客同士が感想を語り合う「感想シェアカフェ」(予約不要)など、どなたでもお越しいただけるイベントを予定しています。

### Encounter

The Festival Meeting Point is a place for audiences and artists to interact outside of the theater. After performances, audiences can gather at the space for informal events where they share their impressions of what they saw.



### 食べる・飲む

2Fのカフェ&レストラン「京都モダンテラス」は、朝8時から23時までオープン。はしご観劇の途中の休憩場所として、観劇後のディナーなどにご利用いただけます。注文時にKYOTO EXPERIMENTの公演チケットを提示すれば和菓子のスペシャルサービスあり(公演当日、ご飲食ご注文の方に限り有効)。

### Eat & Drink

Kyoto Modern Terrace is a café and restaurant on the second floor, open from 8:00 to 23:00. It makes an ideal spot to rest between performances or enjoy a meal afterwards. Show your Kyoto Experiment ticket to get a complimentary Japanese sweet (limited to tickets for performances on same day; regular food or drink order required).



### 知る

「京都岡崎 蔦屋書店」や3FのBOOK & GALLERIAではKYOTO EXPERIMENTブックフェアを開催。上演作品や参加アーティストの関連書籍に加え、参加アーティストがオススメする「アーティスト選書」コーナーも。観劇前の予習に、あるいは観劇後により深くアーティストを知るために、ぜひご利用ください。

### Learn

During the festival the Kyoto Experiment Book Fair is held at Kyoto Okazaki Tsutaya Books and Book & Art Galleria. In addition to books about the performances and artists in the festival, there is also a series of books recommended by the participating artists. Visit the fair before or after a performance to learn more about artists' work.



### [ブック&カフェ]

京都岡崎 蔦屋書店  
スターバックス コーヒー 京都岡崎 蔦屋書店 8:00-22:00  
[カフェ&レストラン]  
京都モダンテラス 8:00-23:00  
[展示スペース]  
BOOK & ART GALLERIA 9:00-19:00  
[レンタルサイクル(有料)]  
8:00-20:00

### [Bookstore & Café]

Kyoto Okazaki Tsutaya Books & Starbucks Coffee Kyoto  
Okazaki Tsutaya Books 8:00-22:00  
[Café & Restaurant]  
Kyoto Modern Terrace 8:00-23:00  
[Exhibition space]  
Book & Art Galleria 9:00-19:00  
[Bicycle rental]  
8:00-20:00



住所: 京都市左京区岡崎最勝寺町13 ロームシアター京都 パークプラザ  
Tel: 075-754-0008 (1F/京都岡崎 蔦屋書店)  
075-754-0234 (2F/京都モダンテラス)  
http://real.tsite.jp/kyoto-okazaki/  
Park Plaza, ROHM Theatre Kyoto, 13 Okazaki Saishoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto  
Tel: +81(0)75-754-0008 (1F/Kyoto Okazaki Tsutaya Books)  
+81(0)75-754-0234 (2F/Kyoto Modern Terrace)  
http://real.tsite.jp/kyoto-okazaki/

## 公演チケット付ホテル宿泊プラン / Hotel-Festival Packages

フェスティバルを応援するホテルのご協力で公演チケット付きのお得なホテルプランを企画しました。会場からの交通の便もよく、観劇や京都観光を夜まで楽しんだ後は宿でゆっくり過ごせます。

Kyoto Experiment has partnered with hotels in Kyoto to offer special packages for staying overnight when you visit the festival. The hotels offer good access to the festival venues as well as general Kyoto sightseeing.

### アランヴェールホテル京都 / Aranvert Hotel Kyoto

京都駅から地下鉄で1駅、五条駅から徒歩2分と、各公演のご鑑賞・京都観光にアクセスの良いホテル。公演ご鑑賞の後は、今年新たに誕生したりニューアルルームにてゆっくりとお過ごしいただけます。また、最上階13階の宿泊者専用大浴場も人気。

1泊2日+公演チケット1枚(お1人様あたり)付プラン  
・[リニューアル] シングル ¥11,100~(1室1名様利用、税込・サービス料込)  
・[リニューアル] ツイン ¥9,800~(1室2名様利用、税込・サービス料込)

※上記はお1人様1泊あたり、ご朝食なしの場合の料金です。ご朝食はお1人様1泊あたりプラス1,000円にてご提供させていただきます。  
※ツインルームは、エキストラベッドを1台追加し3名様にてご利用頂くことができます。詳細はお問い合わせください。

内容: チケット1公演(お1人様あたり1枚)+宿泊(朝食なし)  
対象期間: 3/5-3/26 [公演のない3/8-3/10、3/14-15、3/22-24を除く]

Located just 2 minutes' walk from Gojo Station (one stop from Kyoto Station on the subway), this hotel has superb access to the festival's performances and also Kyoto's prime sightseeing spots. After catching a performance, relax in one of the recently renovated and improved guest rooms. There is also a public bath on the top floor of the hotel.

1 Night + 1 Ticket to Kyoto Experiment (per guest)  
Single: from ¥11,100 (1 guest per room, includes tax and service charges)  
Twin: from ¥9,800 (2 guests per room, includes tax and service charges)  
Prices are for 1 night per guest. Breakfast is not included but is available for an additional ¥1,000 per guest per night. Extra beds can be added to twin rooms to accommodate 3 guests. Please inquire for details.

Package includes 1 ticket per guest to Kyoto Experiment and 1 night's accommodation.  
Available: 3/5-3/26 (except dates with no performance: 3/8-3/10, 3/14-15, 3/22-24)



アランヴェールホテル京都  
京都市下京区五条通東鋸屋町179  
ご予約・お問合せ: Tel 075-365-5111  
www.aranvert.co.jp  
※チェックイン14:00、チェックアウト11:00

Aranvert Hotel Kyoto  
179 Higashi Kazariya-cho, Gojo-dori,  
Shimogyo-ku, Kyoto  
Reservations & Inquiries: 075-365-5111  
www.aranvert.co.jp  
Check-in: 14:00  
Check-out: 11:00

### ホテルモントレ京都 / Hotel Monterey Kyoto

京都芸術センターからとても近く、内装にウィリアム・モリスといったアーツ&クラフツのデザインテイストを取り入れ、過去にはアートフェア会場になるなど、アートに造詣が深いホテル。京都観光の拠点として、便利にご利用いただけます。

1泊2日+公演チケット1枚(お1人様あたり)付プラン  
・シングル ¥12,000~(1室1名様利用、税込・サービス料込)  
・ツイン ¥11,500~(1室2名様利用、税込・サービス料込)

上記はお1人様1泊あたりの料金です。

内容: チケット1公演(1枚)+宿泊(朝食付)  
対象期間: 3/5-3/27 [公演のない3/8-3/10、3/14-15、3/22-24を除く]

Located very near to Kyoto Art Center, Hotel Monterey Kyoto has a long association with art and crafts. Its interior is inspired by a William Morris design and the hotel has previously served as an art fair venue. It is also conveniently placed for sightseeing around Kyoto.

1 Night + 1 Ticket to Kyoto Experiment (per guest)  
Single: from ¥12,000 (1 guest per room, includes tax and service charges)  
Twin: from ¥11,500 (2 guests per room, includes tax and service charges)  
Prices are for 1 night per guest.

Package includes 1 ticket per guest to Kyoto Experiment and 1 night's accommodation (with breakfast).  
Available: 3/5-3/27 (except dates with no performance: 3/8-3/10, 3/14-15, 3/22-24)

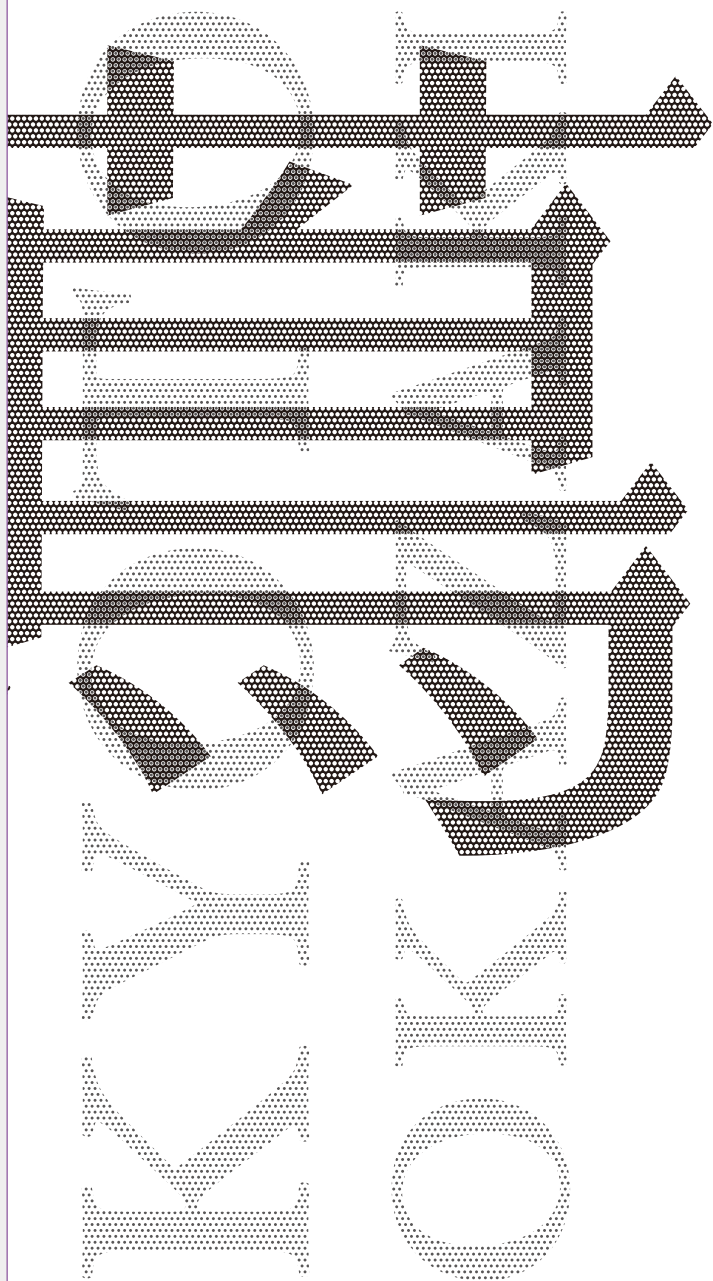


ホテルモントレ京都  
京都市中京区烏丸通三条下丸頭屋町604  
ご予約・お問合せ: Tel 075-251-7111  
www.hotelmonterey.co.jp/kyoto  
※チェックイン14:00、チェックアウト12:00

Hotel Monterey Kyoto  
604 Manjuya-cho, Sanjo-sagaru,  
Karasuma-dori, Nakagyo-ku, Kyoto  
Reservations & Inquiries: 075-251-7111  
www.hotelmonterey.co.jp/kyoto  
Check-in: 14:00  
Check-out: 12:00

※宿泊プランの詳細は公式ウェブサイト[www.kyoto-ex.jp]をご覧ください。  
For more details on the accommodation packages, please see the festival website (www.kyoto-ex.jp).

# 京都岡崎 蔦屋書店がオープンしました。



蔦屋書店  
TSUTAYA BOOKS

BOOK & CAFÉ  
京都岡崎 蔦屋書店  
営業時間 8:00-22:00



CAFÉ & RESTAURANT  
京都モダンテラス  
営業時間 8:00-23:00

〒606-8342 京都市左京区岡崎最勝寺町13 ロームシアター京都 パークプラザ1階  
<http://real.tsite.jp/kyoto-okazaki/>

NXTSTPは、欧州の舞台芸術フェスティバル間での共同製作およびその巡回公演を促進することを目的に、2007年に発足したパフォーミング・アーツのためのネットワークである。第二期は2012年11月1日から始動。2012年から2017年にわたって、EUの認定文化プログラムとして、5年間の財政サポートが決定している。

第二期の特徴は、ネットワークの更なる飛躍とより幅広い交流を求めて、国境を超えて異なる文化圏から4つのアソシエイト・パートナーを迎えたことにある。その4つである、KYOTO EXPERIMENT、On Marche(マラケシュ)、Panorama Festival(リオデジャネイロ)、Dense Bamako Dance(マリ)は、それぞれ世界から注目されるフェスティバルである。

こうしてネットワークを拡張していくことで、NXTSTPはグローバル化と文化的アイデンティティの相克について再考するきっかけをネットワークの核にもたらすだろう。アソシエイト・パートナーは、NXTSTPがサポートする作品だけでなく、NXTSTPそのものの機能についても見出していくことになる。「外」からの視点を得ることで、ヨーロッパのアイデンティティに関する実り豊かな議論が繰り広げられることを期待している。

#### パートナー

Kunstenfestivaldesarts(ブリュッセル)  
Alkantara Festival(リスボン)  
Baltoscandal Festival(ラクヴェレ)  
Dublin Theater Festival(ダブリン)

Göteborgs Dans & Teater Festival(ヨーテボリ)  
Noorderzon(フローニンゲン)  
steirischer herbst festival(グラーツ)  
Théâtre National de Bordeaux en Aquitaine(ボルドー)



NXTSTP is a network European performing arts festivals that came into being in 2007 to provide an extra shot of energy to the co-production and circulation of the performing arts in Europe. The first term of NXTSTP ran from 01 November 2007 to 31 October 2012. The network consisted of 8 of highly established performance arts festivals in Europe.

The second term of NXTSTP (/The Second Generation/) kicked off on 01 November 2012 and has been awarded a five-year funding from the Culture Programme of the European Union (2012-2017).

To extend the exchange of competence and artistic dimension of Next Step even beyond Europe's borders they have selected 4 associated partners from different cultural backgrounds, active in strategic regions of the world, which includes Kyoto Experiment (Kyoto) as well as Festival On Marche (Marrakech), Panorama Festival (Rio de Janeiro) Dense Bamako Dance (Mali).

By opening up the network in this way, Next Step can be an ambassador for the European arts scene of tomorrow, and simultaneously bring the reflection on globalisation versus identity to the core of our own network. The associated partners will discover the functioning of Next Step as well as the productions it supports. They will nourish the debate on European identity with a view from the "outside".



DEAN & DELUCA®  
KYOTO

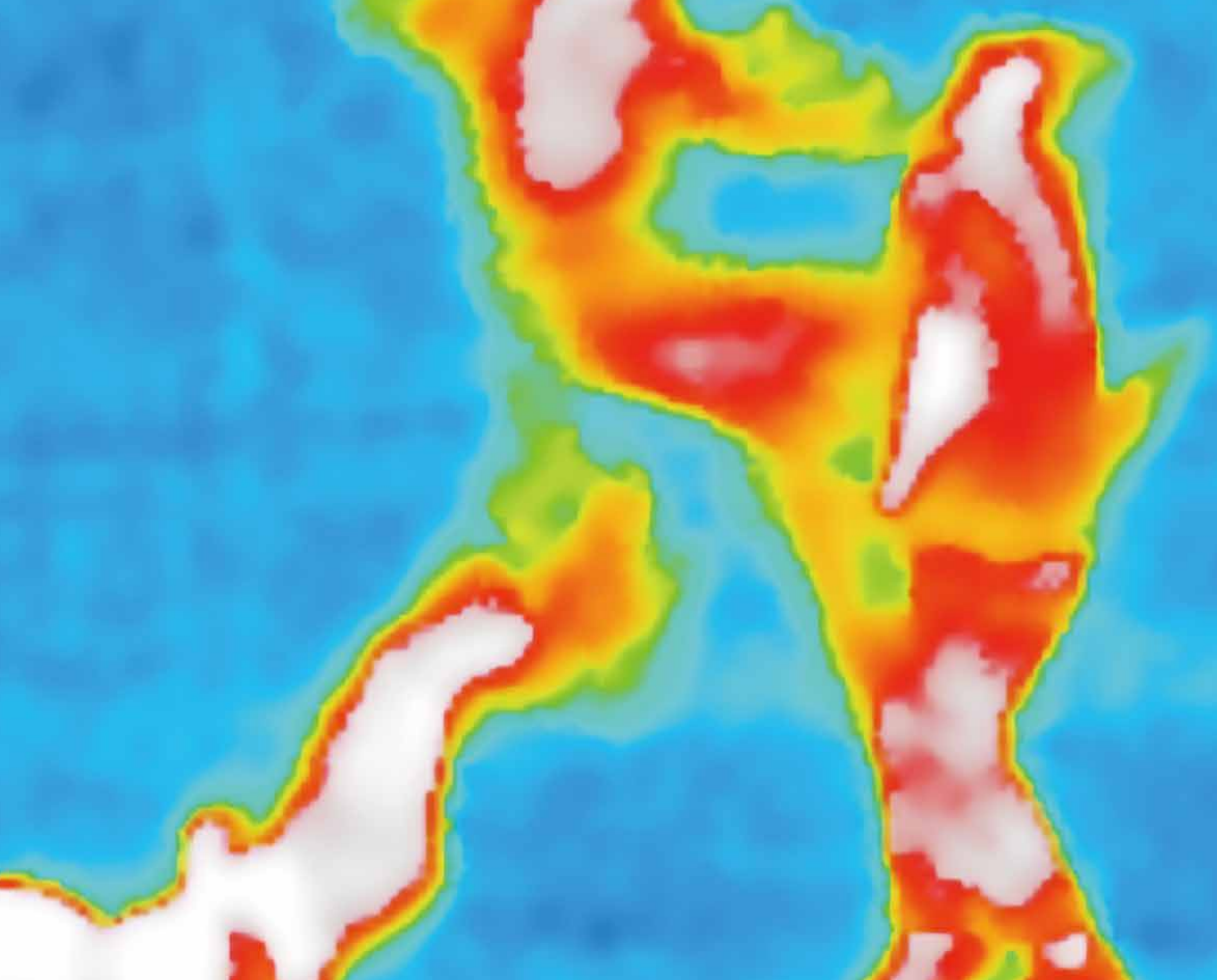
Cafe

8月までの期間限定で京都にオープンした食のセレクトショップ DEAN & DELUCA のカフェ。  
厳選された豆を使い、パスタが一杯一杯丁寧に淹れるカフエラテやキッシュやサンドウィッチにデリがついた選べるプレートセットメニューなど  
大正時代に建てられた、天井が高く開放的な空間で、ゆったりとしたひとときをお過ごしください。

**10% OFF** こちらのブックレット持参でお会計の総額より10%引き  
\*2016年3月27日まで有効  
\*1回限り有効



DEAN & DELUCA  
京都カフェ  
京都市中京区烏丸通  
蛸薬師下ル手洗水町 645  
PHONE: 075-253-0916  
OPEN: 7:30 - 22:00  
(土・日・祝 8:00 - 21:00)



## ロームシアター京都オープニング事業

### KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭2016 SPRING

主催  
京都国際舞台芸術祭実行委員会  
京都市  
ロームシアター京都  
公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団  
京都芸術センター  
公益財団法人京都市芸術文化協会  
京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

助成  
平成27年度文化庁国際芸術交流支援事業   
公益社団法人企業メセナ協議会 2021 芸術・文化による社会創造ファンド 

#### 京都国際舞台芸術祭実行委員会

委員長：  
森山直人(演劇批評家／京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター主任研究員／京都芸術センター運営委員)

副委員長：  
藤井宏一郎(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団専務理事)

委員：  
天野文雄(京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター所長・教授)  
蔭山陽太(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団／ロームシアター京都支配人兼エグゼクティブディレクター)  
篠原資明(京都市立大学人間・環境学専攻教授)  
畑律江(毎日新聞大阪本社芸部専門編集委員)  
山崎弥生(公益財団法人京都市芸術文化協会事務局長)  
吉岡久美子(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課計画推進担当課長)  
吉岡洋(美学者／京都大学大学院文学研究科教授)

監事：  
秋山正俊(京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課長)  
中島良彰(公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団／ロームシアター京都総務部長)

顧問：  
太田耕人(演劇評論家／京都教育大学教育学部教授)  
茂山あきら(狂言師／NPO法人京都アーツミーティング理事長)  
千宗室(裏千家家元)  
建畠哲(京都芸術センター館長／多摩美術大学学長)  
平田オリザ(劇作家・演出家／劇団「青年団」主宰)  
渡邊守章(京都造形芸術大学客員教授／東京大学名誉教授／演出家)

特別協力  
株式会社長谷本社

協力  
アランヴェールホテル京都、京都岡崎 蔦屋書店、京都国立近代美術館、京都府立府民ホール“アルティ”、京都モダンテラス、四条繁栄会商店街振興組合、HOTEL ANTEROOM KYOTO、ホテルモントレ京都、八坂神社参道 祇園商店街振興組合

#### 京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局

プログラムディレクター：橋本裕介  
事務局長：垣脇純子  
事務局：井上美葉子、門脇俊輔、川那辺香乃、和田ながら  
広報：多胡真佐子、西谷枝里子  
制作：小倉由佳子、上村絵梨子、川崎陽子(SAYATEI)、ウルリケ・クラウトハイム  
[ロームシアター京都] 河本あずみ、武田知也  
[京都芸術センター] 岩村空太郎、芝田江梨、土山亮子  
[京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター] 井出亮、川原美保  
テクニカルコーディネーター：大鹿展明、尾崎聡、夏目雅也  
インターン：大森玲、オノ平裕巳、松田彩花、山下裕英  
英文和訳：板井由紀  
和文英訳：ウィリアム・アンドリュース  
ドキュメントコーディネーター：竹内厚  
アートディレクション：原田祐馬(UMA / design farm)  
デザイン：山副佳祐(UMA / design farm)  
ウェブサイトディレクション：UNGLOBAL STUDIO KYOTO  
ウェブサイトデザイン：TRACE  
ウェブサイトプログラム・コーディング：FLAM(桐谷典親)

京都国際舞台芸術祭アドバイザーボード：  
小崎哲哉(編集者／REALTOKYO、REALKYOTO発行人兼編集長)  
古後奈緒子(舞踊批評／dance+主宰／大阪大学文学部研究科助教)  
秋原麗子(京都芸術センター)

## ROHM Theatre Kyoto Opening Program

### Kyoto Experiment: Kyoto International Performing Arts Festival 2016 Spring

Organized by  
Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee  
Kyoto City  
ROHM Theatre Kyoto  
Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation  
Kyoto Art Center  
Kyoto Arts and Culture Foundation  
Kyoto Performing Arts Center at Kyoto University of Art and Design

Supported by  
the Agency for Cultural Affairs Government of Japan in the fiscal 2015

#### Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee

Chairman  
Naoto Moriyama (Theater Critic / Senior Researcher of Kyoto Performing Arts Center / Executive Committee Member, Kyoto Art Center)

Vice Chairman  
Koichiro Fujii (Senior Director, Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation)

Committee Members  
Fumio Amano (Professor, Director of Kyoto Performing Arts Center)  
Yota Kageyama (Theater Manager / Executive Director, ROHM Theatre Kyoto)  
Motoaki Shinohara (Professor at Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University)  
Ritsue Hata (Editorial committee member of Arts and Cultural News Department, Osaka head office of The Mainichi Newspapers.)  
Yayoi Yamazaki (Secretary-General of Kyoto Arts and Culture Foundation)  
Kumiko Yoshioka (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Unit Head)  
Hiroshi Yoshioka (Professor of Aesthetics and Theory of Arts, Kyoto University)

Supervisors  
Masatoshi Akiyama (Culture and Citizens Affairs Bureau of Kyoto City, Culture and Art Planning Section Head)  
Yoshiaki Nakajima (General Manager, Kyoto City Music Art Cultural Promoting Foundation / ROHM Theatre Kyoto)

Advisors  
Kojin Ota (Theater Critic / Professor, Kyoto University of Education)  
Akira Shigeyama (Kyogen Artist / President of NPO Kyoto Arts Meeting)  
Soshitsu Sen (Urasenke Grand Tea Master)  
Akira Tatehata (Director, Kyoto Art Center / President, Tama Art University)  
Oriza Hirata (Playwright, Theater Director / Director of Seinendan)  
Moriaki Watanabe (Visiting professor of Kyoto University of Art and Design / Professor Emeritus, University of Tokyo / Theater Director)

Granted by  
Association for Corporate Support of the Arts, Japan:  
2021 Fund for Creation of Society by the Arts and Culture

With the special cooperation of  
Hase Building Co., Ltd.

With the cooperation of  
Aranvert Hotel Kyoto / Kyoto Okazaki Tsutaya Books / National Museum of Modern Art, Kyoto / Kyoto Prefectural Citizens' Hall ALTI / KYOTO MODERN TERRACE / Shijo Han'eikai Shopping Street Promotion Association / HOTEL ANTEROOM KYOTO / Hotel Monterey Kyoto / Gion Shopping Street Promotion Association

#### Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office

Program Director: Yusuke Hashimoto

Executive Director: Junko Kakiwaki

Office: Miwako Inoue, Shunsuke Kadowaki, Kano Kawanabe, Nagara Wada

Public Relations: Masako Tago, Eriko Nishitani

Production Coordinators: Yukako Ogura, Eriko Kamimura, Yoko Kawasaki (SAYATEI), Ulrike Krauthelm [ROHM Theatre Kyoto] Azumi Komoto, Tomoya Takeda [Kyoto Art Center] Sorataro Iwamura, Eri Shibata, Ryoko Tsuchiyama [Kyoto Performing Arts Center] Ryo Ide, Miho Kawahara

Technical Coordinators: Nobuaki Oshika, So Ozaki, Masaya Natsume

Interns: Rei Omori, Yumi Sainohira, Sayaka Matsuda, Hiroe Yamashita

Japanese translation from English: Yuki Itai

English translation from Japanese: William Andrews

Document Coordinator: Atsushi Takeuchi

Art Direction: Yuma Harada (UMA / design farm)

Design: Keisuke Yamazoe (UMA / design farm)

Web Direction: UNGLOBAL STUDIO KYOTO

Web Design: TRACE

Web Programming / Web Coding: FLAM (Norichika Kiriya)

Advisory Board:  
Tetsuya Ozaki (Editor / Publisher and Editor-in-Chief of REALTOKYO and REALKYOTO)  
Naoko Kogo (Dance Critic / Director of dance+ / Research Associate at School of Letters, Osaka University)  
Reiko Hagihara (Kyoto Art Center)

## 公式プログラムチケット料金 / Tickets

アーティスト・演目 Artist, Title	前売券 Advance Tickets			ペア Pair	当日券 Day Tickets	席種 Seating
	一般 Adult	ユース(25歳以下) 学生 シニア(65歳以上) Youth (Up to 25) Student Senior (65 & Up)	高校生以下 High School Student & Younger			
ダヴィデ・ヴォンパク 渴望 David Wampach URGE	¥2,500	¥2,000	¥1,000	¥4,500	前売料金 +¥500 (高校生以下 は同額)  Advance ticket price + ¥500 (High School Student & Younger: ¥1,000)	自由 Unreserved
地点 スポーツ劇 Chiten Sports Play	¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		指定 Reserved
チョイ・カファイ ソフトマシーン：スルジット&リアント Choy Ka Fai SoftMachine: Surjit & Rianto	¥2,500	¥2,000	¥1,000	¥4,500		自由 Unreserved
松本雄吉×林慎一郎 PORTAL Yukichi Matsumoto & Shinichiro Hayashi PORTAL	¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		指定 Reserved
大駱駝艦・天賦典式 ムシノホン Dairakudakan Temptenshiki Space Insect	¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		指定 Reserved
チェルフィッチュ 部屋に流れる時間の旅 chelfitsch Time's Journey Through a Room	¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500		自由 Unreserved
トリシャ・ブラウン・ダンスカンパニー Trisha Brown: In Plain Site Trisha Brown Dance Company Trisha Brown: In Plain Site	¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500		客席のご用意 はありません Regular seats not provided
マヌエラ・インファンテ/テアトロ・デ・チレ 動物園 Manuela Infante / Teatro de Chile Zoo	¥2,500	¥2,000	¥1,000	¥4,500		自由 Unreserved
足立智美 × contact Gonzo ですらんばしり (おやこチケット対象公演です) Tomomi Adachi & contact Gonzo Teslan Run (Family Tickets available)	¥3,000	¥2,500	¥1,000	¥5,500		自由 Unreserved
ボリス・シャルマツツ/ミュージゼ・ドゥ・ラ・ダンス 喰う Boris Charmatz / Musée de la danse manger	¥3,500	¥3,000	¥1,000	¥6,500		客席のご用意 はありません Regular seats not provided
researchlight 河童よ、ふたたび researchlight In search of Kappa	入場無料 Admission free				-	
ショーケース「Forecast」 Showcase: Forecast	p.58				自由 Unreserved	
フリンジ「オープンエントリー作品」 Fringe: Open Entry Performance	p.61				-	
関連イベント Related Events	p.64				-	

### Notes:

- ・ペアは2枚分の料金です。同一演目・日時公演を2人で観劇する場合のみ有効です。
- ・ユース・学生、シニア、高校生以下チケットをご購入の方は公演当日、証明書のご提示が必要です。
- ・各公演の受付開始は開演の1時間前です。
- ・車椅子でお越しのお客様は、各料金の¥500引き(介助者1名無料)となります。(お席をこちらで指定する場合がございます。問合せはKYOTO EXPERIMENT チケットセンターまで)
- ・団体割引(10名以上)を設けております。詳細はKYOTO EXPERIMENT チケットセンターまで。
- ・年齢により入場を制限させていただく場合がございます。詳細は各公演ページをご覧ください。
- ・主催者の都合による公演中止の場合をのぞき、ご購入後のキャンセル、日時の変更はできません。
- ・演出の都合上、開演時刻を過ぎると入場できない場合がございます。その際払い戻しはいたしません。

### Notes:

- The price of Pair tickets is for two seats. Pair tickets are valid for two persons for the same performance only. \* ID required for Youth, Student, Senior and High School Student & Younger tickets.
- The theater reception and box office opens 60 minutes prior to a performance.
- Accessible Tickets are available at a ¥500 discount from regular priced tickets and include one complimentary ticket for a helper. We may guide you to specific seats. Please contact the Kyoto Experiment Ticket Center.
- Group rates are available for groups of more than 10 people. Please contact the Kyoto Experiment Ticket Center for details.
- Some performances have age restrictions. Please refer to the specific performance information for details.
- No refunds are offered after a ticket has been purchased, except in the case of the cancellation of a performance for unforeseen reasons. Ticket dates and times may also not be changed after purchase.
- Entrance to some performances may be refused after the performance has started. Please note that refunds are not available for latecomers.

## チケット取扱 / Ticket Information

### KYOTO EXPERIMENTチケットセンター

(11:00-20:00、日曜・祝日休[ただし、開催期間中は無休])  
オンライン | [www.kyoto-ex.jp](http://www.kyoto-ex.jp) [セブン-イレブン引取]  
電話予約 | 075-213-0820 [セブン-イレブン引取]  
窓口 | 京都市中京区烏丸通蛸薬師下ル手洗水町645  
flowing KARASUMA 2F

### ロームシアター京都チケットカウンター

(10:00-19:00、年中無休[ただし、臨時休館日をのぞく])  
オンライン | <https://www.e-get.jp/kyoto/pt/> [要事前登録]  
電話予約 | 075-746-3201  
窓口 | 京都市左京区岡崎最勝寺町13

### 京都芸術センター

(10:00-20:00)  
窓口 | 京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2

### チケットぴあ

オンライン | <http://t.pia.jp>  
電話予約 | 0570-02-9999

※オンラインは年中無休、24時間受付

### セット券

KYOTO EXPERIMENT チケットセンターではお得な各種セット券を取り扱っています。

- ※前売のみ
- ※1演目につき1回
- ※本人のみ有効

### フリーパス/学生フリーパス【枚数限定】 完売しました

フリーパス | ¥23,000 学生フリーパス | ¥13,000  
公式プログラム有料公演10演目すべてをご観劇いただけます。

### 3演目券/学生3演目券

3演目券 | ¥7,500 学生3演目券 | ¥6,000  
公式プログラムからお好きな3演目を選び、すべて同時に購入することでお得に観劇できるセット券です。

### 『ですらんばしり』おやこチケット

おやこチケット(一般1名+高校生以下1名) ¥3,500  
足立智美 × contact Gonzo 『ですらんばしり』をおやこでお得に観劇できるチケットです。

取扱=KYOTO EXPERIMENT チケットセンター

### KEX 半券割引

当日受付で、対象公演の観劇済み公演チケットの半券をご提示いただくと、公式プログラムおよびショーケース「Forecast」の当日券が¥500OFF(前売料金)でご入場いただけます。

[対象公演: KYOTO EXPERIMENT 2016 SPRING 公式プログラム/ショーケース「Forecast」/フリンジ企画「オープンエントリー作品」]

※半券1枚につき1名、1回のみ有効。当日券のみの取扱で、残席がある場合に限りです。

### Kyoto Experiment Ticket Center

(11:00-20:00, closed Sundays and public holidays, open every day during festival period)  
Online | [www.kyoto-ex.jp](http://www.kyoto-ex.jp)  
Box Office | 2F flowing KARASUMA, 645 Tearaimizu-cho, Nakagyo-ku, Kyoto  
Phone | +81 (0)75-213-0820

### ROHM Theatre Kyoto Ticket Counter

(10:00-19:00, open every day except special closure days)  
Box Office | 13 Okazaki Saishoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto  
Phone | +81 (0)75-746-3201

### Kyoto Art Center

(10:00-20:00)  
Box Office only | 546-2 Yamabushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

### Ticket Pia (Japanese only)

Online | <http://t.pia.jp>  
Tel | 0570-02-9999

Online ticket services available 24 hours a day, 7 days a week.

### Tickets Sets

Our ticket sets offer great deals for audiences who would like to attend more than one performance.

- Available for advance tickets only. Cannot be used to purchase tickets on the door.
- Limited to one use per performance.
- Valid only for the ticket-holder

### Festival Pass [limited numbers] Sold out

Festival Pass | ¥23,000  
Student Festival Pass | ¥13,000  
You can see all 10 performances in the official program. (Limited to one performance/show per production.)

### 3 Performances Pass

3 Performances Pass | ¥7,500  
Student 3 Performances Pass | ¥6,000  
Choose 3 performances and see them all with the same pass.

### Family Ticket

Family Ticket (1 parent and 1 child of high school age or younger) | ¥3,500  
Discounted tickets for families are available for Tomomi Adachi & contact Gonzo's *Teslan Run*

Available at Kyoto Experiment Ticket Center

### Repeater's Discount

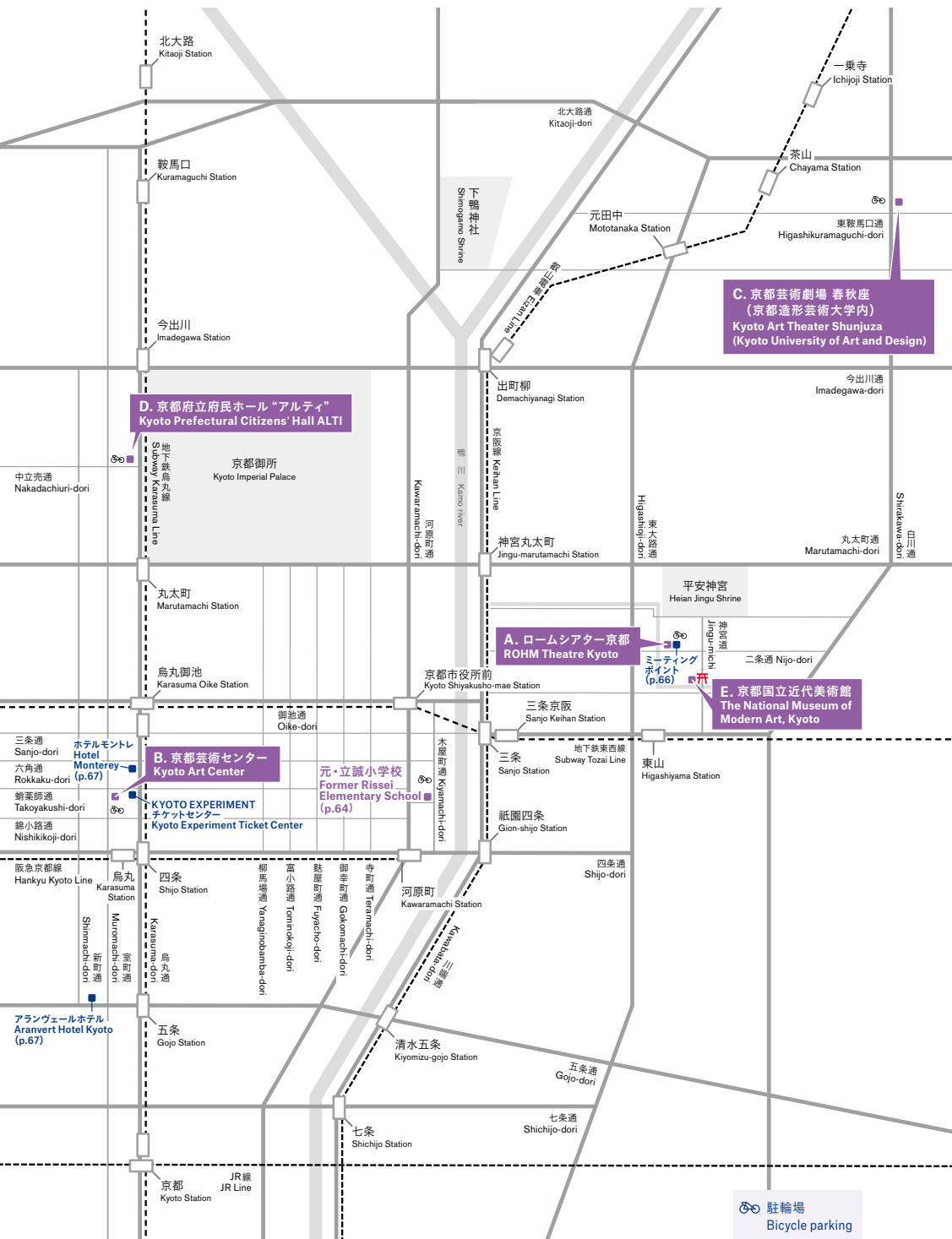
Show your ticket stub from a previous performance at the box office to claim a ¥500 discount off a full-price ticket for an Official Program or Showcase: Forecast performance.

Valid for: Kyoto Experiment 2016 Spring Official Program, Showcase: Forecast, Fringe: Open Entry Performance

1 stub is valid for 1 person and a one-time discount. Only valid for a full-price ticket on the day of the performance when not sold out.



# 会場アクセス / Access



## A ロームシアター京都 / ROHM Theatre Kyoto

京都市左京区岡崎最勝寺町13  
13 Okazaki Saishoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto  
Tel 075-771-6051  
<http://rohmtheatrekyoto.jp>

- ・京都市バス32、46系統、京都岡崎ループ「岡崎公園 ロームシアター京都・みやこめっせ前」下車すぐ
- ・京都市営地下鉄東西線「東山駅」下車徒歩約10分
- ・駐車場なし、駐輪場あり
- ・Kyoto City Bus Nos.32, 46 or Kyoto Okazaki Loop: Okazaki Park/ROHM Theatre Kyoto/ Miyako messe mae
- ・10 minutes' walk from Higashiyama Station (Kyoto Municipal Subway Tozai Line)
- ・No parking available for cars. Parking available for bicycles.



photo: Shigeo Ogawa

## B 京都芸術センター / Kyoto Art Center

京都市中京区室町通蛸薬師下る山伏山町546-2  
546-2 Yamabushiyama-cho, Nakagyo-ku, Kyoto  
Tel 075-213-1000  
[www.kac.or.jp](http://www.kac.or.jp)

- ・京都市営地下鉄烏丸線「四条駅」、阪急京都線「烏丸駅」下車、22・24番出口より徒歩5分
- ・駐車場なし・駐輪場あり
- ・5 minutes' walk from exits 22 and 24 of Shijo Station (Kyoto Municipal Subway Karasuma Line) and Karasuma Station (Hankyu Kyoto Line).
- ・No parking available for cars. Parking available for bicycles.



## C 京都芸術劇場 春秋座 (京都造形芸術大学) / Kyoto Art Theater Shunjuza (Kyoto University of Art and Design)

京都市左京区北白川瓜生山2-116 京都造形芸術大学内  
2-116 Uryuyama Kitashirakawa, Sakyo-ku, Kyoto  
Tel 075-791-8240  
[www.k-pac.org](http://www.k-pac.org)

- ・京都市バス3, 5, 204系統「上終町京都造形芸大前」下車すぐ
- ・叡山電車「茶山駅」下車、徒歩約10分
- ・駐車場なし・駐輪場あり(原付・バイクはご遠慮下さい)
- ・Kyoto City Bus: Nos. 3, 5 or 204 to Kamihatecho Kyoto Zoukei Geidai-mae
- ・10 minutes' walk from Chayama Station (Keihan Railway Eizan Line)
- ・No parking available for cars. Parking available for bicycles (but not for motorbikes or mopeds)



photo: Toshihiro Shimizu

## D 京都府立府民ホール「アルティ」 / Kyoto Prefectural Citizens' Hall ALTI

京都市上京区烏丸通一条下ル龍前町590-1  
590-1 Tatsumae-cho, Kamigyo-ku, Kyoto  
Tel 075-441-1414  
[www.alti.org](http://www.alti.org)

- ・京都市営地下鉄烏丸線「今出川駅」下車、6番出口より南へ徒歩5分
- ・駐車場なし・駐輪場あり
- ・5 minutes' walk from Imadegawa Station (Kyoto Municipal Subway Karasuma Line)
- ・No parking available for cars. Parking available for bicycles.



## E 京都国立近代美術館 / The National Museum of Modern Art, Kyoto

京都市左京区岡崎円勝寺町  
Okazaki Enshoji-cho, Sakyo-ku, Kyoto  
Tel 075-761-4111  
[www.momak.go.jp](http://www.momak.go.jp)

- ・京都市バス「岡崎公園 美術館・平安神宮前」下車すぐ
- ・京都市営地下鉄東西線「東山駅」下車徒歩10分
- ・駐車場、駐輪場なし
- ・Kyoto City Bus: Okazaki Park/Bijutsukan/Heian Jingu-mae
- ・10 minutes' walk from Higashiyama Station (Kyoto Municipal Subway Tozai Line)
- ・No parking available.



カレンダー / Calendar

3/March

	アクセス ACCESS	5 sat	6 sun	7 mon	8 tue	9 wed	10 thu	11 fri	12 sat	13 sun	14 mon	15 tue	16 wed	17 thu	18 fri	19 sat	20 sun	21 mon Holiday	22 tue	23 wed	24 thu	25 fri	26 sat	27 sun	上演時間 Duration	
1	ダヴィデ・ヴォンパク David Wampach 渴望 URGE	A	18:00 ●	20:00	20:00																				55 min.	
2	地点 Chiten スポーツ劇 Sports Play	A	20:00	18:00 ●																					105 min. (予定)	
3	チョイ・カファイ Choy Ka Fai ソフトマシーン:スルジット&リアント SoftMachine: Surjit & Rianto	B						19:30	15:00 □●	19:00															100 min.	
	【展示   Exhibition】 ソフトマシーン SoftMachine	B	10:00-20:00																					-		
4	松本雄吉×林慎一郎 Yukichi Matsumoto & Shinichiro Hayashi PORTAL	A							19:00	15:00 □●															120 min. (予定)	
5	大駱駝艦・天賦典式 Dairakudakan Temptenshiki ムシノホシ Space Insect	C											19:00	15:00 □●											90 min.	
6	チェルフィッチュ chelfitsch 部屋に流れる時間の旅 Time's Journey Through a Room	A														20:00	20:00	20:00	15:00 ●	12:00 (追加公演) ●	12:00 ●				90 min. (予定)	
7	トリシャ・ブラウン・ダンスカンパニー Trisha Brown Dance Company Trisha Brown: In Plain Site	E															19:00	19:00	19:00						60 min.	
8	マヌエラ・インファンテ/テアトロ・デ・チレ Manuela Infante / Teatro de Chile 動物園 Zoo	B																					20:00	20:00 □	17:00 ●	60 min.
9	足立智美 × contact Gonzo Tomomi Adachi & contact Gonzo てすらんばしり Teslan Run	D																						14:00 ●	14:00 □●	60 min. (予定)
10	ボリス・シャルマツ / ミュゼ・ドゥ・ラ・ダンス Boris Charmatz / Musée de la danse 喰う manger	C																						17:00 ■●	14:00 ■●	90 min. (トーク含む)
11	researchlight 河童よ、ふたたび In search of Kappa	A,B	京都芸術センター会場は、10:00-20:00																					-		
	ショーケース「Forecast」あごうさとしプログラム Showcase: Forecast Satoshi Ago Program	B															13:00 ●	15:30 ●								
	ショーケース「Forecast」国枝かつらプログラム Showcase: Forecast Katsura Kunieda Program	B															16:00 ●	13:00 □●								
	フリンジ「オープンエントリー作品」 Fringe "Open Entry Performance"		詳細は公式ウェブサイト[www.kyoto-ex.jp]をご覧ください																							
	関連イベント		搬入本番 15:00-										Next Producer's College 13:00-					シンポジウム 10:00-			ダヴィデ・ヴォンパク トーク 18:00-					
	提携プログラム 搬入プロジェクト-京都・岡崎計画-	A	物体展示																							

※ 各演目「□」がついた回は終演後ポスト・パフォーマンス・トーク、「■」がついた回は上演前にプレ・パフォーマンス・トークを予定。 □ Post-Performance talk ■ Pre-Performance talk  
※ 各演目「●」がついた回は託児サービスがご利用いただけます(有料:1,500円、要事前予約)。予約申込みの締切は各公演の4日前となります。予約・問合せ: KYOTO EXPERIMENT事務局 075-213-5839 (平日11:00-19:00)

---

## KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2016 SPRING

開催期間：2016年3月5日-3月27日

会場：ロームシアター京都、京都芸術センター、京都芸術劇場 春秋座、京都府立府民ホール“アルティ”、京都国立近代美術館、ほか  
公式プログラム：ダヴィデ・ヴオンパク、地点、チョイ・カファイ、松本雄吉×林慎一郎、大駱駝艦、チェルフィッチュ、トリシャ・ブラウン・ダンスカンパニー、マヌエラ・インファンテ/テアトロ・デ・チレ、足立智美 × contact Gonzo、ボリス・シャルマツツ/ミュゼ・ドゥ・ラ・ダンス、researchlight

### Kyoto Experiment: Kyoto International Performing Arts Festival 2016 Spring

Dates: March 5 - March 27, 2016

Venues: ROHM Theatre Kyoto / Kyoto Art Center / Kyoto Art Theater Shunjuza / Kyoto Prefectural Citizens' Hall ALTI / National Museum of Modern Art, Kyoto / and other locations

Official Programs: David Wampach, Chiten, Choy Ka Fai, Yukichi Matsumoto & Shinichiro Hayashi, Dairakudakan, chelfitsch, Trisha Brown Dance Company, Manuela Infante / Teatro de Chile, Tomomi Adachi & contact Gonzo, Boris Charmatz / Musée de la danse, researchlight

---

KYOTO EXPERIMENT | 京都国際舞台芸術祭実行委員会事務局  
Kyoto International Performing Arts Festival Executive Committee Office

京都市中京区烏丸通蛸薬師下ル手洗水町645 flowing KARASUMA 2F  
2F flowing KARASUMA, 645 Tearaimizu-cho, Nakagyo-ku, Kyoto

Tel | +81(0)75-213-5839  
E-mail | info@kyoto-ex.jp  
www.kyoto-ex.jp

発行日 | 2016年2月11日  
Published February 11, 2016

アートディレクション：原田祐馬 (UMA/design farm)  
デザイン：山副佳祐 (UMA/design farm)  
編集：多胡真佐子、西谷枝里子、和田ながら  
資料英文和訳：板井由紀  
和文英訳：ウィリアム・アンドリュース  
仏文和訳：奥平敦子 (p.14)、中筋朋 (p.50)  
西語和訳：二村奈美 (p.42)  
西語英訳：ゴンザロ・ロベルド (p.43)  
フェスティバルメインビジュアル撮影協力 (p.1、pp.10-11、pp.56-57、pp.70-71) : contact Gonzo

印刷・製本：柏村印刷株式会社

Art direction: Yuma Harada (UMA/design farm)  
Design: Keisuke Yamazoe (UMA/design farm)  
Editing: Masako Tago, Eriko Nishitani, Nagara Wada  
Japanese translation from English: Yuki Itai  
English translation from Japanese: William Andrews  
Japanese translation from French: Atsuko Okudaira (p.14), Tomo Nakasuji (p.50)  
Japanese translation from Spanish: Nami Futamura (p.42)  
English translation from Spanish: Gonzalo Robledo (p.43)  
Festival photography cooperation (p.1, pp.10-11, pp.56-57, pp.70-71) : contact Gonzo

Printing: KASHIMURA CO., LTD.

©KYOTO EXPERIMENT

---

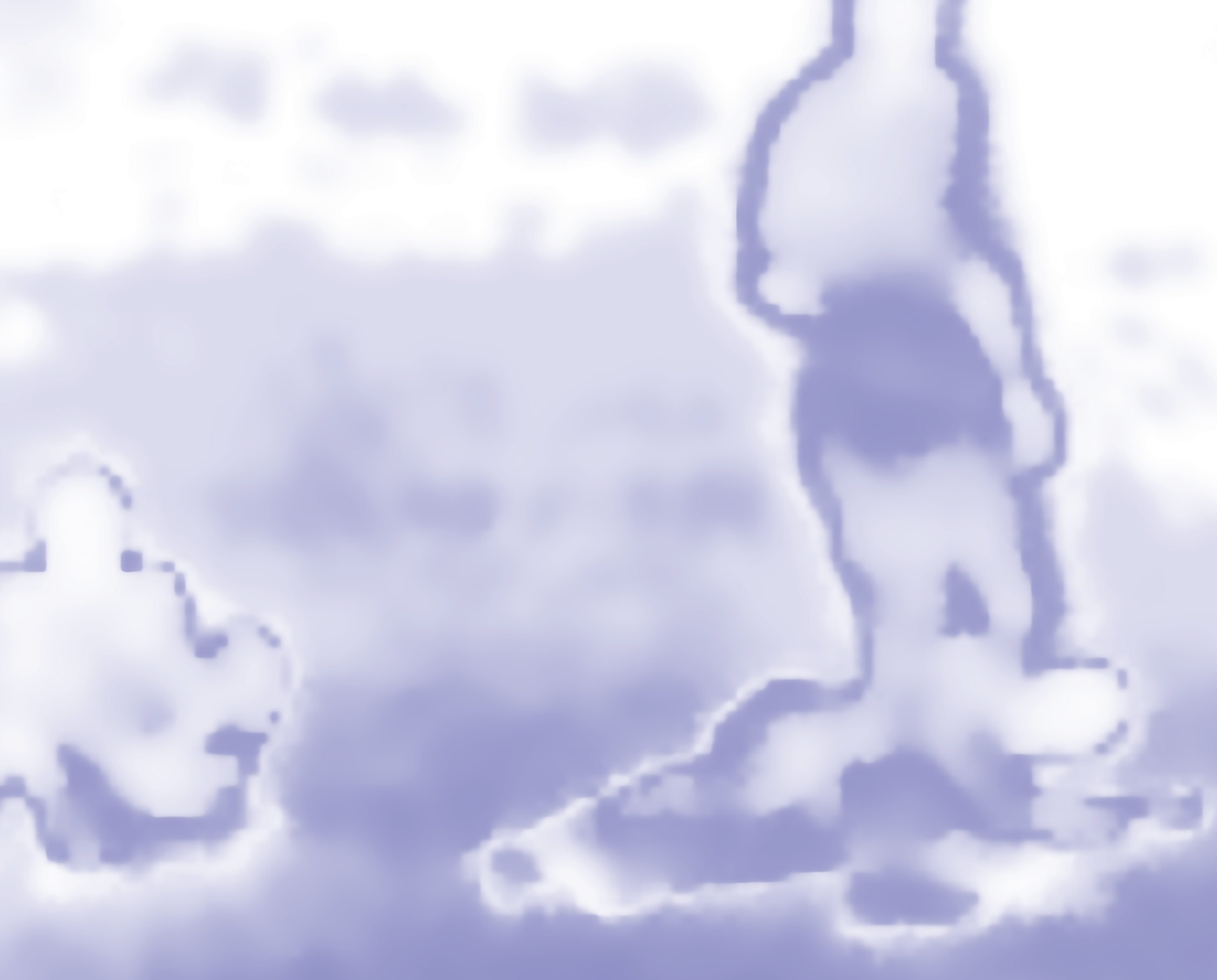
#### ロゴについて

KYOTO EXPERIMENTのキーワードである「出会い / 衝突 / 対話」がぶつかり合い、外へ広がろうとする様子をビジュアル化したロゴ。600種類を越えるパターンがあり、進化する創造の場を表現している。

Kyoto Experiment's logo is a visual representation of the confrontation and expansion of its three keywords: encounter, collision, and dialogue. It is a design with more than 600 forms, which stand for the evolution of the creative spaces.

logo design: UMA/design farm





**KYOTO EXPERIMENT 2016** SPRING  
京都国際舞台芸術祭

ページ数/Page	行、掲載箇所/Line	誤/Error	正/Correct
p.61	03 サファリ・P	『欲望という名の電車（作：テネシー・ウィリアムズ）』	『欲望線』
p.61	03 Safari・P	<i>A Streetcar Named Desire</i>	Desire Line
p.64	Next Producer's College	ゲスト（予定）：イム・インザ（ソウル・マージナル・シアター・フェスティバル、アーティストックディレクター）、ヴェロニカ・カウフ＝ハスラー（シュタイヤーマルクの秋のフェスティバルディレクター） Speakers (TBC): Inza Lim (Artistic Director, Seoul Marginal Theatre Festival), Veronica Kaup-Hasler (Director, steirischer herbst festival)	ゲスト：イム・インザ（元ソウル・マージナル・シアター・フェスティバルディレクター、ソウル文化財団カルチュラルボードメンバー）、ヴェロニカ・カウフ＝ハスラー（シュタイヤーマルクの秋のフェスティバルディレクター） Speakers: Inza Lim (Former Director of Seoul Marginal Theatre Festival, Cultural Board Member of Seoul Foundation for Arts and Culture), Veronica Kaup-Hasler (Director, steirischer herbst festival)

\*サファリ・P上演目の変更について

上演権などをめぐる問題で本作の上演が見送られ、同日程で山口茜作・演出の新作『欲望線』を上演いたします。

詳細はサファリ・Pウェブサイトをご覧ください。 <http://toriko-a.sakura.ne.jp/wp01/>